

特集

クライン・ダイサム・アーキテクト

Klein Dytham architecture

works: Vrooom! / ヴローム・プレッツェル / インディペンデント・カンパニール / Kanbanヘルター / B&H / 他
KDa Web / KDaShop

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第429号2000年6月1日発行(毎月1回1日発行)
昭和40年2月5日第三種郵便物認可

0006

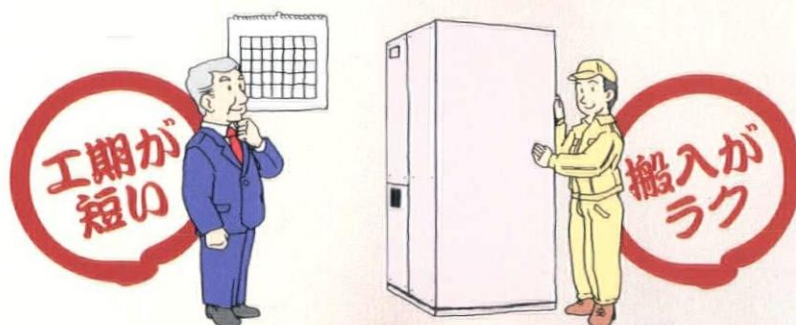
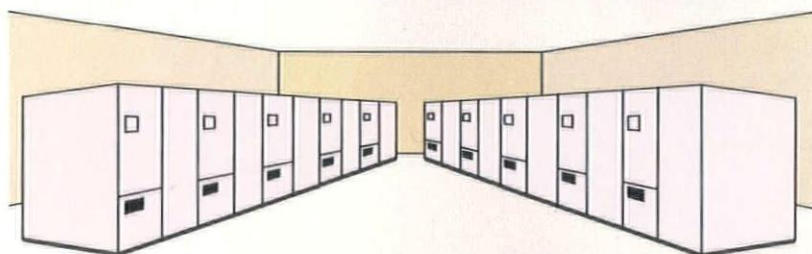
Monthly Journal of Art and Architecture

SD



ビル空調機リニューアル 合理化委員会の評決です。

スーパーアロエスの ロッカー設置



YAZAKIの吸収冷温水機スーパーアロエスは、コンパクトなユニット設置タイプです。場所を取らず、ロッカーのように整然と並べて設置できます。エレベーターや階段から容易に搬入でき、工期の大幅な短縮が可能。ビル空調機のリニューアルに最適です。

ユニット形冷温水機のパイオニア

ロッカー設置に最適な スーパーアロエス

矢崎総業株式会社

空調機器事業部：〒435-8575 静岡県浜松市子安町1370 TEL053(461)5112

仙台支社 022(284)9115 東京支社 03(3298)3140 名古屋支社 052(833)8415 北陸支社 0764(41)6516
大阪支社 06(6458)4825 中国支社 082(923)2115 四国支社 087(833)3336 九州支社 092(411)4835

20歳過ぎたら 健診を。 人間の話では ありません。



働きざかりのビルを診断、中から元気にする。関電工でリニューアル。

コンピューターや通信機器など、加速する技術の進歩に追われて息切れしているのは、私たち人間だけではありません。あなたが働いているそのビルも、電気配線など様々な設備の面で、中から疲れやすくなっています。だから、関電工でリニューアルを。ビルの内部を診断した上で、設計、施工してビル内環境をリフレッシュします。関電工はビルの設備に関するプロフェッショナル。新しいビルの電気設備から、今あるビルのメンテナンスまで、最高の技術力でお応えします。ビルをきちんと長生きさせるために、ビルのドクター関電工にお任せください。

ビルの誕生からリニューアルまで

総合設備の

関電工

本社〒108-8533 東京都港区芝浦4丁目8番33号

もう一つのカジマを知ってください。

高層のビルを建てる。巨大なダムを造る。長い海底トンネルを掘る。確かにカジマの仕事ですが、しかしそれは、

ほんの一面にすぎません。私たちが四六時中生活する住まいの、ここにも、あそこにも、意外なところにカジマの仕事が隠れています。毎日が健康で、安心で、しかも快適に暮らせるために、

マンションや住宅用につくられた沢山の建材や工法たち。環境に配慮しつつ、これからの高齢化する社会に向けて、カジマは何ができるのか。そんな気持ちで、住空間に役立つ商品を開発しています。



健康に暮らせる住まいづくりへ。

住まいは健康を大きく左右します。湿気や結露、カビなどの発生は住まいを損なうだけでなく、そこに暮らす人々の健康にも影響を与えます。鹿島は、空気中の水分を吸ったり吐いたり、脱臭機能ももつ天然素材「ゼオライト」に注目。耐火性にも優れたこのゼオライト建材は、室内の湿度を一年中快適な状態に保ち、健康住宅を実現する夢の建材です。



自然を身近に感じる快適環境づくりへ。

ガーデニングを楽しむ人がたいへんな勢いで増えています。庭やベランダで自然を楽しむのはとても素晴らしいこと。鹿島の「ケイソイル」「草花名人」は、バルコニーや屋上庭園にぴったりの、軽くて保水性の高い人工土壌です。重さの条件が厳しい屋上やベランダ、バルコニーでも、緑豊かな自然を育てることができ、生活に潤いを与えます。



ひとのふだんへ。



地震や火災に負けない安心空間づくりへ。

住まいを考えると、地震への対策が不可欠です。壊れない住まいを目指すのであれば、構造を強くすれば解決します。しかし、家具の転倒などによる被害は防ぐことができません。鹿島の「戸建住宅免震システム」は、建物と基礎との間に設置するボールベアリングを活用。建物に伝わる地震エネルギーを1/5以下に減らし、安全で安心な住まいを実現します。



100年をつくる会社

in 鹿島

KAJIMA CORPORATION

本社:東京都港区元赤坂1-2-7 〒107-8388

ホームページ <http://www.kajima.co.jp/>

四季宴会

KARUIZAWA
MEETING
& PARTY



軽井沢
ホテル鹿島ノ森

ホテルオークラチェーン

ご予約お問い合わせ:

ホテル鹿島ノ森予約係

☎03(3478)6220

現地☎0267(42)3535(代)

FAX: 0267(42)5335



ロビーラウンジ

ようこそ、クラシカル・エレガントな世界へ。

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。

ドアマンに迎えられホテルに一步脚を踏み込めば、
あなたの新しい物語がはじまります。

(客室&施設)

●ビジネス向き、女性向き、観光、ファミリー、個人滞在用と、目的に応じて選べる全404室。
(シングル¥15,000～ ツイン¥25,000～) ●ジャグジー、ヒーティングルームなどを付帯した
2,000㎡の“ガーデンプール”。●クラシカルなインテリアや絵画で統一された趣のあるロビー。
●個性的なステンドグラス、パイプオルガンを配したチャペル(3F)。ガーデンプールの一角
に設けられたガーデンチャペル(5F屋外)。厳肅な神殿(八幡殿＝やひろでん)(3F)。●最
大800名様まで可能な大宴会場(永代)、中、小、さまざまな8つの宴会場。●最新設備を完
備したビジネスセンター。●心身の健康管理と増進、心の交流を目的とした新しいタイプの
ヘルスクラブ“ジ・イースト”。●都内初のホテル直結型多目的ホール“イースト21ホール”。

(レストラン&バー)

●フランス料理を主としたコンチネンタル料理……………【プラスリー ハーモニー(2F)】
●本格的広東料理……………【中国料理 桃園(2F)】
●アフリカンムードのメインバー……………【バー エレファント(2F)】
●旬の素材が織りなす食の芸術……………【日本料理 さざんか(21F)】
●四季折々の味覚…【鉄板焼 木場(21F)】 ●心に残る夜景…【カクテルラウンジ パノラマ(21F)】



チャペル

HOTEL
East
21
T O K Y O

地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。
東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

ホテル イースト21東京

〒135-0016 東京都江東区東陽6-3-3
TEL 03(5683)5683(代) FAX 03(5683)5775



大興物産の海外建材シリーズ

No.6 木製品(ツーバイフォー, 集成材)



大興夢科山荘

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネーションを致します。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。
〒107-8318 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL 03-5474-6054 FAX 03-5474-6386

建設資機材の総合商社 鹿島グループ 大興物産株式会社

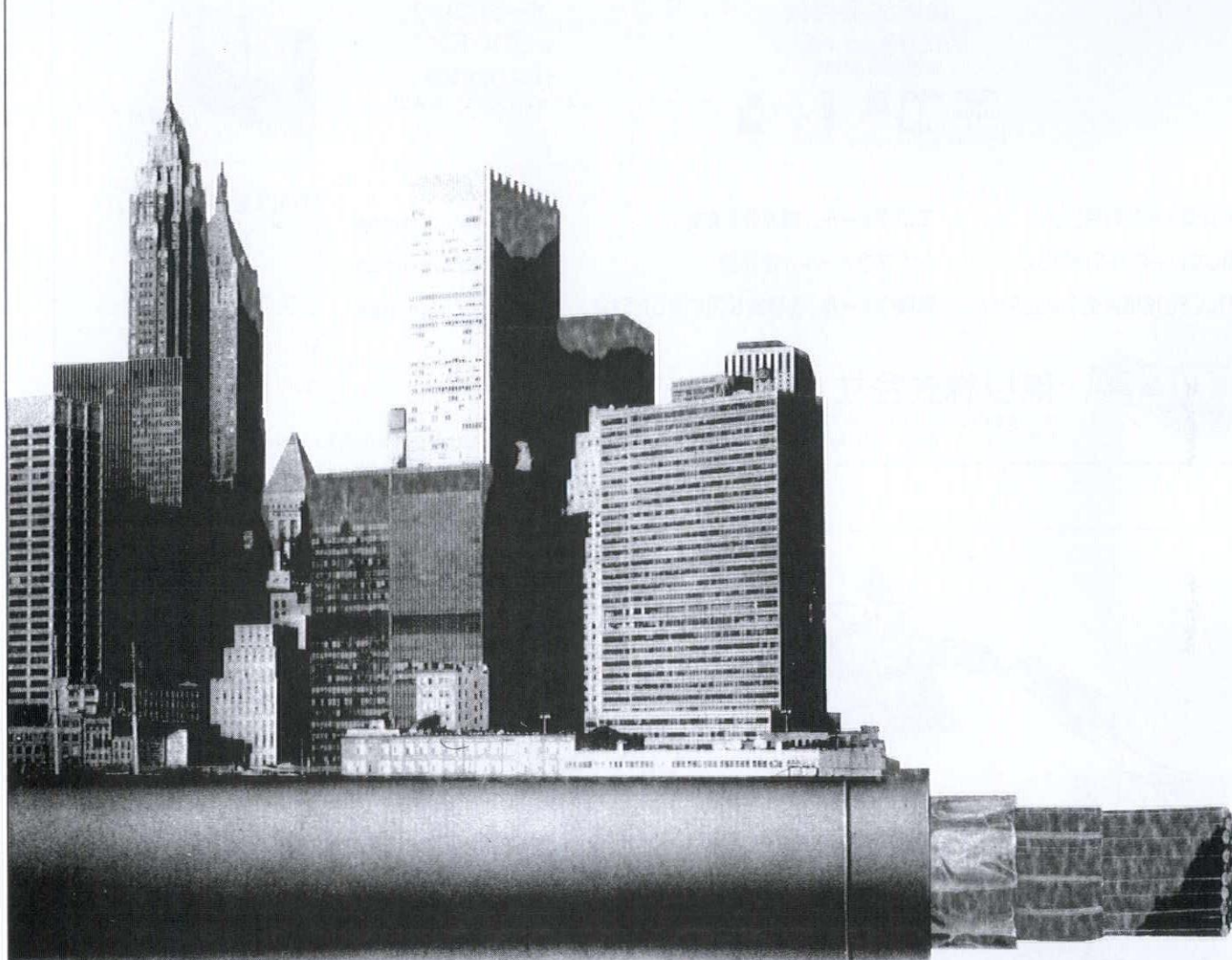
本 社 〒107-8307 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本 社 ☎(03)5474-6060 FAX(03)5474-6076
東京支店 ☎(03)5474-6072 FAX(03)3423-1915
横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996
名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179
大阪支店 ☎(06)6762-5681 FAX(06)6762-1074

札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074
東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867
関東営業所 ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719
北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248
広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270

四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
シンガポール
オフィス ☎65-3440590 FAX65-3446714

ビルにも神経があります。



古いビルも最新のビルも確実な電気工事で支えています

ビルにとって電気系統の働きは、人体にはりめぐらされた神経の働きに似ています。外部の情報を収集したり、整理して送るなど、まさにコントローラーの役目をもっているからです。とくにこれからの高層ビルは、複雑な建築技術が必要なだけに、ビルの中樞神経といわれる電気系統の安全性、合理性、経済性などは、ビルがより良く機能するうえで欠かすことのできない条件です。私ども弘電社は1本の配線にも、細心の注意を払って確実な設計、施工を行なっています。

電気工事のバイオニア



株式会社 弘電社

東京都中央区銀座5-11-10
TEL.03(3542)5111

東リは真の環境対応壁紙を目指し、

ファイブスター

5つ星コンセプトに基づいた「環境壁紙1000」を提案します。

安全品質

全点安全品質マークを取得。



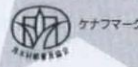
廃棄物減量

環境保護に貢献する「エコウォール®」110点。



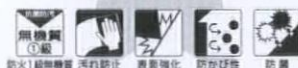
資源保護

枯渇しない天然資源「ケナフ」を使用した「ケナフウォール®」100点。



快適生活機能

優れた機能性を充実させ
快適生活を保証。



オーガニック デザイン

トレンド性を重視し
ファッションライフを演出。



好評
発売中

再生資源を有効利用した……………エコウォール。「機能性も充実」

1,090円/m² (税抜き材料価格)

枯渇しない一年草を使用した……………ケナフウォール。「世界初」

1,090円/m² (税抜き材料価格)

燃えにくさと環境保全を両立させた…無機ウォール「各種施設用に適した52点」

1,090円/m² (税抜き材料価格)

TOLI ECO SPIRIT

東リ エコ スピリット



明日の地球を思うこと

※このサンプル帳に掲載の商品はすべて
東リ エコスピリット対応商品です。



東リ株式会社

東日本営業開発部 TEL.03 (5403) 2067 西日本営業開発部 TEL.06 (6943) 1645
札幌ショールーム TEL.011 (214) 8313 東京ショールーム TEL.03 (5421) 3711 名古屋ショールーム TEL.052 (745) 1691 大阪ショールーム TEL.06 (6943) 1649

[URL] <http://www.toli.co.jp>

最先端のハーモニー。

さまざまな先端技術が調和して、「快適」という名のハーモニーを奏でる。トイエネックのエンジニアリングは、まさにそんなイメージです。電気設備をはじめ、情報通信・冷暖房・空調・防災設備など…。システム設計から施工・保守まで、高度で総合的な技術力を活かし、全国主要都市を拠点に幅広いネットワークでみなさまにお応えしています。オフィスビルやマンション、ホテル、工場、さらにはコミュニティ施設。あらゆるスペースを、心地よい技術のハーモニーで包み込みたい。インテリジェント&ヒューマン。私たちは、トイエネックです。



いろんな技術を結んで、トータルに考える。
トイエネック エンジニアリング

先端技術で、システムする。

TOI ENETC

株式会社 トイエネック

本 店 / 名古屋市中区栄1-20-31 〒460-0008 ☎(052)221-1111
東京本店 / 東京都豊島区東横1-3-11 〒170-0002 ☎(03)5395-7111
大阪本店 / 大阪市淀川区新北野3-8-2 〒532-0025 ☎(06)6305-2181
名古屋支店 / 名古屋市中区千代3-1-32 〒460-0011 ☎(052)659-1123

KOKUYO

高齢者福祉施設は「居住空間」。 かかわる人への 思いやりがテーマです。

高齢者福祉施設＝居住空間という観点のもと、
〈安全性〉〈効率性〉〈経済性〉〈清潔性〉の
4つをコンセプトに

介護者をサポートするシステムと家具・什器・備品をご提案。

Elder Care & Amenity — 介護する側とされる側の
よりよい関係づくりをコクヨがお手伝いします。

Elder Care & Amenity

コクヨ株式会社

〒537-8686 大阪市東成区大今里南6丁目1番1号

TEL (06) 976-1221

ホームページURL <http://www.kokuyo.co.jp>

お問い合わせ、ご相談はフリーダイヤル(全国共通)

お客様相談室 ☎ 0120-201594

お客様相談室FAX ☎ 0120-060660

夢×技=無限大

YUME 夢 TRONICS

安らぎと喜びがある。
生み出すための第一歩は
夢からもらった。
形を築くための第一歩は
技からもらった。
ふたつの可能性が出会う時
私たちのフィールドは
無限大です。

何時もあなたの街で、
お会いしている
クリハラ。
私達の生活環境に必要な
電気設備・エネルギー
情報通信・環境の分野で
企画、設計、施工、保守に
わたる一貫したシステムで
事業を展開しています。



創業1919 あなたの街でお会いしています

K 栗原工業株式会社

本社／〒530-0017 大阪市北区角田町1-1(東阪急ビル) TEL 06(6313)1101
東京本店／〒105-0012 東京都港区芝大門1-4-8(浜松町清和ビル) TEL 03(3432)1901

より快適な
水環境を
めざして。



文明の栄えた土地には、必ずといっていいほど豊かな水がありました。
自然に恵みを与え、生命を育み、人々の暮らしをうるおしてくれる“水”。
地球規模の環境汚染が問題となっている今、
西原は、都市のより快適な水環境の創造を通して、
社会に貢献してまいります。

水と人のあいだに
NISHIHARA

株式会社 西原衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18 TEL.(03)3452-7441大代表 支店/札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋 事業内容/給排水衛生設備、冷暖房設備、消火設備の設計、施工

0007

特集

ツール・ド・ロマネスク 中世の光と空間II: フランス西部巡礼

フランス中南部のロマネスク建築を紹介した前回特集（9610号）につづき、今回はフランス西部の巡礼路にそって中世教会建築を取り上げる。ブルゴーニュのヴェズレーを起点とし、ボワトー、ボルドー地方を経てスペインとの国境・ボーヘと南下してゆくルート、あるいは南仏アルルからボーヘとつづくルート、各地の教会は、ドーム、壁画、彫刻といった多様な地方色に彩られ、堅固で質素というロマネスクに対する一般的なイメージを揺さぶる。さらに、教会修復の歴史と現状、ブルゴーニュやボルドーの料理・ワインといった側面にも視野を広げ、ロマネスクの文化へ多角的に光をあてる。

●文＝櫻井義夫（建築家）、羽生修二（東海大学教授）、フィリップ・ウダン（修復建築家）、長塚安司（東海大学教授）、田窪恭治（美術家）、山田 健（ワイン・ライター）、他

●写真＝堀内広治

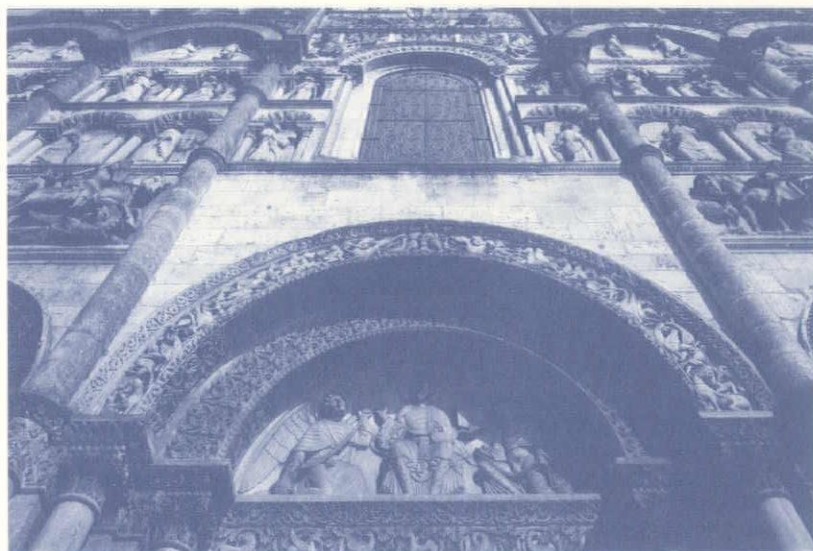
●作品＝サント・マリー・マドレーヌ聖堂（ヴェズレー）、サン・ラザール教会（オータン）、サン・フィベール教会（トゥルニユ）、サン・ピエール・エ・ポール教会（モンソー・レトワール）、サン・マルタン教会（シャペーズ）、サン・イレール教会（スミュール・アン・ブリオネ）、サント・クロワ・エ・サント・マリー教会（アンジー・ル・デュク）、ノートル・ダム・ル・グラン僧会教会（ボワチェ）、サン・ニコラ教会（シヴレー）、サント・マリー・オー・ダム修道院（セント）、サン・ピエール教会（オネイ）、サン・テチェヌヌ大聖堂（カオール）、サン・ピエール大聖堂（アングレーム）、サン・ジル礼拝堂（モントワール・シュール・ロワール）、サン・ジュネ教会（ラヴァルダン）、他

トピックス：

水戸岡鋭治の仕事 インタビュー＝水戸岡鋭治

玉座考——古代のスツールにみる玉座の性格 文＝服部等作

〈サン・ピエール大聖堂〉アングレーム
写真＝堀内広治



0004

特集

歴史的都市を読む フィールドワークによる都市解析

21世紀を迎える今、近代都市への反省から風景の価値や意味に関心が高まっている。こうした状況の中、再び歴史的都市に注目し、古くからの都市文明を誇ってきた地域を対象にして、「都市を読む」比較を通じてその魅力の源泉を探る。スペイン、アンダルシア地方のイスラムの影響を示すアルコス。イタリアの中世・ルネサンス都市フェラーラ、トルコの典型的なキャラバン都市ギョイヌック、そして中国福建省の交易都市廈門。これらの歴史的都市を取り上げ、都市の形成、空間構造の魅力についてフィールドワークの成果を生かしながらレポートする。こうした「都市を読む」作業は、今後の日本の町を見直す上でも大きな刺激になるであろう。

●対談＝長尾重武×陣内秀信

●監修＝陣内秀信

連載：

カルチャー・カフェ——今月の演劇・音楽

文＝原 研哉、ピーター・バラカン

定価＝2000円／本体1905円

0005

特集

ヒューマノイド・ インターフェイス

メディア化されたインターフェイス。それらは、センサー・情報処理能力・運動能力を新たに備えて人の身体と関わってくる。その時、インターフェイスと身体の仕事の分の取り方が変わったり、あいまいになったりする。今まで身体が行ってきたことをインターフェイスがまかなうようになる。あるいは身体の不足分を補完したり、身体を拡張させたりもする。このようなメディア化をともなったテクノロジーと身体の新たな関わり方を考察する。

●ヒューマノイド・プロダクツ 文＝小田切博

●サイボーグ・インターフェイス 文＝竹村真一

●知性化するインテリア 文＝小田切博、深山美都里

●身代わりのメカトロニクス 文＝中田薫、竹村真一

●対談＝川崎和男×竹村真一

拡張する身体、変化するテクノロジー

●デザイナーズ・インタビュー：インターフェイス・デザインの必然性 文＝岡正明、元永二郎

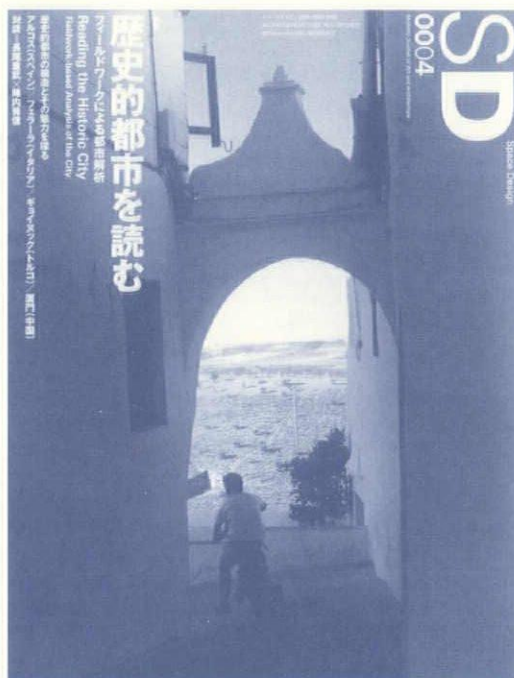
●論文＝石井裕

タンジブル・ビット：人とデジタル情報と建築空間のシームレスなインターフェイスを目指して

●文＝松井龍哉、高羽泰雄、中嶋泉、清水直子、大草次郎

●編集協力・文＝小田切博、深山美都里、竹村真一

定価＝2000円／本体1905円



鹿島出版会

東京都港区赤坂6-5-13

電話：03-5561-2550

振替：00160-2-180883

Home Page Address：

http://www.kajima-publishing.co.jp/

index.htm

年間定期購読料

26,000円（特別定価号十消費税、送料込み）

SD

Space Design

SDバックナンバー常備店

東京

八重洲ブックセンター 03-8231-8203

三省堂本店（神田）03-3233-3314

書泉グランデ 03-3295-0011

紀伊国屋本店 03-3354-0131

大盛堂書店 03-3463-0511

大阪

旭屋書店本店 99-999-9999

柳々堂 06-443-0167

札幌／旭屋書店 011-241-3007

横浜／有隣堂本店 045-261-1231

京都／大龍堂書店 075-231-3036

9807 シーラカンス 2600円
彼等の12年間の建築活動の軌跡を、作品紹介を中心に振り返る。作品＝吉備高原小学校、大阪市水上消防署、（仮称）外ヶ岡交流拠点施設、他。論文＝原広司、土居義岳、インタビュー＝山本理顕

9808 光のデザイン・ヴォキャブラリー：LPAの仕事1990-1998 2500円
LPAのデザイン言語を40に厳選して紹介する本書は、光が生み出す空間を全般的に考察する本格的な照明バイブルである。文＝磯崎新、面出薫

9809 ティーデルが創る風景：細部に宿る美と技巧 2000円
建築作品のディテールを写真と図面で紹介する。宮崎浩／Plants Associates、渡辺明設計事務所、竹中工務店、谷口建築研究所、KAJIMA DESIGN、他。

9810 オフィス環境の近未来 2000円
最新のオフィス環境を、事例を中心に紹介する。作品＝電通インタラクティブ・ソリューション・センター、他。文＝仲隆介、他。[京町屋再生の手法——時を超えて生きる空間を求めて]

9811 「白」と「透明」の詩：モダンデザインの秀作135 3000円
白い陶磁器と透明ガラスで出来た日常生活の中の小モノたち135点を紹介する。カシミール・マレービッチ、ゲートルード・ヴェースガルト、柳宗理、他。

9812 SDレビュー1998 2000円
第17回SDレビュー誌上発表
小特集4題：[シャルロット・ベリアン] [“ハブニング”展] [アアルトの空間構成] [メタルシート・ストラクチャーによる造形秀平の近作]

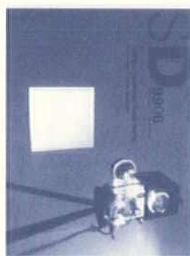
9901 環境共生の現在 2700円
プロジェクトを紹介しながら近年の動向を俯瞰し、次世代のヴィジョンを示唆する。エムシャーパーク、東京ガス（アースポート）、世田谷区環境共生住宅、2005年国際博覧会構想案、他。

9902 ダッチ・モデル：建築・都市・ランドスケープ 2000円
オランダの都市・社会のシステムを5つのキーワードによって探る。OMA、MVRDV、West8、クーン・ファン・フェルゼン、メカノ、ケース・クリスティアーンス、他。

9903 木の空間：木素材による快適建築 2000円
次世代スタンダードを示唆する木の使われ方を紹介する。趙海光、インテンシオナリーズ、河西立雄、葛西渥、みかんぐみ、H DESIGN、他。

9904 ガウディの愛弟子ジュジョールの夢緯 2000円
ジュジョールの遺した作品を、写真とオリジナル・ドローイングで紹介する。撮影＝鈴木久雄、文＝丹下敏明、他。[ドナルド・ジャッド：空間と認識のコンシステンシー]

9905 挑発するマテリアリティ：素材の進化とデザインの可能性 2500円
国内外における素材と技術のデザイン事例を取り上げながら、そのデザインに隠された素材の応用の「手法」、「技術」を分析する。素材史年表、素材地図1999、他。



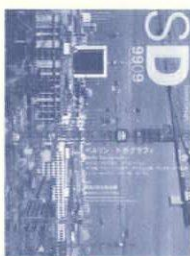
9906 小川晋一
Transbody / Super traffic
小川晋一の13年間の仕事を、実作、計画案、展覧会への出品作品を通して紹介する。作品＝キュビストの家、ミニマリストの家、他。文＝鶴沢隆、岡河貢、小川晋一、他。
2000円



9907 学校建築：
個性を育む環境創出へ向けて
学校建築設計の手引きとして、今後の学校建築に求められる事項を解説し、実例を現地リポートを交えて紹介する。文＝上野淳、他。座談会＝堀昭代＋佐藤学＋船越徹＋小嶋一浩＋上野淳。
2500円



9908 階段
Beyond Function
近年の国内の階段、21作品を、「起伏」、「移ろい」、「軽み」、「天空」といった4つのキーワードで緩やかに分節しながら、階段をめぐる詩集のような形で紹介する。文＝渡辺武信、下村純一。
2000円



9909 ベルリン・トポグラフィ
今世紀最後の首都移転が展開されている、ハイポテンシャルな状況をドキュメントする。文＝内山佳代子、杉本俊多、山下昌彦、飯島洋一、花田和幸、他。
個性の彩る集住群：長野市今井ニュータウンの試み
2000円



9910 東京リノベーション
スペースの再生転用の事例を紹介するとともに、その手法やスペースの新しい可能性を探る。企画編集協力＝粕谷純中
写真＝村角創一
隅田川再生とリバーサイドスペース 写真＝加藤嘉六
2000円



9911 ジャパニーズ・プロダクツ'99
インディペンデントな活動を展開するデザイナーを中心に紹介し、日本におけるプロダクト・デザインの可能性を探る。
企画協力・文＝川上典子、青山玲、写真＝高山幸三
2300円



9912 SDレビュー1999
第18回SDレビュー1999入選展の結果を審査員のコメントと共に誌上発表する。
エリック・ブリュッグマンの建築 文＝ユハニ・パッラスマー、田中雅美、他。
ハブニング展1999/2000
2000円



0001 横文彦 1993-1999
1999年から最新作までの作品を進行中のプロジェクトを含め、豊富な写真、スケッチ、図面で紹介する。
文＝横文彦、D. スチュワート、富永 謙
対談＝横文彦×門内輝行
4100円



0002 コミュニケーション・キッチン
建築家によるキッチンスペース、メーカーのキッチン機器を紹介しながら、国内で実現できるキッチンスペースの可能性を探る。
文＝黒田秀雄、下島資子、他。黒田＝黒田秀雄×葛西渥×東利恵
2000円



0003 リカルド・ボフィー 1995-2000
クラシズムとモダニズムの現代的融合の表現をめざして活動を展開するリカルド・ボフィーの近年の主要作品、プロジェクトを紹介する。
文＝リカルド・ボフィー、飯島洋一、櫻井義夫、志村直登。
2000円



0004 歴史的都市を読む
近代都市への反省を踏まえ、改めて今、歴史的都市に注目し、都市の形成、空間構造の魅力についてフィールドワークの成果をレポートする。
対談＝長尾重武×陣内秀信
監修＝陣内秀信。
2000円



0005 ヒューマノイド・インターフェイス
メディア化されたインターフェイスは、センサー・情報処理能力・運動能力を備えて身体と関わる。このようなメディア化をともなったテクノロジーと身体の新たな関わり方を考察する。
編集協力＝小田切博、他。
2000円



9902 The Dutch Model:
Architecture, Urban Design and Landscape
 Explorations of Dutch cities and social systems in terms of five key words.
 OMA, MVRDV, West8, Koen van Velsen, mecanoo, Kees Christaanse, Wiel Arets, Benthem Crouwel, etc.
 ¥ 2,000



9903 Spaces of Wood:
The Elements of Comfortable Architecture
 Introduces uses of wood construction materials that suggest next-generation standards.
 Cho Umihiko, Intentionallies, Tatsuo Kawanishi, Kiyoshi Kasai, MIKAN, H. DESIGN ASSOCIATES, etc.
 ¥ 2,000



9904 Josep Maria Jujol i Gibert's Vision:
 Introduces the legacy of Jujol's work through photographs and original drawings.
Donald Judd: Consistency of Space and Cognition
 ¥ 2,000



9905 Alluring Materiality:
Evolution of Materials and Their Potential for Design
 Takes up some examples of material and technical design from Japan and overseas and analyzes the applied methods and techniques hidden in the design. Also includes "A Chronology of Materials" and "The Map of Materials 1999." ¥ 2,500



9906 Sinichi Ogawa: Transbody / Super traffic:
 Introduces 13 years of Sinichi Ogawa's achievements through Cubist House and Minimalist House and other completed works, plans, and works submitted to exhibitions. Text: Takashi Uzawa, Mitsugu Okagawa, Sinichi Ogawa, and others.
 ¥ 2,000



9907 School Architecture:
Toward Environments That Foster Individuality
 Offered as a guide for the architectural design of schools, this issue comments on topics to be addressed in school architecture from now on, combined with on-site reports of specific examples. Text: Jun Ueno et al.
 ¥ 2,500



9908 Stairs: Beyond Function
 Introduces 21 recent Japanese stair designs in the manner of a poetic anthology, dividing the works loosely in four categories: "undulation", "transition", "lightness", and "open above". Text by Takenobu Watanabe and Junichi Shimomura.
 ¥ 2,000



9809 Berlin Topography
 The century's last transfer of a capital city is taking place. This issue documents the high potential of this move. Text: Kayoko Uchiyama, Toshimasa Sugimoto, Masahiko Yamashita, Youichi Iijima, Kazuyuki Hanada, and others.
Distinctive Housing Complexes: The Imai New Town Experiment in Nagano ¥ 2,000



9910 Tokyo Renovation:
 Introduces several cases of space renovation and reuse and explores the methods used and the new possibilities of space they offer. Editorial Cooperation: Hijun Kasuya. Photographs: Soichi Murazumi.
Reviving the Sumida and Riverside Space.
 Photograph: Karoku Kato ¥ 2,000



9911 Japanese Products 99:
Their Independent Situation
 Introduces mainly designers engaged in independent activities, and explores the potential of product design in Japan. Editorial cooperation and text by Noriko Kawakami and Akira Aoyama. Photographs by Kozo Takayama ¥ 2,300



9912 SD Review 1999:
 Introduces the results of the 18th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings, along with comments from the screening committee.
Erik Byggman's Architecture: Texts by Juhani Pallasmaa and others.
HAPPENING 1999/2000 ¥ 2,000



0001 Fumihiko Maki 1993-1999:
 Introduces a generous selection of photographs, sketches, and drawings of Maki's most recent works from 1993. Texts by Maki, David B. Stewart and Yuzuru Tominaga. Discussion: Teruyuki Monnai and Fumihiko Maki.
 ¥ 4,100



0002 Kitchen for Communication:
 Introduces kitchen spaces designed by architects and kitchen furniture by manufacturers and explores the potential of kitchen spaces in Japan. Texts by Hideo Kuroda, Motoko Shimojima, etc. Discussion: Hideo Kuroda, Kiyoshi Kasai, and Rie Azuma.
 ¥ 2,000



0003 Ricardo Bofill 1995-2000:
 Introduces leading works and projects of Ricardo Bofill, whose recent activity aims at a contemporary union of classicism and modernism. Texts by Ricardo Bofill, Yohichi Iijima, Yoshio Sakurai, and Naoaki Shimura.
 ¥ 2,000



0004 Reading the Historical City:
 Introduces the results of fieldwork-based analysis of historic cities, reporting on how the cities emerged as well as how their spatial structure gives them special appeal, from a critical perspective on the modern city. Dialogue: Shigetake Nagao and Hidenobu Jinnai. Editorial supervision: Hidenobu Jinnai. ¥ 2,000



0005 The Humanoid Interface:
 The media of the man-machine interface now utilize sensors, information processing capabilities, and motor capabilities. This issue considers the technologies of these media and their new relationship to the human body. Editorial cooperation: Hiroshi Odagiri and others.
 ¥ 2,000

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to **Space Design** and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2561

Or mail the card to:

Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107-8345, Japan
tel: 81-3-5561-2561

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

- ☐ Please enter my SUBSCRIPTION to **Space Design**, starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

- ☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of **SD**:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges(¥1,500 per order)
3. Postage(determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Selichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Selichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sasetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiko Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoji Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

SDレビュー2000

第19回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

SD Review 2000

Space Design

[SDレビュー2000入選展]

東京展

期間：2000年9月中旬から2週間で予定

会場：代官山ヒルサイドテラスF棟
ヒルサイドフォーラム

大阪展

期間：2000年10月上旬を予定

会場：大阪芸術大学芸術情報センター
展示ホール

[主催]

鹿島出版会 SD編集部

[お問い合わせ]

SDレビュー2000についての御質問は、SDへハガキまたはFAXにてお問い合わせ下さい。
宛先は提出先覧を参照のこと。

募集要項

[募集対象]

実施を前提とした設計中ないしは施工中の建築、屋外空間、インテリア。国外に建つものも含める。但し、応募の時点で既に完成しているもの、雑誌などに発表済みのもの、実施の見込みが全く無いもの、コンペの応募作品（公開、指名、入選、落選を問わず）は対象外とする。応募作品数は原則として1人1点に限る（グループの場合もメンバーが同じであれば1点のみ）。

[応募資格]

特になし。

[提出物]

プレゼンテーション:

① 設計意図を説明するために必要と思われる図面、写真等特に制約はなく、各自選択すること。表現方法は自由であるが、プレゼンテーションそれ自体の技術や密度は、審査にあたっての主要な評価対象とはされない。

② プロジェクト名、建築用途、施主名（事業主体名）、工事予定期間、主体構造、主要仕上げ材料、建築面積、延床面積。

③ 400字以内の設計主旨文（省略してもよい）。以上をA3判用紙（420×297mm）4枚以内にまとめたもの。パネル化は不可（クリアファイル等に入っている場合は審査時に取り外します）。設計者氏名、設計組織名は一切記入しないこと。②、③は添付書類に含めず、①と共にA3判用紙に記載することに注意。

添付書類:

プロジェクト名、応募者（＝設計者）名・フリガナ、応募者の年齢、職業、勤務先名とその住所（以上、組織の場合はその担当者について明記）、応募者への連絡先、共同設計者名、設計者略歴（入選の際、展覧会パンフレットに掲載いたします）。以上の事項をA4判用紙に記載したもの。

[応募受付]

・開始：2000年6月22日（木）

・締切：2000年6月30日（金） 当日消印有効

[審査員]

横文彦（建築家）

岡部憲明（建築家、神戸芸術工科大学教授）

芦原太郎（建築家）

小川晋一（建築家、近畿大学工学部助教授）

鹿島昭一（鹿島建設 取締役相談役）

[結果通知]

審査員により15点前後が選抜された後、入選者のみに7月下旬までに書類にて通知する。

[入選者の出展]

入選者は通知後、指定期間（約40日間）以内に、展覧会に出展するための図面、模型、その他のプレゼンテーションを製作し、後日指定の日時、場所に搬入する。この作品は、SD2000年12月号に誌上発表される。入選者には製作費用として、一律5万円が支給される。

[提出先]

〒107-8345 東京都港区赤坂6-5-13

鹿島出版会 SD編集部 SDレビュー係

TEL: 03-5561-2555 FAX: 03-5561-2565

（地下千代田線赤坂駅より徒歩5分、鹿島建設赤坂別館4F）

0006

都市・建築・芸術の総合誌

スペースデザイン 第429号
2000年6月号

SD

Space Design

編集長：相川幸二
副編集長：高木伸哉
編集スタッフ：
松口 龍
川嶋 勝 石田貴子
制作協力：久世 健
株式会社シンクス
発行人：平田輪郎
編集人：長谷川愛子
発行所：鹿島出版会
107-8345
東京都港区赤坂6丁目5番13号

電話：
03-5561-2551 営業
03-5561-2555 編集
FAX：
03-5561-2561 営業
03-5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番
URL：
http://www.
kajima-publishing.co.jp

005

特集

クライン・ダイサム・アーキテツ

006

際立つウィット
文：伊東豊雄

025

トーキョーというシーンをつくるクリエイター
文：渡部千春

026

いま、ここ、ということ
文：クライン・ダイサム・アーキテツ

028

Vroom!

044

UK98 バビリオン

032

ピカピカPRETZEL 仮囲い

048

東京国際都市博覧会

036

ブリティッシュ・カウンスル・
インフォメーションセンター

050

大関早苗美容室銀座店

038

かんぱん shelter

051

ヨーガン・レール・ショップ

040

ギャラリー住宅

052

U-project

042

ファッション・コマンドー

053

Other Projects

056

KDa Web

060

KDaのすべて

062 KDa too...

064 What's DELUXE

066

クライン・ダイサム・アーキテツのデザインの魅力
文：萩原 修

067

アストリッドとマークのデザイン
文：西沢立衛

070

SDレビュー2000 募集要項

073

豊かなアメニティ環境をめざして
新しい病院のインテリアデザイン

文・構成＝日建スペースデザイン／ヘルスケアデザインチーム

083

都市型エンタテインメント施設
メディアージュ

089

第7回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展 第3回レポート
松野 勉

093

展覧会レポート：比翼連理とも偕老同穴ともいふべき二人展
文：羽原康郎・益田祐作

094

展覧会レポート：素材としての「木」題材としての「椅子」
文：河合俊和

095

展覧会レポート：グラフィックを豊饒させる紙素材
文：工藤強勝

096

書評
南 孝裕

099

お知らせ

印刷・製本：凸版印刷株式会社
174-0056 東京都板橋区志村1丁目11番1号
電話：03-3968-5111 案内

取次店：トーハン・日販・大阪屋・太平洋・栗田出版販売・
誠光堂・鈴木書店・西村書店・中央社

定価：2,000円〔本体1,905円〕
年間直接購読料：26,000円
特別定価号＋送料込み

表紙：Vroom!
表紙写真：高山幸三
デザイン：山口デザイン事務所／山口信博＋齋藤亜季子

0006

Monthly Journal of
Art and Architecture

No. 429
June 2000

SD

Space Design

Chief Editor: Koji Aikawa
Editor: Shinya Tekagi
Associate Editors: Ryu Matsuguchi,
Masaru Kawashima, Takako Ishida
Production Cooperation: Takeshi Kuze, Digital Studio Thinks
Publisher: Kanna Hirata
Executive Director: Aiko Hasegawa

005

Special Feature

Klein Dytham architecture

006

Outstanding Wit
text: Toyo Ito

025

The Creator Who make Tokyo's Design
text: Chiharu Watabe

026

right here, right now
text: Klein Dytham architecture

028

Vroom!

044

Festival UK98 Pavilion

032

Pika Pika Pretzel

048

Tokyo Frontier World City EXPO

036

British Council Information Centre

050

Sanae Ozeki Hair Salon

038

Kanban Shelters

051

Jürgen Lehl

040

House & Gallery

052

U-project

042

Fashion Commander

053

Other Projects

056

KDa Web

060

Inside KDa

062 KDa too...

064 What's DELUXE

066

The Appeal of Klein Dytham Architecture's Design
text: Shu Hagiwara

067

The Design of Astrid & Mark
text: Ryue Nishizawa

070

Guidelines for Entrance: SD Review 2000

073

New Interior Design for Hospitals

NIKKEI SPACE DESIGN and Health Care Design Team

083

Mediage

089

La Biennale di Venezia 2000 Report 3
Ben Matsumo

093

Exhibition Report: Rumi Tanaka and Hiroshi Tomura Exhibit
Syukuro Habara, Yusaku Masuda

094

Exhibition Report: The 2nd Wooden Chairs For Living Exhibition
Toshikazu Kawai

095

Exhibition Report: Takeo Paper Show 2000
Tsuyokatsu Kudo

096

Book Review
Yasuhiro Minami

099

Announcement

Published by
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.

6-5-13 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-8345, Japan
TEL: +81 3 5561 2551 (Management),
+81 3 5561 2555 (Editing)
FAX: +81 3 5561 2561 (Management),
+81 3 5561 2565 (Editing)
TELEX: 02422467 KAJIMA J
URL: <http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm>

Printed in Japan

This Copy: ¥2,000
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page 2

Cover: <Vroom!>
Photo: Kozo Takayama
Design: Nobuhiro Yamaguchi / Yamaguchi Design Office

特集

クライン・ダイサム・アーキテツ

Special Feature

Klein Dytham architecture



伊東豊雄

アストリッド・クラインとマーク・ダイサムは我が国にあってはきわめて個性的なデザイナーである。日本人ではないのだから当然なのかもしれないが、建築や家具のデザインに対する思考方法が我々とはまるで異なっている。デザインされたものだけからは、このことはそれほど明確に見えてはこないかもしれない。しかし一度でも共同で仕事をしてみると歴然と違いがわかる。私たちのオフィスにもさまざまな外国の人々が入り出するが、彼らふたりほどに違っていると感じたことはないから、おそらくこの違いは彼ら自身のキャラクターから生まれたものに違いない。

この違いを言葉にするのはそれほど容易ではないが、ありきたりの言葉で言えば「センス」であり「おしゃれ」であり「ウィット」である。だがそんな言葉ではとてもうまく表現できない違いが依然として残る。単にデザインのセンスが良いとか、ユーモアの感覚がおしゃれに思われるといった程度では到底片づけられない何かがある奥に潜んでいるのである。

彼らの「センス」や「おしゃれな感覚」の独自性は彼らの生き方そのものからくる。人生をおしゃれに生きようとか、ウィットに満ちたセンスをもって社会に存在しようとは彼らは心底考えている。それはデザインの表層を形成するのではなく、彼らの日常生活すべてを覆っている。彼らが人と対し、語り、着て、食べること、手紙を書くこと、人に何かをプレゼントすること、そうした何でも日常行為の一つひとつと建築や家具をデザインする行為は全くパラレルである。だからデザインという行為は日常生活より以上でも以下でもない。この等身大のデザインが彼らの身についた「センス」を支えている。だから彼らは大上段から自らのデザインの意味やコンセプトを声高に語ろうとはしないし、語る必要もない。

12年前に彼らに初めて会った時の第一印象が「本当におしゃれな」人たちだということであった。まだ学生を終えたば

かりだったが、「とんでもないほどにおしゃれな人たち」だと思った。ロンドンのRCA（ロイヤル・カレッジ・オブ・アート）でのポートフォリオの一枚一枚に見られるプレゼンテーションの美しさはいまでも強く印象に残っている。日本各地を旅して2度目にオフィスを訪れた時、私は知人からあるインテリアのデザインを依頼されていた。私が間に入ってこのデザインを彼らふたりに依頼してみたら、と直感的に思った。彼らにとって最初の作品〈大関早苗美容室銀座店〉である。

大きく湾曲する壁に鏡を取りつけたストイックなデザインは、とても第一作とは見えないほどの成熟さときめ細やかな配慮を備えている。同じクライアントからは第二作目を依頼されるほど気に入られ、次第に彼らの日本での活動は地に着いたものとなっていく。

この10年以上に及ぶ日本での彼らの生活は、恐らく我々の想像を超えた苦勞を伴うものであったに違いない。我が国が彼らの特性とも言うべき「おしゃれなセンス」とか「ウィット」に対してあまりにも無粋だからである。若い人々には次第に芽生えているとはいっても、現代日本の社会には軽妙な洒脱さを受け入れる感性はない。彼らの示す軽妙な明るいウィットを等身大に受け止める土壌がないように思われる。フィードバックのないコミュニケーションほど疲れることはないからである。

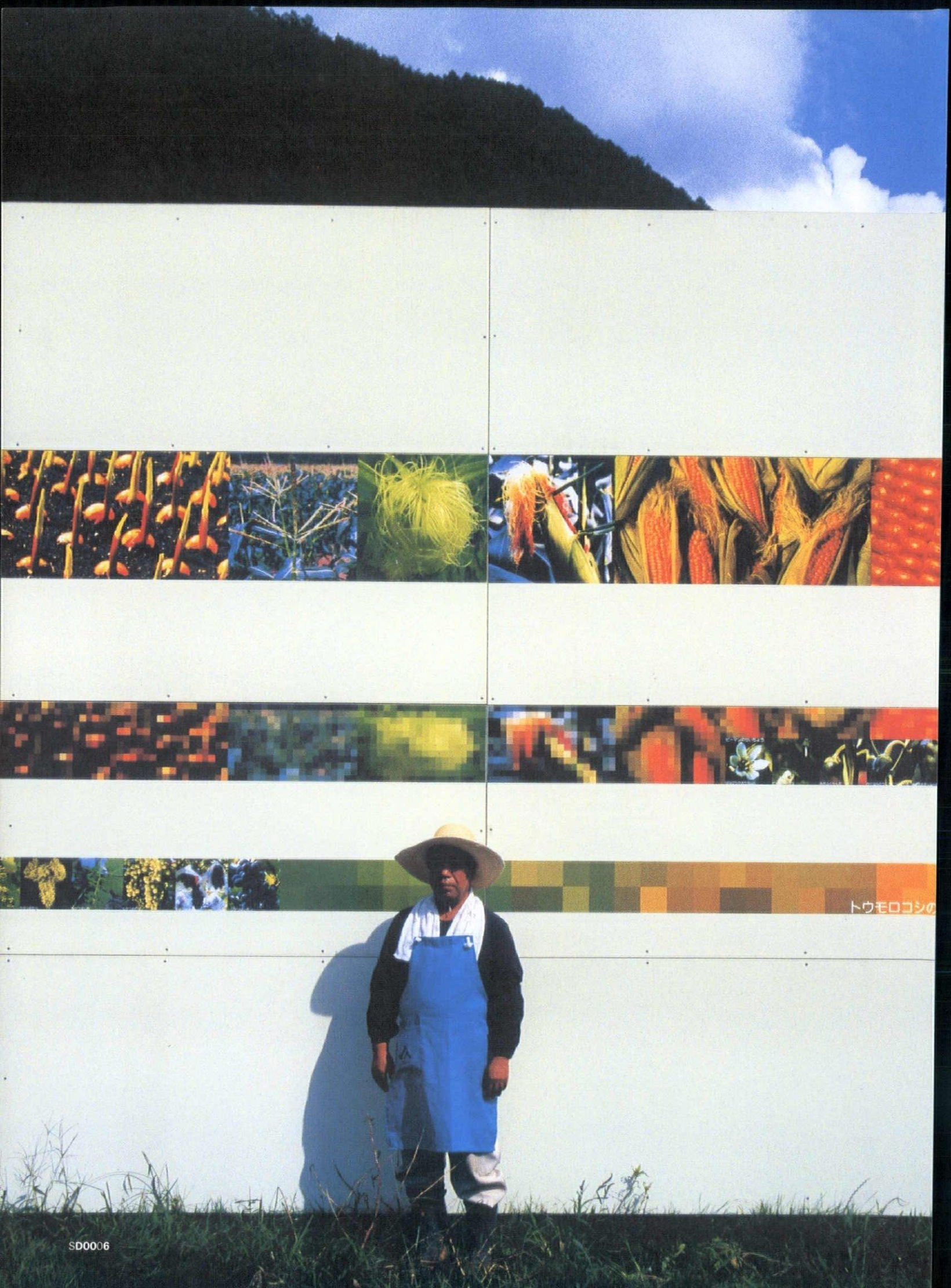
彼らのデザインを支えている特性のひとつに、素材に対する独特の感受性を挙げることができる。ポリカーボネート、バルーンに使われるテント地、モー板（プラスチックのリサイクル素材）といった工業製品が主体であるが、常に発見的である。流行に逆らうわけでは決していないが、流行におもねることも決していない。バルーンのテント地やモー板のように、自分たちの身近な環境から発見したマイナーな素材からデザインを始めようといつも考えている。本当に彼らが身体

的に気に入った素材だけを用いてデザインしようとしている。過度に透明な空間にのめり込むこともなく、過度に表現的になることもない。素材の選択からプロポーション、形態に至るまでがすべて身体のリアリティから生じている。言い換えれば、彼らの言語自体が洗練された身体のあるままの表現なのだということの証なのである。

我が国のデザインに今後求められるのは、彼らふたりに代表されるような、身についた生活感覚の表現のように思われる。際立った透明さとか、過剰な平滑さのように身体を凍らせるデザインではなく、身体をなごませる成熟した表現を求める社会に我々は入ろうとしているのである。クラインとダイサムは私たちに、「本当におしゃれなデザインとは何か」をいつも示してくれる。

（いとう・とよお／建築家）





トウモロコシの

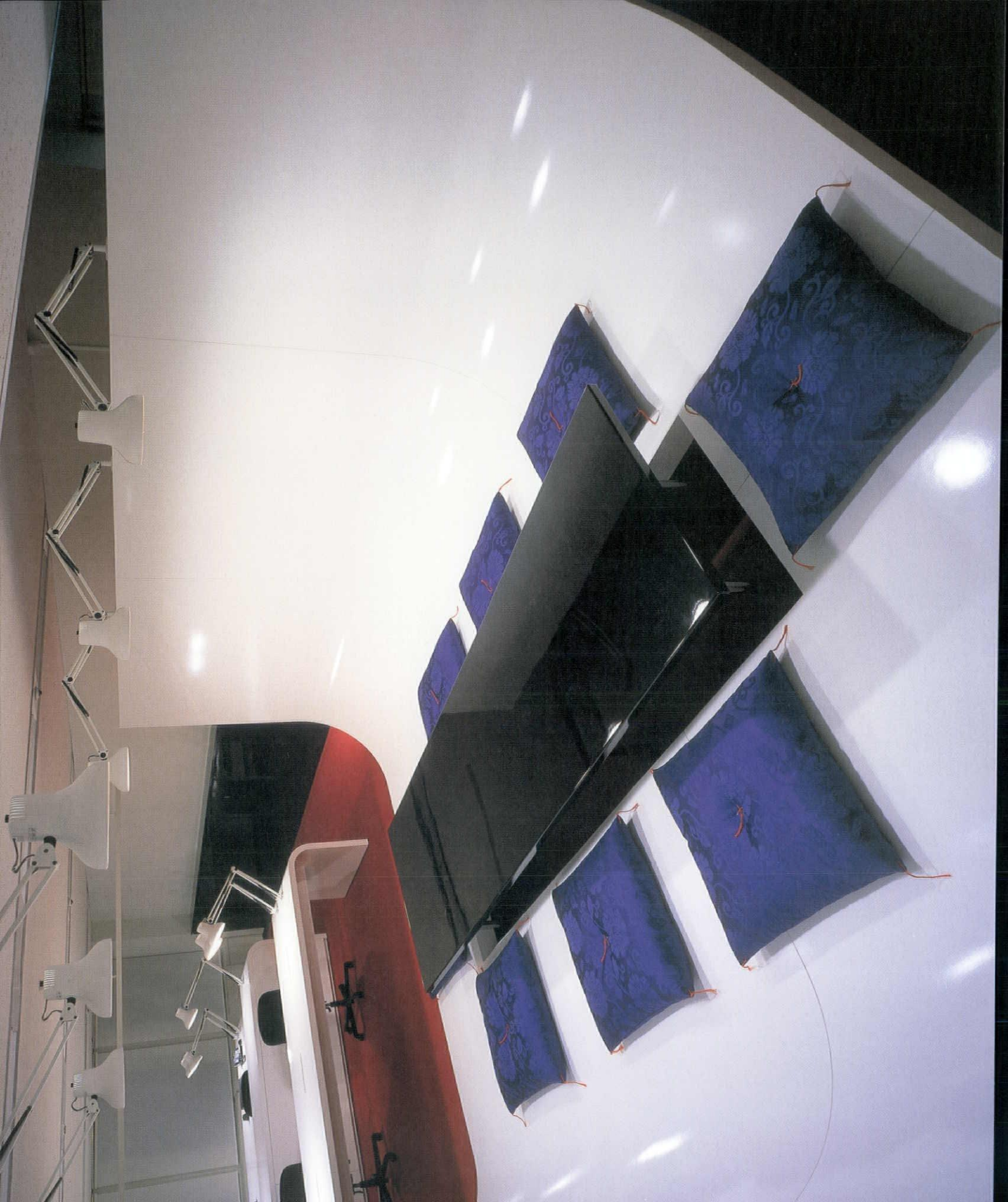
4



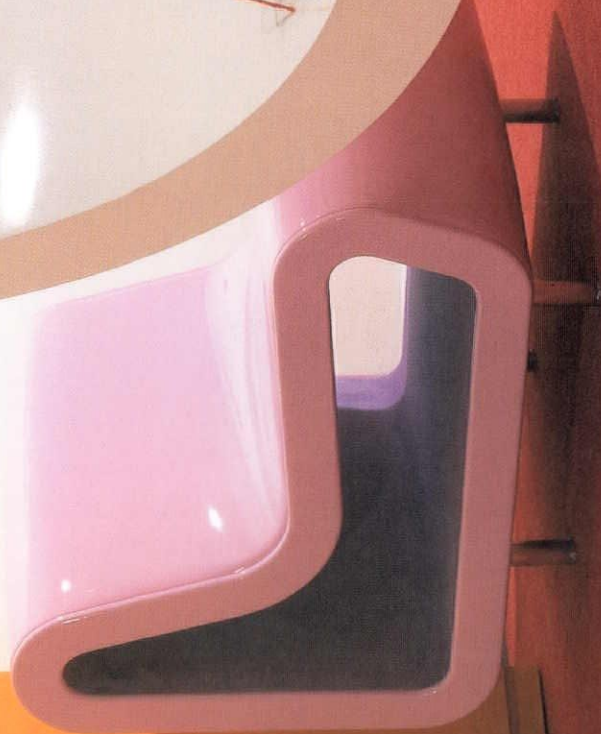


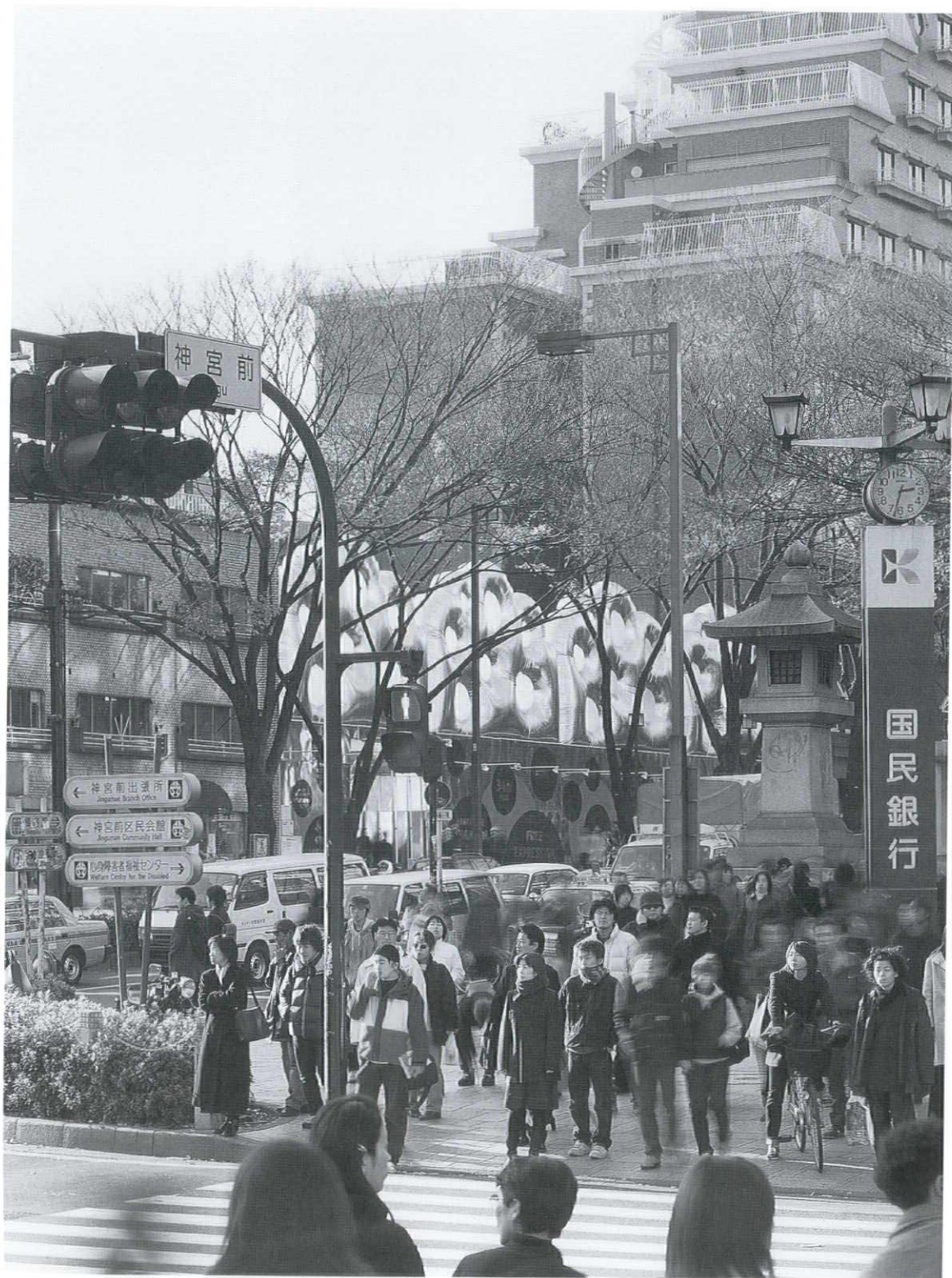
1

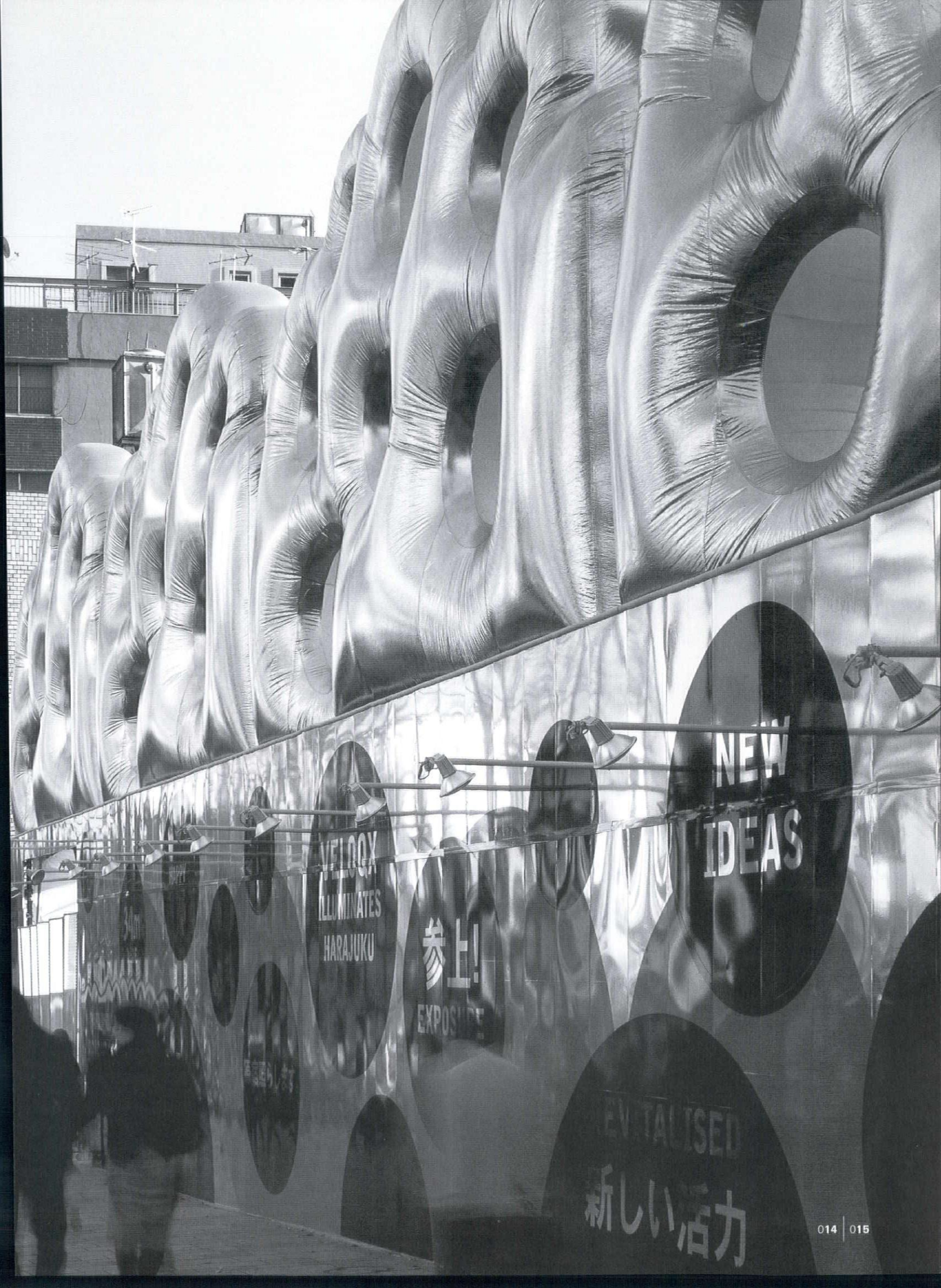




24







WE LOOK
ILLUMINATES
HARAJUKU

参上!
EXPOSURE

NEW
IDEAS

REVITALISED
新しい活力



1000
WORK
STATION

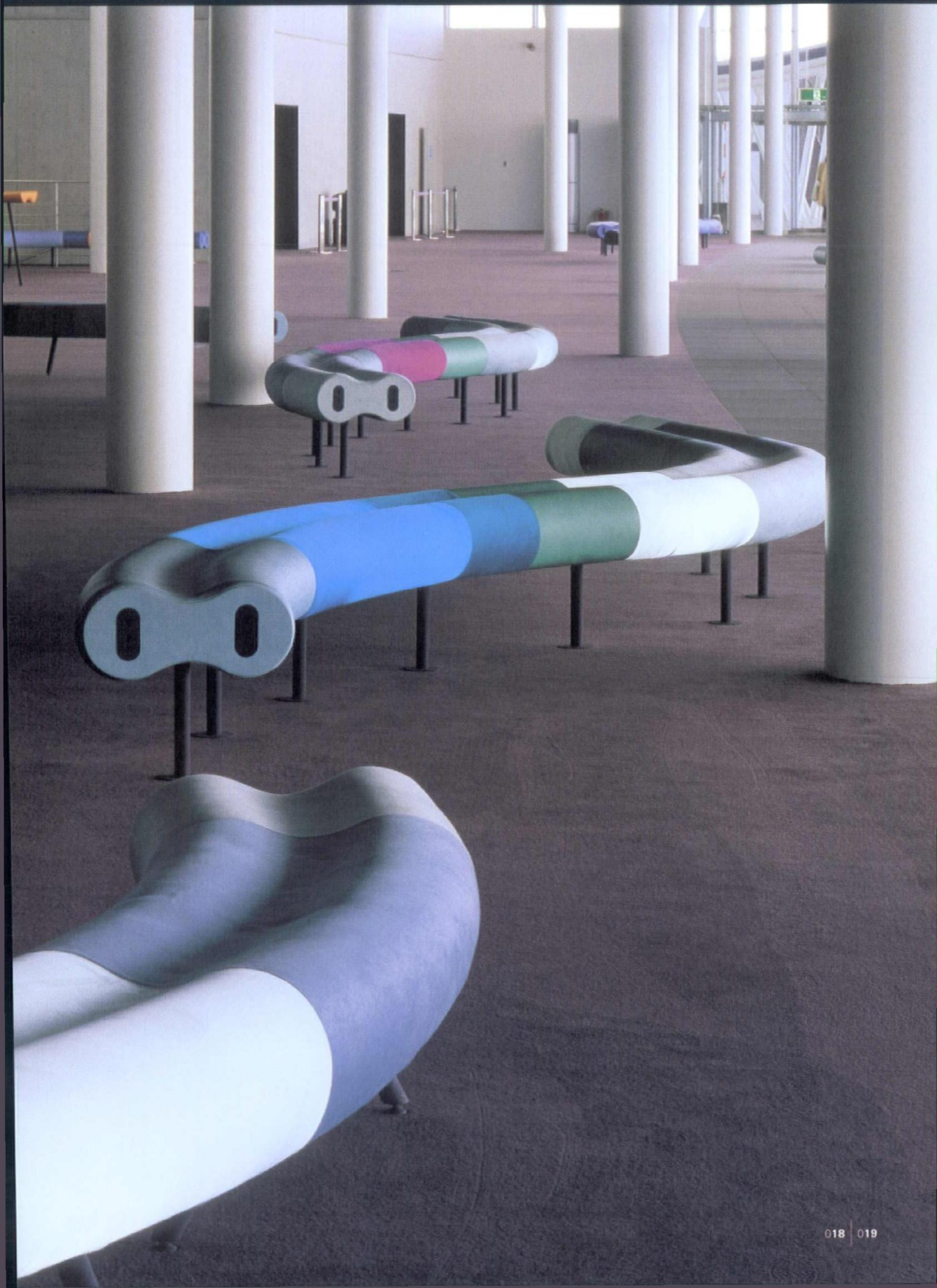
18

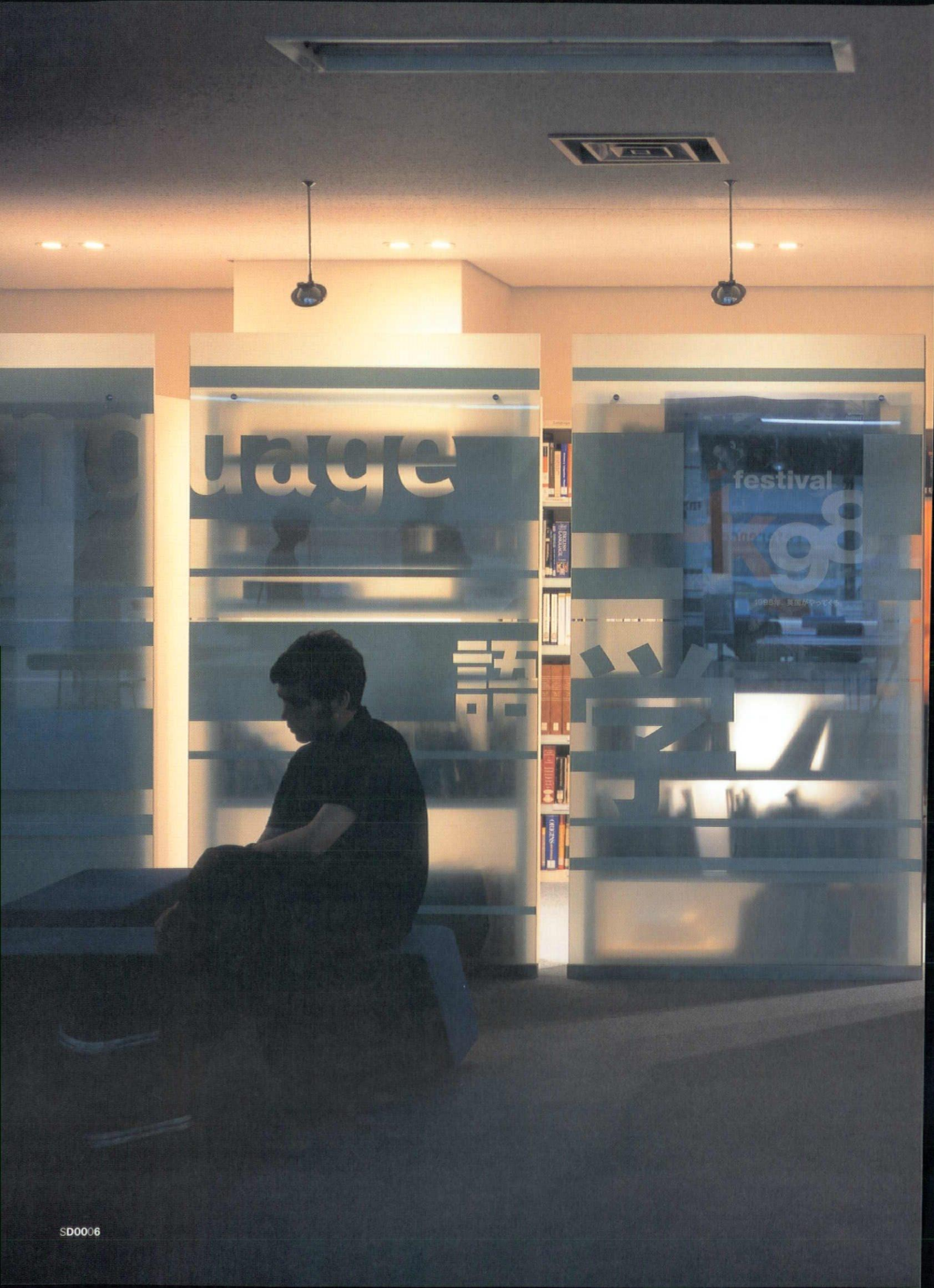




22

19













渡部千春

デザイナーの自主性の足りない東京のシーン

国内外を問わず、アート関連の本屋などに出向いて気がつくのは、ここ5年ほどでインテリア関連の雑誌が増えた、少なくとも、これまでアートブックと並ぶものでなかったインテリア雑誌が表に出てくるようになった、ということである。また同時に、一般の本屋、雑誌屋などでもモード誌やカルチャー誌のコーナーにさえ、その領域を広げている。もちろん、商業的、消費者的な視点でインテリアが注目されている状況は無視できないが、インテリアデザインがここまで認知されるに至ったのは、ことヨーロッパに顕著に見られることだが、デザイナー自身がモードやカルチャーと連動していくとさまざまな試みをする、物事を動かそうという自主性がある、という基盤があるのである。音楽であれ、ファッションであれ、そしてインテリアデザインであれ、こうした機動力があってこそ“シーン”と呼ばれるまでに昇華するのである。

例えば、イギリス人デザイナーの例をとっても、UK98のエキジビションデザインを行ったベン・ケリーは、プロジェクト全体のディレクションも行う。JAMは企業に自らを売り込みに行き、デザインコンサルタントとしての役割も担う。多くのデザイナーは個人でエキジビションをオーガナイズし、パーティやイベントを催しプロモーションに繋げる。また、それぞれがファッションなり音楽なりに結びついていく。こうしたものが混然となって、ロンドンのインテリアデザインシーンをつくり上げている。

「東京デザイナーズウィーク」「ハブニング」などのイベント、インディーズの台頭、インテリア雑誌の増加など、この2〜3年東京のインテリアデザインの動きの中にも“シーン”と呼べるようなものができてきた。しかし、ミラノやロンドンなどに比べると、それらしきもの、といわざるを得ない。というのも、どうしてもその動きが流通とメディア主導である観が否めないからである。それまでと比較すれば驚くほどデザイナーに威力がついてきたが、他と比較すれば自主性のあるデザイナーの数は少ないような気がしてならない。

クライン・ダイサム・アーキテクツの動き

このような状況の中でクライン・ダイサム・アーキテクツ（以下、クライン・ダイサム）は数少ない行動派ユニットのひとつだ。彼らの本来の姿は建築事務所であるからデザイナーとは言えないが、その活動領域は建築と同じようにインテリアデザイン、プロダクツに及ぶ。彼らの面白さは、作品本来の目的だけでなく、その作品をさまざま

な角度から見る視点、さらにそこに派生するものも楽しもうとするところだろう。昨年彼らが手がけた広告代理店〈パートル・ボグル・ヘガティのミーティングスペース〉は、一般的なオフィス・スペースに突如として現れたスケボーの練習台のように大胆なフォルムを見せているが、マーク・ダイサムは「これを『空港のラウンジ』として使ってもいいんじゃない？」と提案してみせる。『エスクワイア日本語版』1999年12月号の「男のプライベートルームを作る」という企画ではこのミーティングスペースが遊び溢れるラウンジに変化していた。

NHK長野放送局のエントランスロビー用につくった家具〈chu-coo chair / bench〉はウェブ上でも購入可能になっている。クリエイター自身がショッップなど通常の家具流通経路を通さず販売を手がける、というのも他ではなかなか見られない。そのウェブの充実度はかなりのもので、作品のポートフォリオとしてだけの機能だけでなく、ガムなどお気に入りの日本製品を見せるコーナー「fetish」、外タレが登場するCMを集めた「soldout」、飲料缶のデザイン「canned」など、彼らの好奇心の赴くまま手を伸ばし、いっぱい広げたままネットサーファーたちを受け入れている。

〈DELUXE〉の存在

彼らの広範囲な行動は、事務所のある建物〈DELUXE〉抜きに語ることは不可能である。交通機関のアクセスが必ずしもいいとは言えない麻布十番にあるこの建物に、車も持っていないライターが1998年のオープン以来これまで何度となく足を運んだのは、そこに取材があり、イベントがあり、常に何かが起こっているからである。入居事務所はクライン・ダイサムの他、グラフィックデザインの「生意気」、インテリアデザインの「スピノフ」、東京地ビール製造販売の「トーキョー・ブルーイング・カンパニー」、CGデザイン兼DJの「中目黒薬局」、ミュージシャン「ドレミ」。

それぞれの活動はしばしば、隣人とのコラボレーションとなる。事務所スペースにも壁のないクライン・ダイサムと〈DELUXE〉のメンバーは、多くのプロジェクトを共同で行っている。昨年日本図書館建築賞を受賞した〈プリティッシュ・カウンスル・インフォメーションセンター〉もそのひとつだが、パネルデザインは「生意気」の手によるもの。また、バンド「L'Arc-en-Ciel」の舞台デザインは「生意気」に依頼されたものをクライン・ダイサムと共同で行っている。「トーキョー・ブルーイング・カンパニー」は自らも株主で

ある「生意気」のデヴィッド・デュバル・スミスがグラフィックを手がけ、〈ブルーワリーバー〉のインテリアをクライン・ダイサムがデザインするプロジェクトが（今は延期となっているため）ゆるやかに進行中であることなど、規模の大小を問わず、数えきれないほどのプロジェクトが〈DELUXE〉を中心に回っている。総面積284㎡という広さを利用したパーティやイベントが多いのも〈DELUXE〉である。音楽のライブ、ファッション誌のイベントパーティ、誰かの誕生日パーティなど、ほぼ隔週かと思われるような頻度で何かが起こる。つい先頃、イギリスのデザインユニット「トマト」のワークショップが行われ、〈DELUXE〉の新たな側面をつくり出していた。最も記憶に残っているのは、去年10月に行われた「wallpaper party」。同時期には東京で多くのインテリアデザインのイベントが催されていたが、有名無名のデザイナー、メディアやショッップの関係者など、当日東京にいたデザイン関係者はすべて集まったであろう、というほどの人の入りであった。

もちろんこの吸引力というのはクライン・ダイサムだけが率いたものではないにしろ、今の東京でここまで人を集められるクリエイターとして圧倒的な存在感を見せたことは間違いない。クライン・ダイサムにこれ以上何か期待するとすれば、彼らの活動が他のデザイナーへの刺激となり、それが“シーン”を盛り上げる機動力となってほしい、ということくらいだろうか。

（わたべ・ちはる／ライター）

クライン・ダイサム・アーキテクト

私たちはヴィジュアルワールドにいる。日本での私たちはこの国のコトバを読んだり書いたり思うようにいかない。初めてやってきたところは話すことすらままならないからヴィジュアルだけが頼り、眼で見るものがすべて。日本語オンリーの人に道を聞いたり説明を聞いたりするときはとにかく根気。彼のやることをジッとみて頭の中でチューニング。合い言葉は「分かってても分からなくても」だった。日本滞在2週間ほどで最初のプロジェクトを得た。自分たちは考えをコトバで説明できなくてもドローイングと図面を指差すことならできる。だから提案するモノ自身が相手に語りかけ、私たちの考えの全てを伝えてくれないならならなかった。コンペも同じ。文章の説明なしで理解されなければならない。実際の建物がそうでなければならないように。建築家は四六時中、建物の前に立って「このコンセプトは……」と説明できるわけじゃないんだから。

私たちはデザイナー。ヴィジュアルに対する感覚を備えていて、しかも私たちにとっての日本は言語の真空世界。知覚の全てはヴィジュアルの情報に開かれている。だから視覚が極端なまでに敏感になっている。

そんな眼を日本とそこに花開くポップカルチャーに向けてみよう。たくさんのブームブリクラ、ハローキティ、i-mode（たった1ヵ月で100万人加入）、シナボン（今月なんかはこの菓子パンにありつくために45分も並ばないといけない）、キックボード、しかも恐ろしく短いライフサイクル、だから東京はいつでも「生」。自販機のドリンク缶もコンビニのチョコレートバーも、渋谷ガールの肌や目や髪の色と同じスピードで変わっていく。

こんなコンテキストの中で私たちは常に新鮮なアプローチを探っている。どんなプロジェクトもその瞬間を具現化させる。私たちは「いま」を恐れない。素材、かたち、色。「いま」を表現するものは時を経てクラシックになる可能性を持っている。英国車miniもミニスカートも60年代という時を鮮やかに駆け抜け、クラシックの殿堂入りを果たしたのだから。

ヨーロッパ、USのデザインプロセスと、日本のそれとは全然違う。西洋型のアプローチはどこかリニアな印象を受ける。スタートからヴィジョンが明らかで、コンセプトから完成に向かうストレートなラインが見えている感じ。一方で日本は、いろいろなところをぐるぐると廻る道中で発見したり試したりしながら進んでいくように思えるし、そのやり方には最後の選択までにはできる限りいろいろなやってみての方が良いという感じ。違いはあれど双方の環境においていずれのやり方も正しく有効だ。

私たちにとって最初のヴィジョンの持つ強さやアイデアはとてつもない大切なもの。〈Vroom!〉の場合、ひとつのリボンが道路からスーッと滑りこんで敷地の奥で跳ね返ってそのまま屋根、というシンプルなジェスチャー。〈ピカピカPRETZEL 仮囲い〉ではシルバーに輝く高性能のバルーン生地という素材。便座はというコトバ遊びで、2本の手のカタチをした便座カバーを開けると裏には「banzai! (バンザイ)」の文字。というわけで〈バンザイベンザ〉。

ヴィジョンはある。でもそれがゴールを決めつけるわけではなく、私たちはそれを霧のようなものとして捉えている。それはデザインをすすめていく中で外部にあるさまざまな要素と関係しあってゆっくりと密度をあげ、ある瞬間ぱっと結びついてビュアな水滴へと変わる。

外部の要素との関係性はヴィジョンをナビゲートしながらももっともクリアな方へと操舵する。私たちはアイデアは常にシンプルでビュアにしたいと思っている。新しいアイデアやデザインを次々と盛り込むことよりも、ヴィジョンがクリアな瞬間そのものを具現化させるためにフィルターをかける。適切な選択をするには厳しさをもちとそれを養うことを要する。私たちのプロジェクトは会議室系の賛成多数デザインではない。すべての人に受け入れられることよりも、ごまかしのない態度でプロジェクトの特殊さを表現したい。そうすることで自分たちもその時を愉しみたい。プロジェクトを愉しんでやることはいつも無意識で繋がっていて、クライアントも楽しんでくれる。計画の概要、敷地の状態、予算、素材、クライアントの要望、トレンドに対してきちんと反応していけばヴィジョンは自ずとクリアになる。だから私たちのプロセスでは決まったスタイルとかボキャブラリーとかに流れたり、グッドテイストなのかバッドテイストかという疑問や不安を歓迎しない。

ポール・スミスは最近のエキジビションのなかで、「あなたが周りからインスピレーションを見つけられないのは、ちゃんと物事を見てないからだ」と言っていた。その通りだと思う。私たちのインスピレーションもたいてい、予想もしないところから突然やってくる。だから眼を見開いてキープする。

旅行したり、複数の文化をバックグラウンドにもつことや経験することはモノの見方に影響すると思う。最近ロンドンに帰ると、以前には気にもとめていなかったものに眼がいく。例えばエントツとか、地下鉄の切符やテレホンカードがやたら大きくて分厚いこととか、住宅街の道路が昼間は普通なんだけど、夜になるとパーキングと化してしまうこととか。それにロンドンの店はなんだ

か薄暗くて棚が少ないしスカスカ。東京はものすごく明るくて商品もみっちり。

ひとりあたりのスペースの感覚も全然違う。地下鉄のピカデリー・ラインで、車両に乗り込もうとしたら乗ってる人が新聞を広げたりして、ホームに弾きかえされてしまった。東京でいえば満員度50%って感じだったのに、ロンドンの人にとってはそれで超満員！

東京の地下鉄なんか混雑していても、切符売り場には必ず水槽とか置いてあって魚が泳いでいる。しかもびっくりなのはちゃんと誰かが世話している。私たちはウェブ上でそういう水槽がどこにあるかマッピングして紹介したのだけれど、それですらに驚いたのはほとんどの日本人がその存在にすら気づいていなかったこと。

建設現場の仮囲いパネルにも花とか植物がプリントしてあって、時には本当の植木鉢がついてることさえあるのだけれど、そういう「取りあえずきれいに」みたいなことに努力とかエネルギーが傾けられてることの面白さにみんな気づいているのかなあと思ったりする。よくバス停に、古くなった椅子とかベンチとかを誰かが持ってきて置いてあるけれど、ヨーロッパではそういうのは考えられない。他にもちよつとしたことだけれど、バスの整理券の発券マシン、ドアが開まって発車する瞬間に最後の券がビッとマシンに戻る。すごい、大発明。それから、雨の日に店の入り口で傘にコンドームをつけてくれるマシン、あれもほんとにバカバカしいけど、あれがなかった時ってみんなどうしてたんだっけ？っていうくらい便利。東京では毎日いろんな新発明やアイデアに目がいってしまふ。「新しいものが見つからなくなったら帰ろうか」ってここにきたころ話してた。なんでまだここにいるんだろう？

だから日常の中でインスピレーションを見つけるにはいろいろな角度から見る必要がある。いろんな人と共同作業するのもそのひとつ。構造物、グラフィックデザイナー、ビール職人やバルーン職人、それぞれ違った視点をプロジェクトに与えてくれる。そういう意味で、他の5つの会社と共同している〈DELUXE〉は、モノの見方をいつも広げてくれるし、ヴィジョンを結晶させるのに一役も二役もかってくれている。

どんなプロジェクトのときも「あれっ？」と思わせるような、どこかスマイルしてしまうような、プロジェクトを生き活かせてくれるようなtwistを探している。それは素材からかもしれないし、カタチだったり色かもしれない。とんでもなく一般的に思えるモノでさえ、シンプルなtwistがあればどこか魅力的でもマジカルなものに迫り着くはずだ。

Klein Dytham architecture

visual vacuum

Ours is a visual world. In Japan, we don't read and write as fluently as we wish. When we arrived, we couldn't even speak the language; that means that visuals are everything. Arriving in Tokyo for the first time and trying to understand directions or explanations from people who only spoke Japanese was tough. But by tuning into their facial expressions and gestures we somehow got the gist, understanding, without understanding.

We picked up our first project within a few weeks of arriving in Japan, and although we could point at the drawings and models we could not really explain our intentions. As a result, the work had to speak for itself. The drawings and models had to convey everything we wanted to say. It was like entering a competition; the work has to be understood without any verbal explanation. In fact, it's just like a building: It should speak for itself. The architect can't stand outside explaining the concept behind it.

We're designers. Not surprisingly, we have heightened visual sensibilities. But in this so-called vacuum that we call Japan, we mainly perceive the visual world around us. These sensibilities are heightened to extremes.

Through these eyes, we see Japan and its pop culture in all its glory. The booms - puri kura, hello kitty, i-mode (over a million new subscribers last month alone), cinna-bon rolls (queues of up to 45 minutes for these pastries are common - this month!) and razor kickboards - all express the now-ness of Tokyo. The life cycle of these booms is ever shorter. Drink cans and the varieties of chocolate bars change as fast as the skin and hair colour of Shibuya girls.

Within this context, we constantly search for a fresh approach. Each project embodies this moment. We aren't afraid of now. Materials, forms and colours that express this "now" can, over time, become classics. Just look at the mini car or the mini skirt; both vividly express the swinging sixties. Yet both have become classics.

misty visions

After studying and working in Europe and the US, it was very clear that the design process in the West is different from that in Japan. The Western approach is more linear; the vision is visible at the outset. There is a straight line from concept to completion. The Japanese approach meanders. There is discovery and testing en route and a feeling that every solution should be exhausted before the final one is chosen. Having worked in both environments, we can say that both are right and both are valid.

For us, the idea and strength of the initial vision is very important. It may be a simple gesture, as in the case of Vrooom! a super-car

garage, a single ribbon of road sweeps back onto itself and forms the roof. For pika pika pretzel, the vision came from the material, a silver, high-performance balloon fabric. Our toilet seat design came from a simple word play on the Japanese word for toilet seat -benza- which lead to the form of the seat cover to become two arms - which once lifted read on the underside 'Banzai', thus the Banzai Benza was born.

Although there is a vision, there is no clearly defined goal. We think of it like a mist. As we move along the design path, a whole host of external influences causes the mist to slowly condense. Eventually, it forms a pure drop of water.

The external influences inform and steer the vision, clarifying it more and more. We try to keep the vision simple and pure, and rather than force every new idea or influence into a single design, we filter them so that they embody the vision and the moment. Making the right choices takes rigour and discipline. That said, our projects are not designed by committee; we are not trying to please everyone. Rather we like to express the project's particularities in the clearest manner, whilst pleasing and entertaining ourselves at the same time. The projects we enjoy most are always enjoyed by the client, it's a subliminal process. Needless to say an appropriate response to the project brief, site conditions, budget, materials, clients requests, trends - all influence and clarify the vision. Styles, signature elements, even the question of good or bad taste are not present in our process.

eyes wide open

In one of his recent exhibitions, Paul Smith said 'if you cannot find inspiration around you, then you are not looking hard enough.' He was right on. Our inspiration comes from the most unlikely places; when we least expect it. All we can do is keep our eyes open.

Travel and a multicultural background enhances this viewing process. When we return to London, we now see things we never noticed before, like chimneys, big, thick subway tickets and phone cards, road works during the daytime and the parked cars that line nearly every residential street. Most of the shops in London now seem dully lit; most don't seem to have enough shelves or goods. The truth is the shops in Tokyo are so brightly lit and so tightly packed with goods that the London ones suffer in comparison. Even an individual's private space allowance is different. Once, we couldn't get on a Piccadilly line underground train, which wasn't even half full by Tokyo standards, people pushed us back onto the platform because they thought it was too full!

Being able to perceive these differences when you cannot really see them is important. We

are still amazed by all the fish tanks at Tokyo's underground ticket wickets, and more amazed that people look after them. After mapping their locations for a web-based exhibition, we discovered that most Japanese people don't even notice them! We hope people notice the care taken at construction sites to make them look nice, the flowers and greenery printed on temporary building hoardings (sometimes even real flower pots are used), but it is almost taken for granted. But then again no one would ever donate an old sofa or chair to a bus-stop in Europe.

Small things, like the way ticket-dispensing machines on public buses take back the last ticket when the door closes, fascinate us, as do odd inventions. Machines that automatically put the condom on your umbrella when entering a shop on a rainy day are ridiculous - yet convenient at the same time. How did we ever live without them? We once said that we would leave Tokyo when we stopped seeing new things. Yet every day we see some new invention or idea; it's probably why we are still here!

So to find inspiration in the ordinary it is necessary to look at it from a series of different angles. Collaborating with other people helps us find more view points. Structural engineers, graphic designers, balloon manufacturers - even brewers: each brings another view to a project. Deluxe, the studio space we share with five other companies, brings us into contact with an even wider range of views and helps us crystallize our vision.

In every project we look for a twist, something that will make you think, that will make you smile, that will make the project come alive. It may be from the use of a material, a certain form, a certain colour or a simple analogy. Even in the most mundane of projects, a simple twist can lift the finished project into something desirable, something magical.

Someone said our work is like hiragana, the Japanese phonetic text characters. Kanji characters have a fixed meaning and are difficult to read. Hiragana on the other hand is easily read and has no fixed or implied meaning. In a way the added meaning comes from your imagination. Children initially learn Japanese through hiragana. Hiragana is about sounds and gestures. It expresses the notion of spoken Japanese, whereas kanji expresses the notion of written Japanese. Our office runs on the spoken word, not the written word. Our designs are based not on written concepts but visual ideas, words, sounds and gestures. And like hiragana we hope our work is simple, easily understood and fun.

Vrooom!
Vrooom!

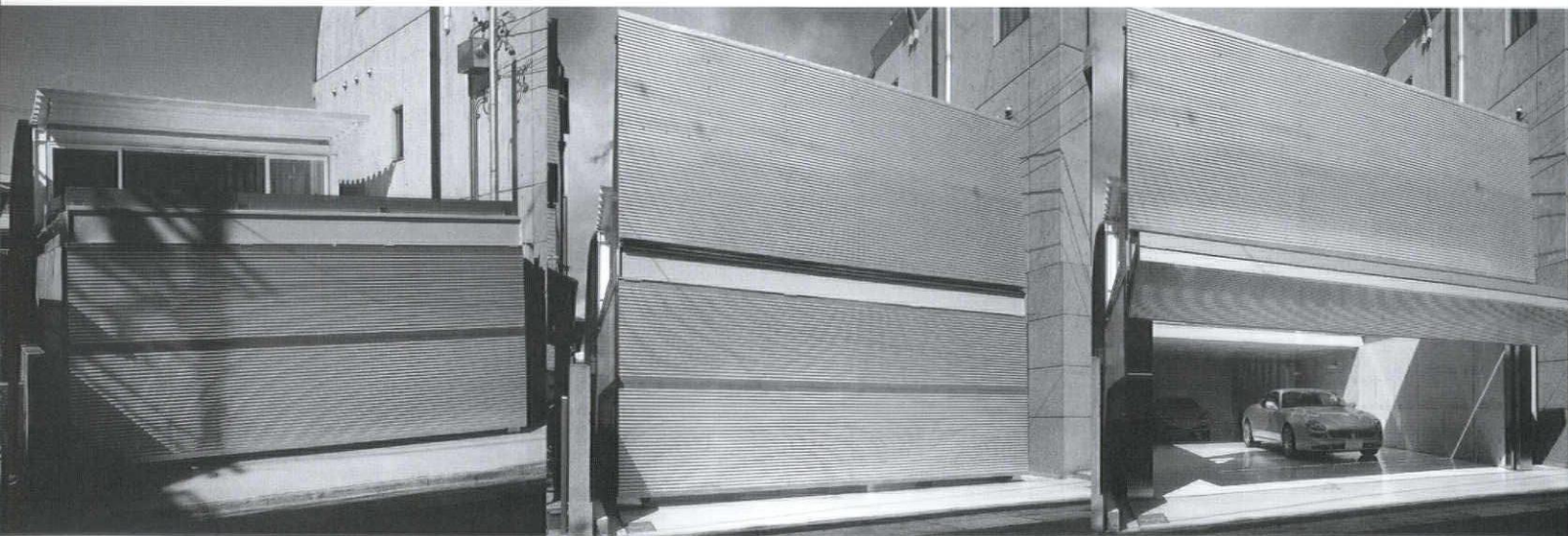
タイトル: Vrooom!
 主要用途: スーパーカー・ガレージ、スタジオ
 所在地: 愛知県
 竣工: 1999年9月
 延床面積: 117.63m²
 備考: トミエ、セクシーカーブ、コンバーチブル、ハイトルク、低空気抵抗

project: garage for 6 super-cars, studio
 location: Aichi prefecture
 completion: sept 1999
 floor area: 117.63 sqm
 features: hot-wheels, shapely curves, convertible
 high torque, low drag coefficient

スーパーカー・コレクターであるこのプロジェクトのクライアントは、現場を訪れる私達を自らコレクションの一台に乗って駅まで迎えに来てくれた。このドライブはプロジェクト中のひとつの愉しみであった。

クライアントは、そのコレクションのためのガレージを私達に依頼してきた。アルファロメオ、ランチヤ、マセラッティ、フェラーリ、といった彼等のすばらしいコレクションに見合った環境を求めていた。細長い敷地に6台の車を収納し、さらにそれらを眺めることのできるスペースと書斎を2階に設けることが条件だった。撮影スタジオのバックドロップのように、床から天井まで視覚的に行き止まりなく連続したひとつのストリップが流れるような形態を描く。床用折板による屋根は全体が梁の役目を果たし、ガラス壁が受ける風荷重もマリオンから屋根、屋根から床へと流れる。ルーフと窓枠が一体になった構造は自動車のそれと非常によく似ている。またこの敷地は建蔽率が60%であったため、残り40%部分の屋根を開閉式にすることで対応した。ここでもまたコンバーチブルという自動車のコンセプトが採用されたわけである。なるべくニュートラルなスペースにすることで、車を際立たせる。キラキラのピンスポットを当てるのではなく、屋根を照らすアップライトによって間接的に車を照らし出す。2階からはガレージに置かれたコレクションを見下ろすことができる。このスペースはエントランス越しに外を望む書斎としても機能する。

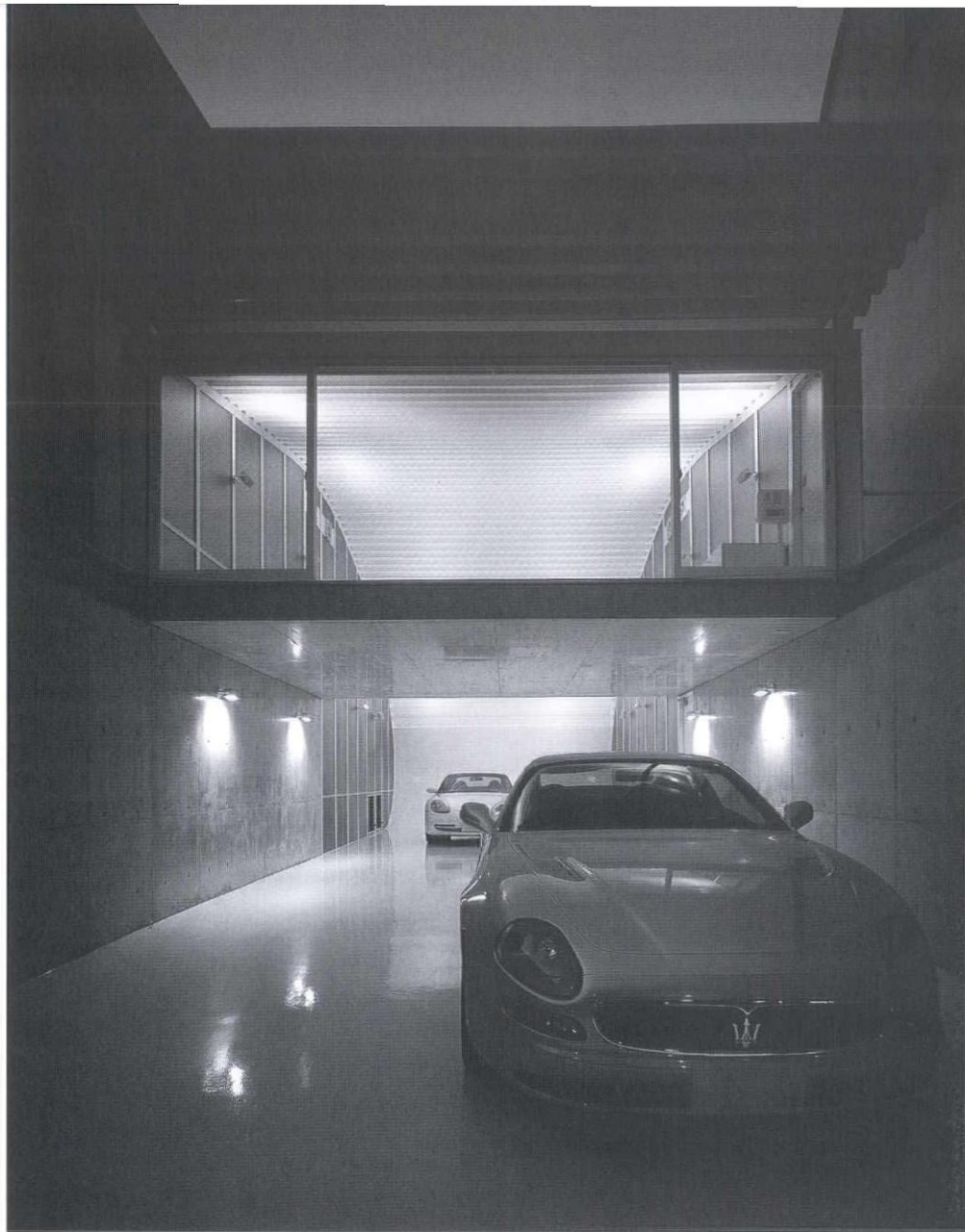
屋根の開閉によって道路に面したファサードの様子は全く変化する。全開時には垂直に折り畳まれた屋根によって建物の高さが突如2倍になったかのように見える。この畳まれた屋根は、2階が丸見えにならないようプライバシースクリーンとしても機能する。



屋根、フロントシャッター共に全開

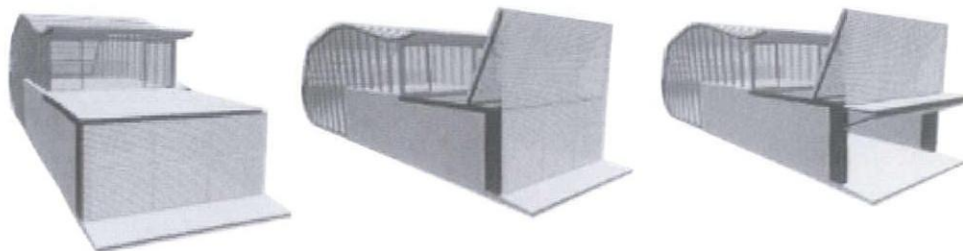
屋根だけ開いた状態。2階の窓の目隠しにもなる

屋根、フロントシャッター共に全開

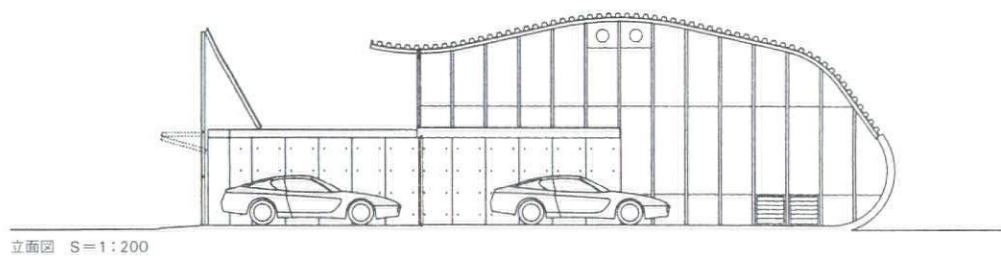
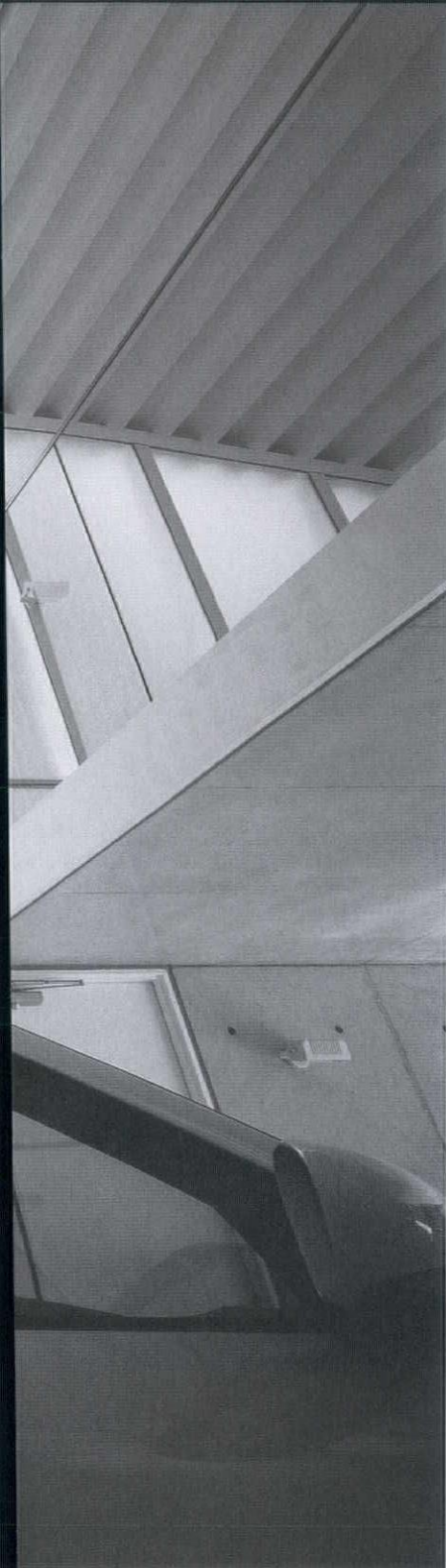


One of the best things about this project was being picked up at the station in one of the clients exotic machines and being taken for a test drive! The client, a super-car enthusiast asked us to design a garage for his collection of Italian and his wife's German cars. He was looking for an environment to match his sophisticated Alpha Romeos, Lancias, Maseratis and Ferraris. The challenge was, to house six beautiful cars on a long and narrow site, while incorporating a study and viewing area on an upper level. The garage floor, conceived as a continuous strip swings up and becomes the roof, forming a photo-studio like backdrop for the cars, while generating a flowing aerodynamic shape. Window mullions act as mini columns supporting the roof, and the profiled steel roof functions as both the roof beams and stiffening membrane, very much like the structure of a car, where the roof is supported on the window frames. We could only build on 60% of the site, so the other 40% is covered by a convertible roof taking the car analogy even further. The space is intentionally neutral so the cars become the focus within the space. Up-lighters wash the roof with light so the cars are lit indirectly, avoiding pin spots and glare from direct lighting. From the upper level it is possible to look down on the curvacious lines of the cars. This viewing area is also a comfortable study which looks out to the entrance side.

The convertible roof, when open completely changes the buildings appearance to the street. In the fully open position one leaf of the folded roof becomes vertical, dramatically doubling the height of the facade on the street. This vertical leaf also acts as a privacy screen preventing direct views from the neighbours into the study area.







立面图 S=1:200

ピカピカ PRETZEL 仮囲い Pika Pika Pretzel

主要用途：仮囲い

所在地：東京都渋谷区神宮前

竣工：1999年11月

サイズ：幅34m、高さ10m、奥行き1m

備考：シルバーバルーン

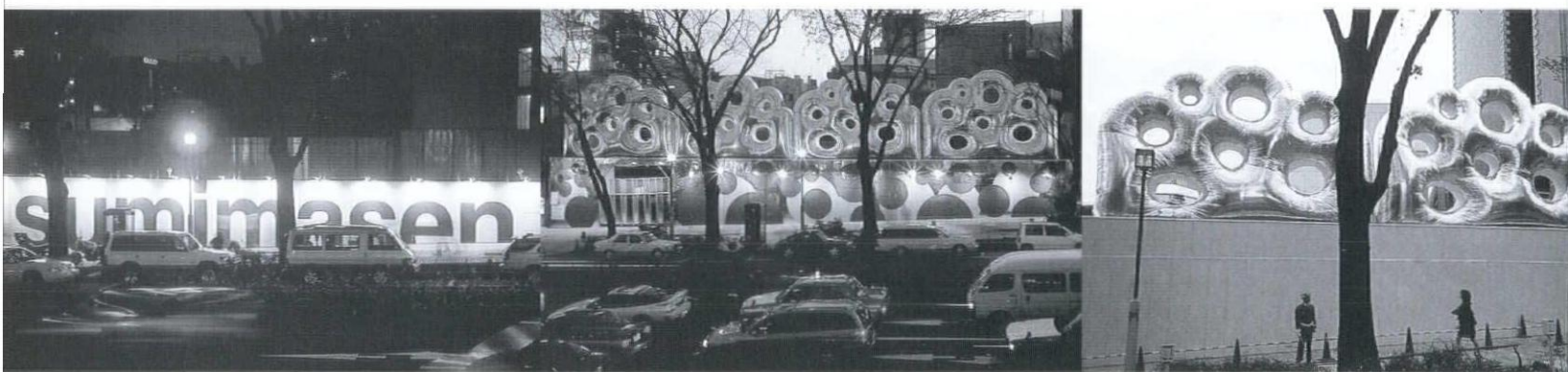
project: construction hoarding

location: jingumae, shibuya-ku, tokyo

completion: november 1999

size: 34m long, 10m high, 1m deep

features: inflatable, silvered fabric



「幅34m、高さ6m、奥行き1m、色は銀、とにかく、とにかく作って！」プリストルのカメロン・バルーンに電話1本、そんな感じだった。東京のシャンゼリゼともいべき表参道で仮囲いを依頼された、その第2段階である。日本の仮囲いは時々ちょっとヘンで気になっていたから、私達は随分前からそれらを写真に撮ってドキュメントしていた。(p.56参照) 東京では、建物が撤去された時に初めてそこにそれが建っていたことに気付くといったことがしばしばある。ほとんどの建物は東京の都市景観の中で匿名的な一部分としてしか存在していないのだ。だから仮囲いの中で瓦礫の山と化してしまっているその建物が、もともとどんな姿をしていたのか立ち止まって思い出そうとするのだけど、たいていの場合徒労に終わる。

国際的なディベロッパーであるVELOQXは、原宿表参道のこの敷地にテンポラリーな仮囲いをデザインするよう私達に依頼してきた。彼等は、34mという長い敷地の前面を利用して、とにかく目立つ、普通じゃないものを求めていた。これはVELOQXの東京で初めての開発事業であり、彼等自身の日本進出と敷地そのものへの注目・興味を引き付けることが目的とされた。

このプロジェクトはふたつの段階に分けられ、解体のための仮囲いと、その後工事着工までの期間の広告的な仮囲いである。限られた予算を考慮し、高さ3mの銀と紫の仮囲いの上に4つの高さ6mのバルーンを乗せることにした。バルーンは物体としてのインパクトがある。このバルーンは、世界1周を果たした気球に使用されたのと同じ、銀色のハイテク素材を使用している。プレッツェルのように開けられた穴は、バルーンの両サイドを繋ぐウェブとして働くと同時に風圧力を減らすのにも役立っている。また、穴の部分は透過性のある素材で出来ているため、日没後は内側から照らすライトの光によって穴だけが空中に浮かぶように光る。

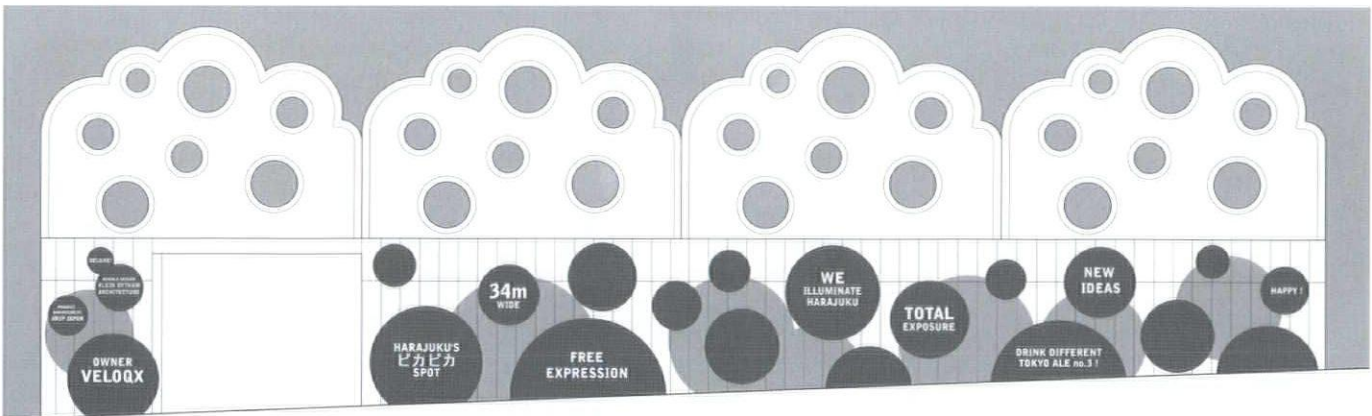
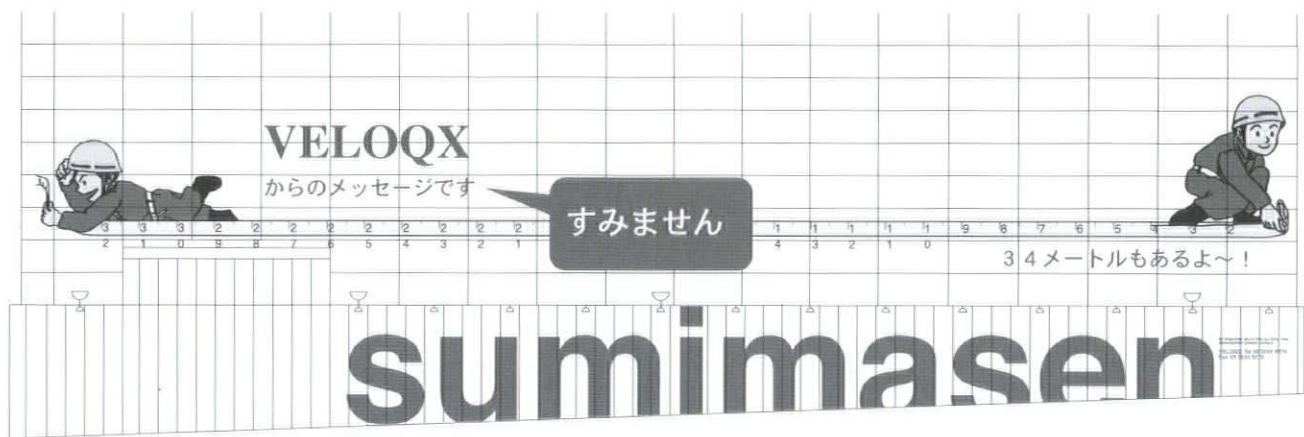
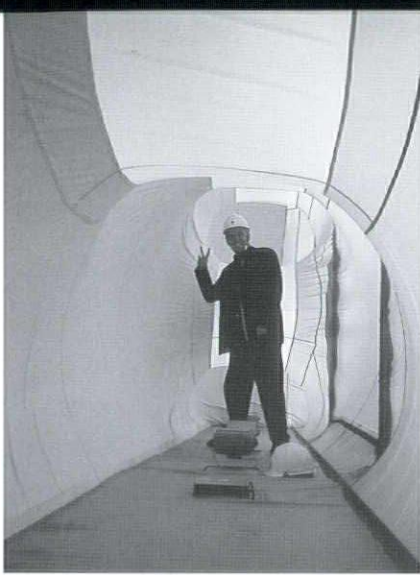


HARAJUKU'S
BRIGHTEST
ピカピカ
SPOT

34m
WIDE

HAPPY

FREE
EXPRESSION



立面図 S=1:200 上:第1期 1999年6月~11月(既存建物解体期間) 下:第2期 1999年11月~2000年5月(整地期間)

"I'm looking for a silver lilo, 34 meters long, 6m high, 1m wide" was something like the conversation went with Cameron Balloons in Bristol. This was the second stage of a hoarding we had been commissioned to design on Omotesando, Tokyo's Champs Elysees. Often in Tokyo, you only notice a building once it has been demolished. Most buildings exist as anonymous parts of the cityscape, and it is only on discovering a temporary fence and it's patch of neatly raked soil that you pause to try and recall the building that was there - in most cases in vain.

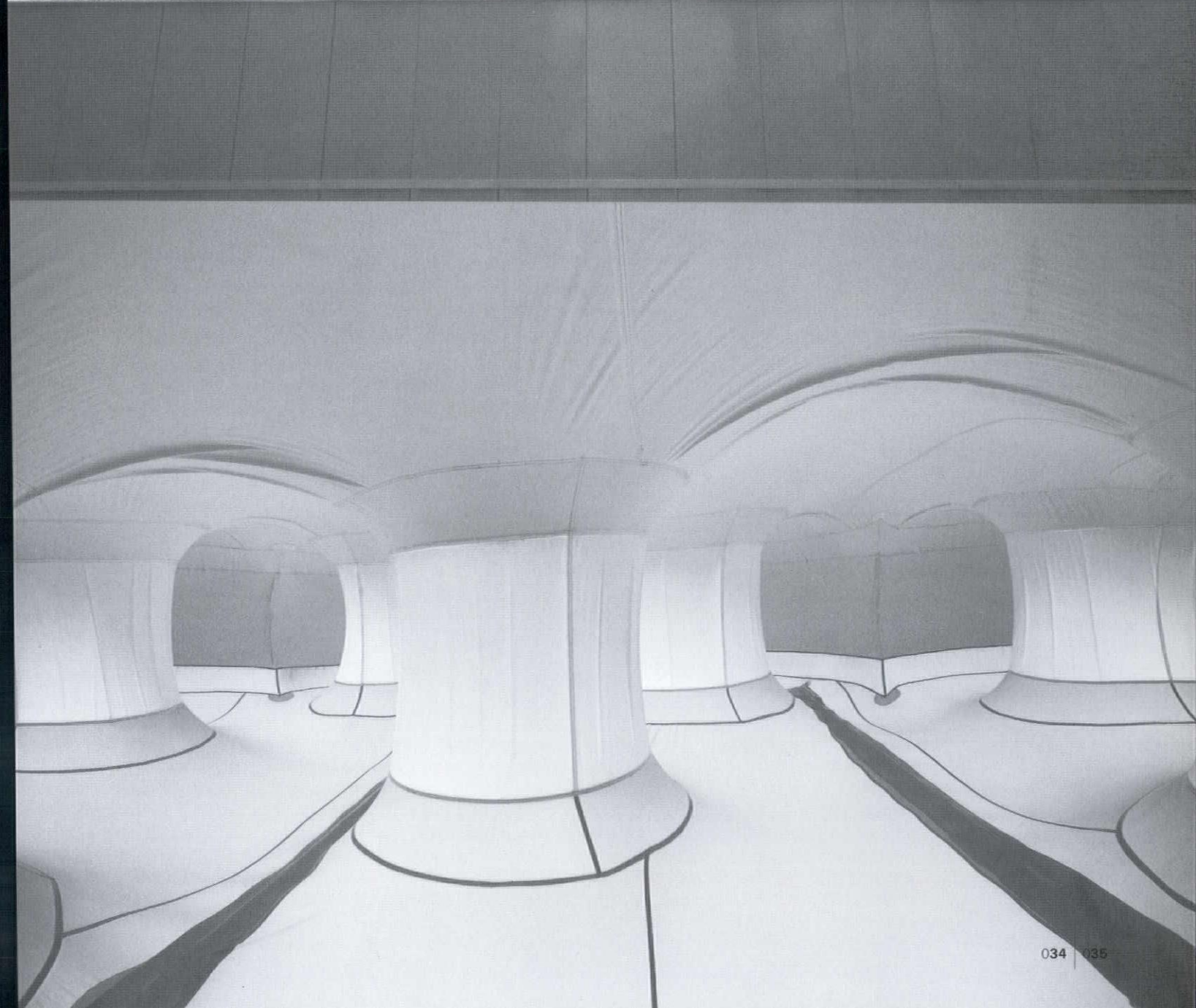
International developer Veloqx asked us to design a temporary hoarding for this prominent site in Harajuku. We have always been impressed by the irony of Japanese hoardings which are covered with prints of flowers, woodland scenes or luscious ivy, so this was our chance.

This being their first Tokyo development, Veloqx wanted to use the site's 34 meter frontage to create something eye-catching and unusual, both to announce their arrival in Japan and to raise awareness of the site.

The project was in two stages, one design for the demolition hoarding and one for a feature hoarding while the ground works were undertaken.

During the demolition phase, because of the noise, dust and the trucks we simply wrote 'sumimasen', Japanese for 'sorry' in large letters. The client was also keen to let prospective tenants how wide the frontage of the building was, so we used the manga construction characters, seen bowing on most construction hoardings, but here they are 4 m high and are holding a tape to measure the 34m long frontage. After the building was demolished, phase two of the hoarding was inflated.

Having only a limited budget, and having worked with inflatables before, we knew that this was the way to achieve the biggest physical impact. Just to erect a large area of plywood and paint it would not have been much cheaper. "pika pika" is Japanese for "shiny", the pretzels are made of the same high-tech fabric as the high altitude round-the-world balloons. Holes act as webs tying the inflatable's sides together and also help reduce wind loadings. Made of translucent fabric, the holes glow after dark when the inflatables are internally lit.



ブリティッシュ・カウンシル・インフォメーションセンター British Council Information Centre

主要用途：インフォメーションラウンジ、図書室、
イングリッシュカウンセリングセンター

所在地：東京都、神楽坂

竣工：1998年3月

延床面積：445m²

詳細：ガラススクリーン、グラフィック、回転ベンチ、デコラヴィータデスク

受賞：日本図書館協会建築賞 受賞 (1999年)

project: information lounge, library,

english counseling centre

location: kagurazaka, tokyo

completion: march 1998

floor area: 445sqm

features: translucent glass screen book cloister

big graphics, swiveling bench divider,

post formed bakelite table tops and desks

award: Japan Library Association, Architectural Prize 1999

本の分類表示サイン/グラフィック by 生意気

デジタル時代にどんどん移行してゆくに連れ、書籍はより周辺の役割を受け持つことになってゆく。このインフォメーションセンターにおいて、文字どおり書棚は回廊のように周辺を取り巻いている。書籍は今日の情報メディアに中心スペースを譲り半透明のガラススクリーンの背後からその精神的な気配だけをのぞかせる。回廊は暖かなライティングによって照らし出されコンピューター、ビデオ、衛星放送、ウェブ・ブラウジングといったモニタ中心の活動をする中央のスペースはそれを反映した寒色系ライトを使用している。また、ガラススクリーン上のグラフィックによって本、パンフレット、ポスター、モニタなど様々な情報を整理しどこに何があるのかをクリアに表示している。

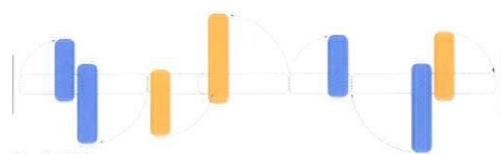
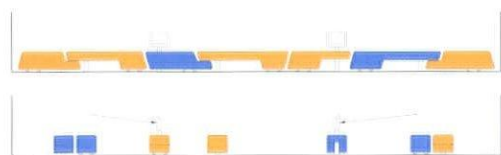
回転ベンチのラインは全体的な開放感を損なうことなくインフォメーションラウンジと開館時間の異なる図書館の間を区切る。図書館が開いている時にはベンチはピンボールのフリップperのように自由に回転させ、通り抜けることができる。世界中からのニュースを受信する衛星アンテナのような具合でベンチから突き出している2つの液晶モニタからは、BBCワールドサービスのニュースが常に流れ続ける。

As we move deeper into the digital age books literally take more of a peripheral role which lead to the cloister of books around the new information centre. The books are still cherished but are somewhat mystified by the opaque glass screens and are moved "out of focus" making space for a lively information hub in the centre. The cloister effect is highlighted by warm lighting, while the central space remains coolly lit to reflect the screen based activities of computers, videos, satellite broadcasts and web browsing. Billboard size graphics on the glass screens clearly indicate different areas of interest so no one becomes overwhelmed by the multitude of information sources whether books, magazines, pamphlets, posters, screens or counter based services.

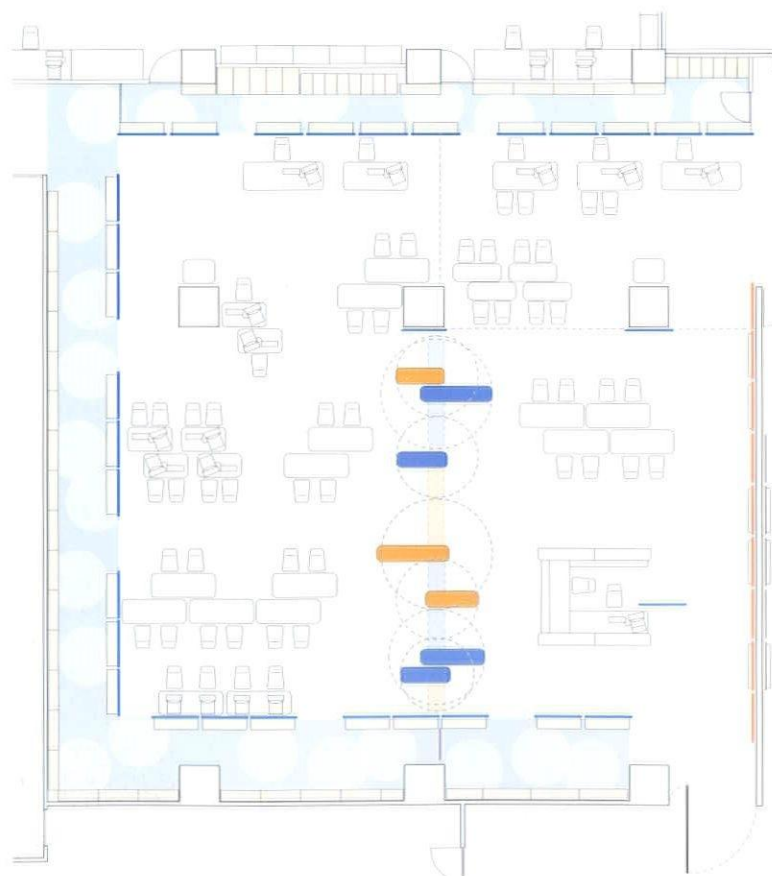
A swiveling bench line allows the Information Lounge to be open at all times while restricting access to the library area, but without losing the overall impression of openness. When the library is open the benches can be rotated in various configurations, like pinball flippers allowing people to walk through or take a seat to watch the BBC World Service. News from the BBC World Service constantly flows in from all directions, taking its expression in two flat screen LCD monitors. The screens are mounted on the benches like satellite dishes picking up news from around the world.



インフォメーションラウンジと図書館のオープン時間が異なるため、ベンチを回転させることでパーティションの機能を持たせている。全体的な開放感を損なわずに空間を仕切ることができる。



S=1:150



かんばんシェルター Kanban shelter

主要用途：グラウンド休憩所、テニスコート休憩所、キャンプサイト水場、無人野菜販売所

所在地：長野県小県郡東部町大田区休養村

竣工：1998年7月

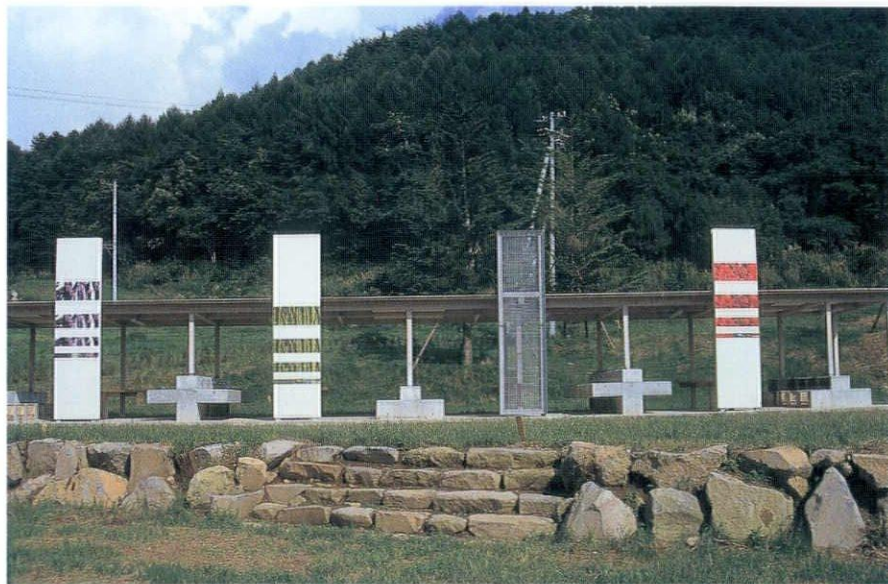
備考：MOW板、しよくぶつのせいちょうグラフィック、リサイクルカゴ

project: baseball ground shelter, tennis court shelter, bbq shelter, vegetable stand

location: ota-ku kyuyomura tobu, nagano prefecture

completion: july 1998

features: made of waste billboards and roof, educational land art graphics, recycle cages

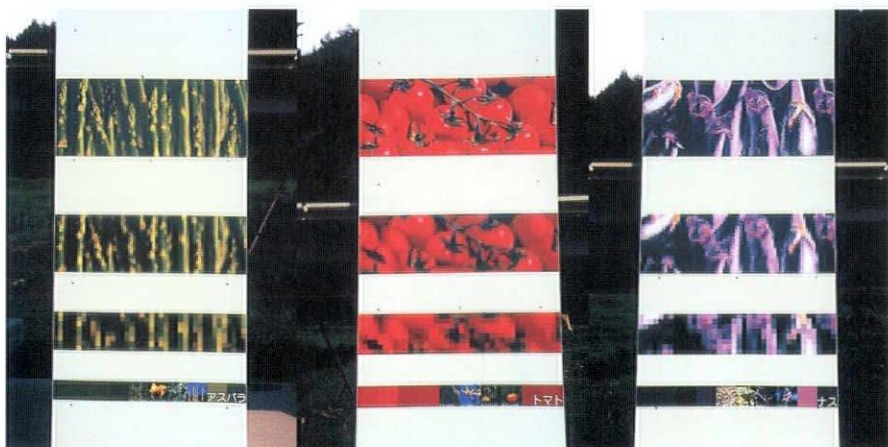


まだ春が浅い季節に公園や温室に行くと、小さな白いネームタグが土の中にぽつぽつ刺さっていて、あと2、3週間するとそこにそれぞれの新芽が顔を出すのだろうなあ、と想像する。このプロジェクト、長野の6つのシェルターにおける看板は、そういったネームタグなのだ。

このシェルターは、大田区民休養村の屋外施設である。伊東豊雄設計のプーメラン型のメイン棟に対して、屋外のアクティビティを補助するための施設として敷地の各所に散在している。キャンプ場にバーベキューのためのかまど・水場・テーブルなどを備えたシェルター、テニスコートには倉庫、野球場には30mのロッカー更衣室・倉庫、農場には農具倉庫、野菜の無人販売所、などである。すべてのシェルターには、この辺りで見られる花や野菜、植物の成長などを示すグラフィックがプリントされた大きな看板が付いている。

看板と屋根は、UK製のリサイクルプラスチック材であるMOW (made of waste) 板で出来ている。看板部分はヨーグルトカップをメーカーが回収したもの、屋根部分はオフィスで使われる使い捨てコーヒークップを回収したもの。プラスチックゴミは決して腐ったり分解されたりしないが、この特性はMOW板においては長所に転換される。看板も屋根もメンテナンスフリーであり、腐らず、塗装の必要もなく、最後にはまたリサイクルすることさえ可能なのだ。

それぞれのシェルターの両サイドは床から天井までエキスパンドメタルのカゴになっている。これは使用されるあいだに土やまつぼっくりや空き缶などで充たされ、ランドアートのような壁になってゆく。



1. 看板：アスパラ
SD0006

1. 看板：トマト

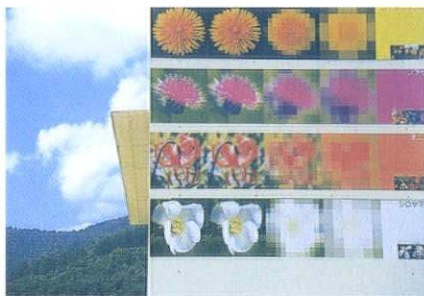
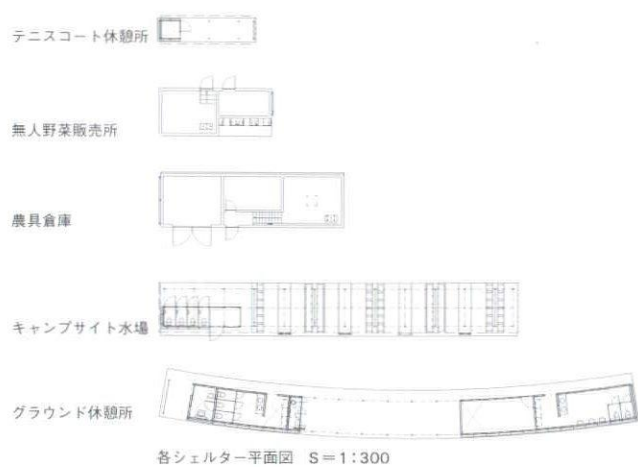
1. 看板：ナス



1. キャンプサイト水場
2. テニスコート休憩所
3. グラウンド休憩所
4. 無人野菜販売所
5. 農具倉庫



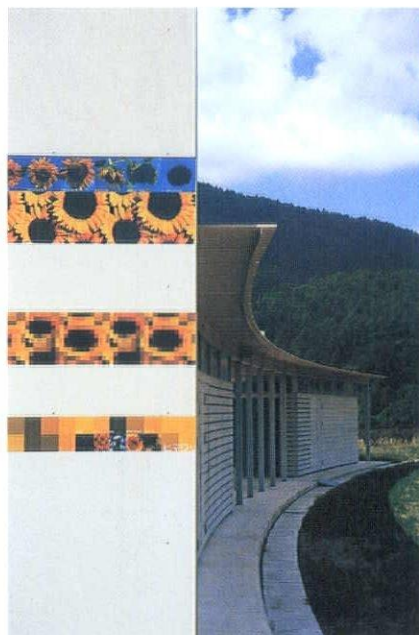
配置図 S=1:6000



2



5



3



4

Memories of going into a garden or greenhouse in spring and seeing all those little white name tags poking out of the soil, where hopefully a few weeks later green sprouts would appear, are deeply ingrained in our minds. The billboards in this project are those name tags, locating 6 buildings in the hills of Nagano.

The buildings are scattered in the extensive grounds of a long boomerang shaped outward bound centre designed by Toyo Ito. The series of small buildings act as storage or ancillary facilities to the main building. A barbeque shelter, with grills, tables and toilets, two storage shelters for the tennis courts, a 30m long curved baseball pavilion, an agricultural research shelter and a self-serve-shelter for selling vegetables. All of the shelters have huge billboards attached to them, showing colourful educational graphics of flowers, plants and vegetables which grow in the area and their life cycles.

The billboards and roofs are made from 'Made of Waste' sheets, compressed recycled plastic from the UK. The billboards are made from industrial waste from a yogurt pot company and the roofs are made from plastic coffee cups from office vending machines. This material, like plastic litter in the countryside does not rot and disappear, but in this instance it is a distinct advantage. The billboards and roofs are maintenance free, they do not rot, don't need painting, and at the end of their life they can be recycled again!

The sides of each pavilion are clad with full height expanded metal cages, filled with compost, pine cones or empty drink cans, thus becoming vertical land art walls.

ギャラリー住宅 House & Gallery

主要用途：ギャラリー、住居

所在地：東京

デザイン：1999年夏

延床面積：112.69m²

キーワード：デコトラファサード、白いギャラリー、最小限の窓-最大限の壁、ひとつの部屋、柱なし、中庭

project: house, gallery

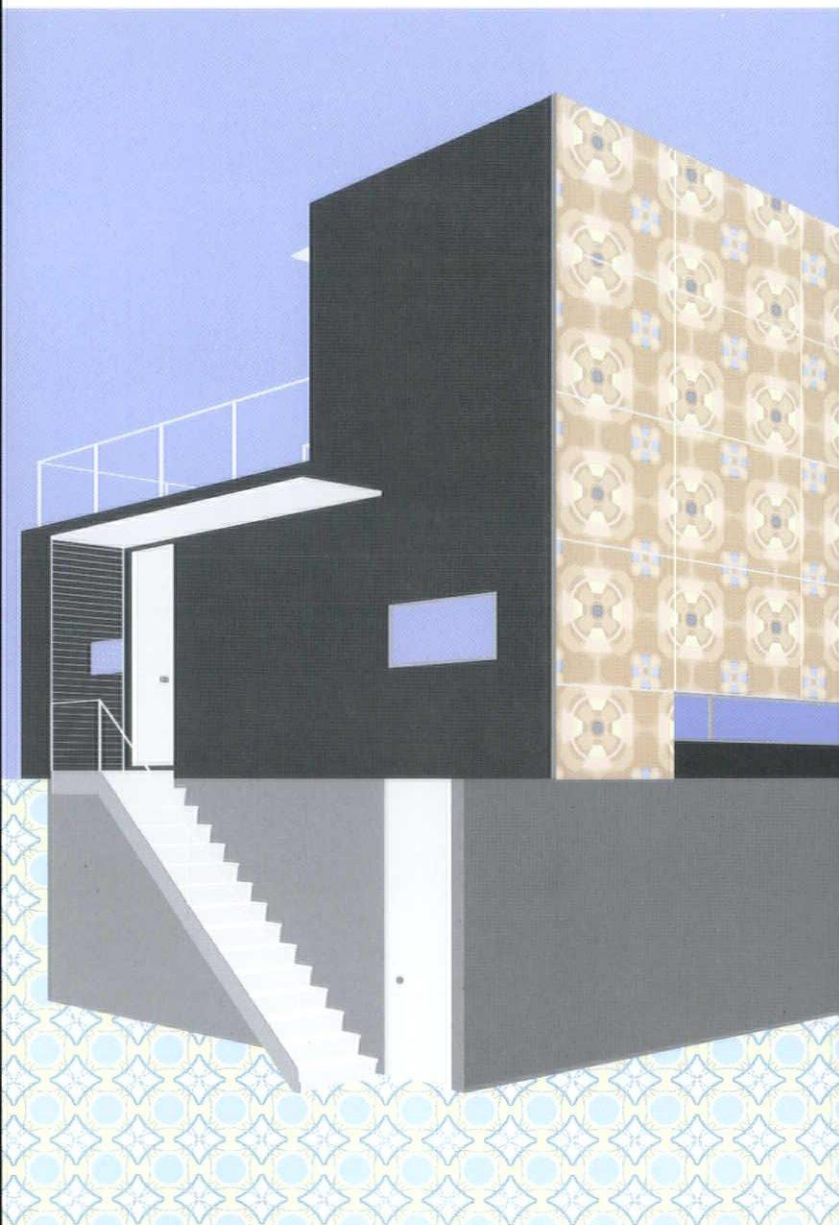
location: tokyo

design: summer 1999

floor area: 112.69 sqm

keyword: metallic deco-tra façade, neutral white gallery

minimum windows-maximum wall hanging space, one room, column free, inner courtyard

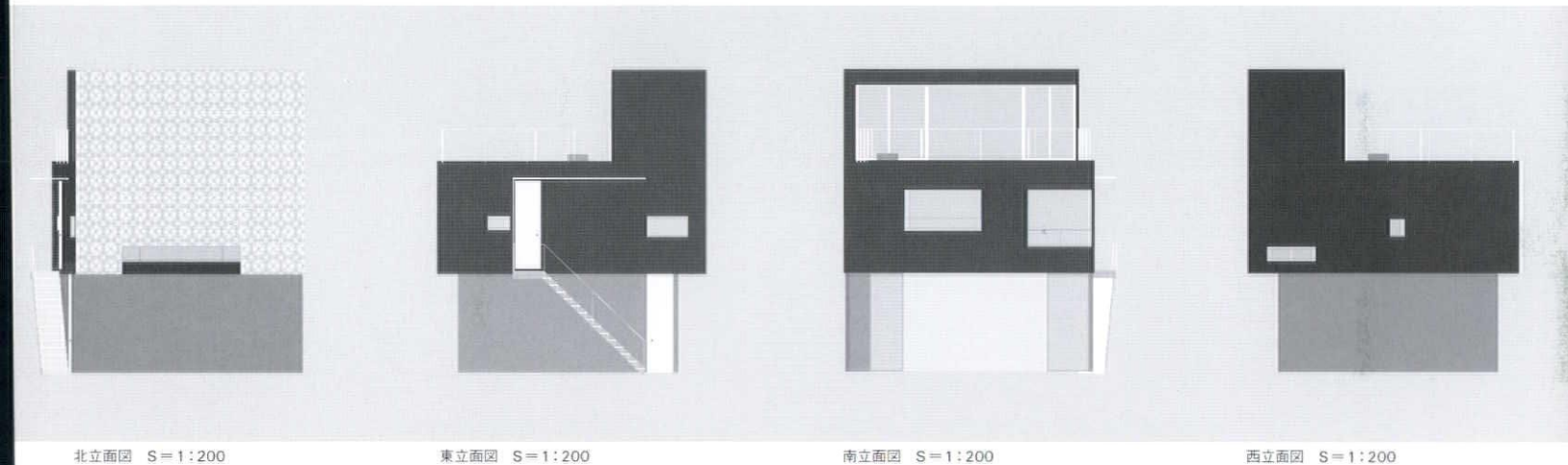


デコトラファサード

映画「ブラック・レイン」で刺青と並んで世界的に有名になったデコトラは、なんとなく裏社会風でヤクザ的なものを感じさせるのだけれど、一方で非常に創造的だし過剰に装飾的で、なぜか惹かれる。そのエッチングステンレスのパネルやトレーラーの力強いL字型がこのギャラリー住宅のヒントになっている。

このプロジェクトでは1階にギャラリー、2・3階に庭を囲む形の住宅を設けることが要求された。クライアントの主な注文は、できる限り壁面積を増やすことと大きな作品のための2層分のスペースを一部に設けることであった。ガラス張りの中庭を通して屋内に光を導くことで外壁にはほとんど開口が不要となり、壁面積を最大限に増やすことができる。

2層分の壁は、外部においては道路に面した大きな空白のファサードをつくり出してしまう。しかしこれは見方によっては大きなキャンバスなのだ。ここにエッチングステンレスのパネルを用いる。

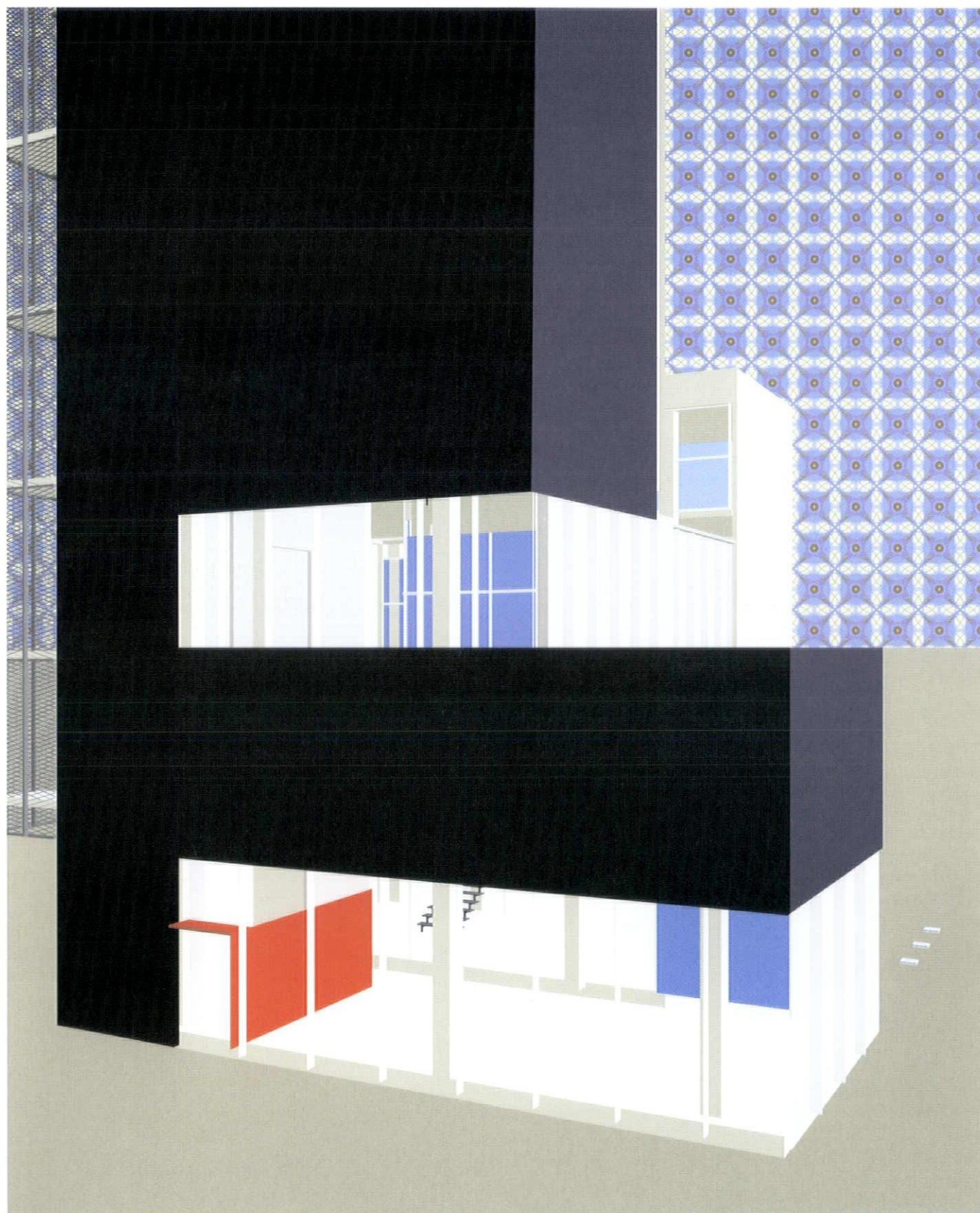


The gaudy Deco-Tra, the highly decorated trucks made famous around the world in 'Black Rain', like tattoos in Japan, while having an underworld gang related feeling are incredibly creative and sophisticated. The etched stainless steel panels and strong L-form of the trailers was certainly an influence for this gallery and house.

The project called for a small gallery on the ground floor, and a house based around a courtyard on the 2nd and 3rd floors. The client's main request was to maximise the wall space in the house, including a double height space for large art works. Allowing the light to enter the house through the fully glazed courtyard, there are hardly any windows on the external walls, thus maximising the wall area.

The external wall of the double height space therefore creates a large blank street façade, which in turn was seen as a canvas for art - etched stainless steel panels.

ファッション・コマンダー Fashion Commander



Coco Chanel's black and white - colours of the early 20's have survived in some form in most fashion designers collections, even today. This headquarter building for a world famous designer took those two colours along with the designer's preference for strong bold graphic shapes to create a landmark building on one of Tokyo's most prominent corner sites. The building was a simple composition of 3 distinct blocks. The pure white block contained the designer studio while the dark black glass block contained the office element of the building. Sandwiched between and extending into the two blocks a clear glazed atrium contained the retail element of the building. The project was on site when the speed of Tokyo's developers caught up with it. The adjacent property was bought and the site redeveloped as a whole, leaving this project as a set of models, CGs and concrete piles in the ground.

主要用途：オフィス、ブティック、デザインスタジオ／所在地：東京都港区南青山／デザイン：1999年5月
延床面積：990m²

キーワード：ダークなサングラス、ファッションショー、パーティ、パフォーマンス、漆黒、カッチリした形態、誘惑的な半透明、シンプルなエレガンス、赤いリップスティック、力強い輝き

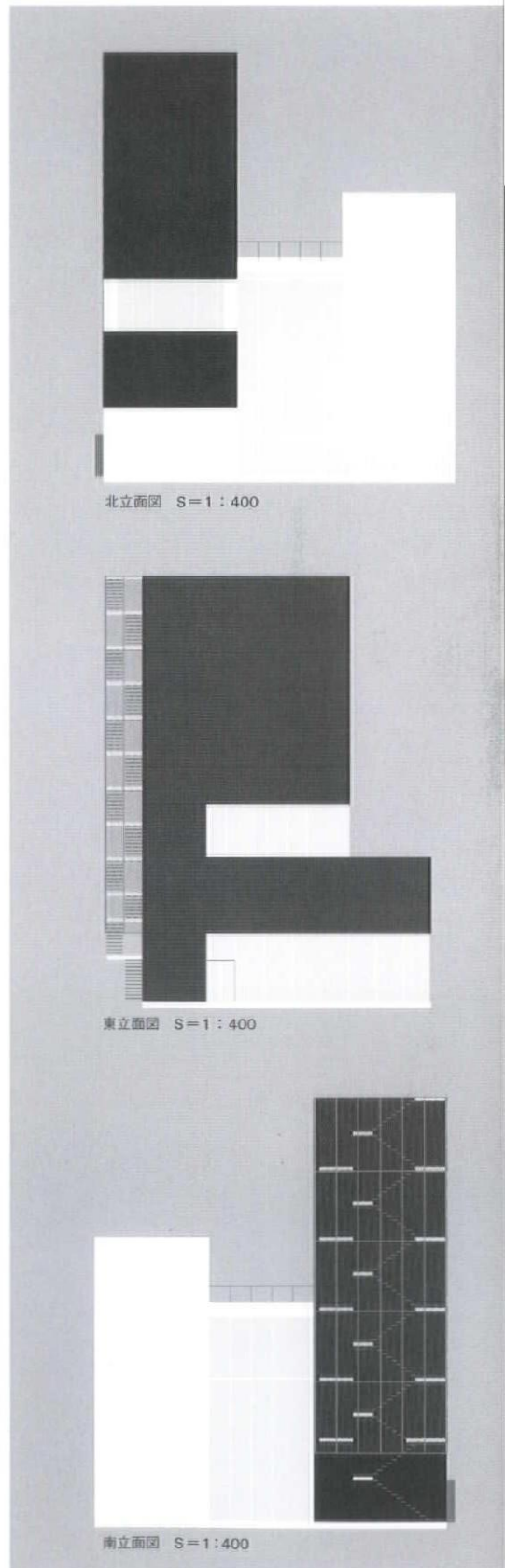
project: fashion hq building, boutiques, design studio, offices / location: aoyama, tokyo
design: may 1999 / floor area: 990 sqm

keyword: dark sunglasses, fashion shows, receptions, parties, performances, deep black lacquer, clean cut forms, white seductive translucency, simple elegance, red lipstick, strong clarity

ココ・シャネルの白と黒—この20世紀初頭の流行色は、今日でもほとんどのファッションデザイナーのコレクションにおいてなんらかの形で見ることができる。世界的に著名なファッションデザイナーの本社ビルとして計画されたこのプロジェクトでは、東京でも特に目立つこの敷地においてランドマークとなるような力強く大胆で明快な形態を、というクライアントの希望を酌み、この2つの色を採用することになった。

この建物は、シンプルな3つのブロックから成っている。白いブロックはデザイナーのアトリエ、黒いガラスのブロックは事務所機能、これらに挟まれ貫入する透明なガラス張りアトリウムのブロックはショップ機能をそれぞれ担っている。

このプロジェクトは、ディベロッパーにより計画半ばに隣接する敷地が購入され、全く別のプロジェクトとして再検討されることとなってしまったのだった。我々に残されたのは一連の模型と、CG、製本済み建築図書の山のみであった。



UK98 パビリオン Festival UK98 Pavilion

主要用途：イベント用パビリオン

竣工：1998年1月

延床面積：130m²

備考：バルーン（内部にファンと照明）、アルミ製ヨットマスト、木製パッキングケース（ベンチ、重りとしても使用）

project: festival pavilion

completion: Jan 1998

floor area: 130sqm

features: inflatable balloon envelopes containing sodium halide lighting

structure: aluminium yacht masts, packing cases with water bags act as seats and ballast

イギリスの発明品には、ひとつあるものが多い。たとえばホバークラフトやジェット・エンジン、ダイソンのサイクロン掃除機がいい例だ。UK98パビリオンのデザインアプローチに共通するものこういったスピリットだ。

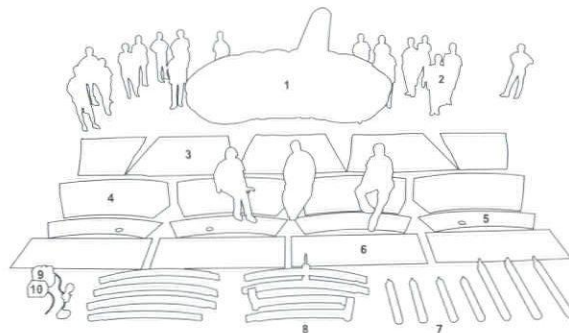
英国大使館とブリティッシュ・カウンシルとのやり取りの中で、英国祭98のイベントが一年を通じて行われる間、日本各地の会場に運ぶことができる組み立て式のパビリオンのアイデアを育てていった。このパビリオンには英国の今日を紹介する意味でイギリスの先端テクノロジーが用いられた。ブリストルのカメロン・バルーンは世界でも指折りの熱気球メーカーである。世界初の無着陸世界一周に成功した熱気球のデザイン・製作をしたのもカメロンだ。彼等に屋根のバルーン製作を依頼した。構造体はプールのプロクター・マスツに依頼、彼等はレース用ヨットのマストを製作する、やはり屈指のスペシャリストである。

バルーンの屋根というコンセプトは、もともと都市博のために展開していたものだった。しかし都市博自体は、ほぼすべての準備が整い建設目前というところで中止となったのだった。テンポラリーなプロジェクトであるUK98パビリオンというチャンスを得て、この時のアイデアがやっと実現されたと言えることができる。

パビリオンはフレキシブルでなければならない。私達は日本の伝統的な盆の形にヒントを得て円形の組み合わせによるプランをスタディした。直線、曲線、円形に並べたり個々に使用することも可能なユニットによるものだ。

それぞれのユニットは4つのパッキング・ケースに収納して運搬される。このケースはパビリオンのベンチとして使用されると同時に、その中に水袋を入れることで強風時には全体の重りとして働く。どのような環境でパビリオンが使用されるか分からないため、テントのようにロープとアンカーで固定するような方法が取れない場合もあり得た。だから水の重りというのが最もフレキシブルな解答だった。アルミのストラクチャーのすべてのジョイントにはほぼ組み式ジョイントが使用された。4つのボルトによって各ジョイントをしっかりと固定する。この単純なシステムによって誰でもパビリオンを組み立てることが可能になった。4人から6人の人手があれば、1パビリオン1時間、すべての組み立てに5時間程度あればよい。バルーンにはそれぞれ150Wの小さな送風ファンが付いており、膨らみきるまで10分程度、あとはファンをまわし続けて膨らませている。ジッパーとベルクロによってバルーンを開き、バルーンの中にナトリウム電球を設置できる。

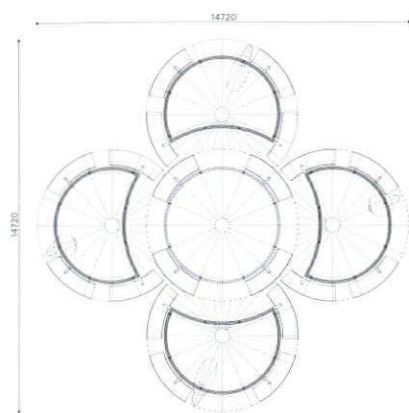
このパビリオンは最終的に一年間の英国祭期間中、風雪に耐えながら日本各地の35ものイベントで使用された。



- 1: inflatable canopy
- 2: architectural students
- 3: transparent side curtains
- 4: packing cases
- 5: packing case lid
- 6: water bladders
- 7: column sections
- 8: ring beam sections
- 9: light and transformer
- 10: fan for canopy







イベント風景

The UK is well known for its quirky inventions: the hovercraft, the jet engine are good examples, as is James Dyson's cyclone vacuum cleaner. It was with this spirit we approached the design of the UK98 pavilion.

The pavilion uses leading UK technologies to show the best of Britain. Cameron Balloons of Bristol, the worlds leading hot air balloon maker made the inflatable roof canopies. They designed and built the first balloon to circum-navigate the world non-stop. The structure for the pavilion was made by Proctor Masts of Poole, the world's leading racing yacht mast specialists.

The brief which we developed jointly with the British Embassy and British Council in Tokyo was for a demountable pavilion which would be transported around Japan during UK98, a year long British festival in Japan. By the end of the festival it had been erected 35 times all over Japan, enduring snow and gales.

We had originally developed the inflatable roof concept for Tokyo Frontier - a project which was cancelled when it was on site, after getting all the necessary approvals. Due to the pavilion's temporary nature we felt it was an ideal opportunity to put our previous ideas to the test.

As the pavilion had to be very flexible, we developed a plan of interlocking circles, similar to traditional Japanese trays, which allowed the elements to be arranged in a straight line, radial pattern, curve or individually.

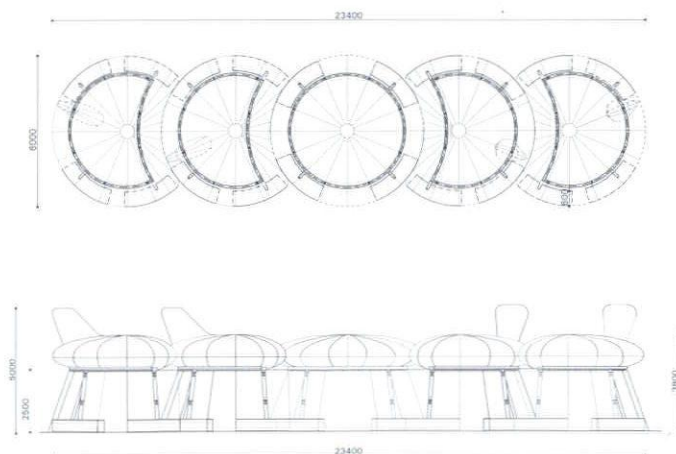
Each element arrives in four packing cases, when unpacked the cases form bench seats and can be filled with water bladders to weight the pavilion down when windy. We were unsure of what surfaces the pavilion would be erected on so we could not assume it could be staked to the ground like a tent, therefore the water ballast solution was the most flexible solution.

The aluminium structure uses the same tongue-and-groove joint for all the connections. Four bolts, thread into the structure securing each joint. This simple system allows anybody to erect the pavilion. Four to six people can erect the whole pavilion in around 5 hours, one hour per element.

Each canopy is inflated by a small 150w fan, which runs continuously. Initial inflation takes less than ten mintues. A zip with a velcro flap allows access into the envelope where a sodium halide lamp is suspended from the fabric ribs which form the internal structure of the balloon.

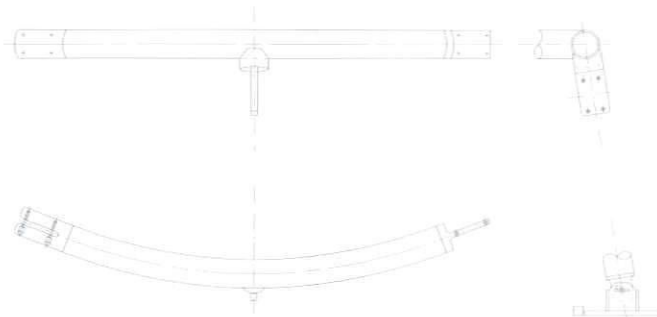
Once inflated the balloon is lifted on top of the ring structure and secured by an elasticated cord which runs through a series of hooks and eyes.

The UK98 festival was opened by prime minister Tony Blair in January 98. The pavilion was erected on the British Ambassador's lawn for the opening event. True to British weather it snowed! Although snow loading hadn't been a major consideration, the roofs coped with 20cm of wet snow admirably.

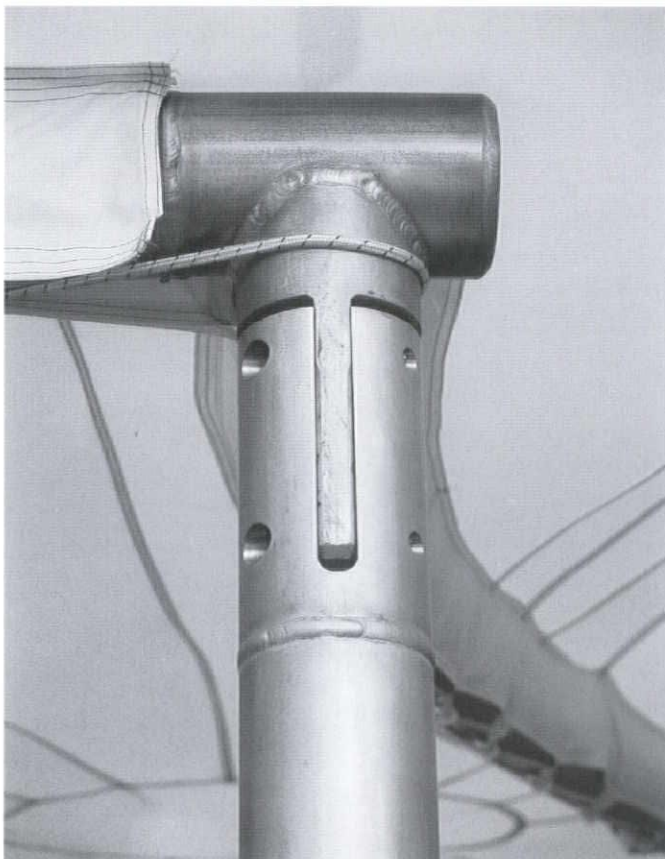




バルーンの空気孔



部材ディテール S=1:30



バルーンとマストのジョイント

東京国際都市博覧会

Tokyo Frontier World city EXPO

主要用途：レストラン、キオスク、警備ボックス他

所在地：東京都お台場臨海副都心

デザイン：1995年5月

延床面積：458m²（レストラン）、49m²（トイレ）、67m²（ビーナッツ）、114m²（キオスク）、7m²（警備ボックス）備考：バルーン屋根

project: restaurants, kiosks, police boxes

location: tokyo waterfront / design: may 1995

floor area: 458sqm (restaurant), 49sqm (toilet), 67sqm (bean), 114sqm (kiosk), 7sqm (police box)

世界都市博はお台場臨海副都心において206日間の予定で開催されることになっていた。私達はそこでレストランから警備ボックスまで幅広い用途の15の建物をデザインした。

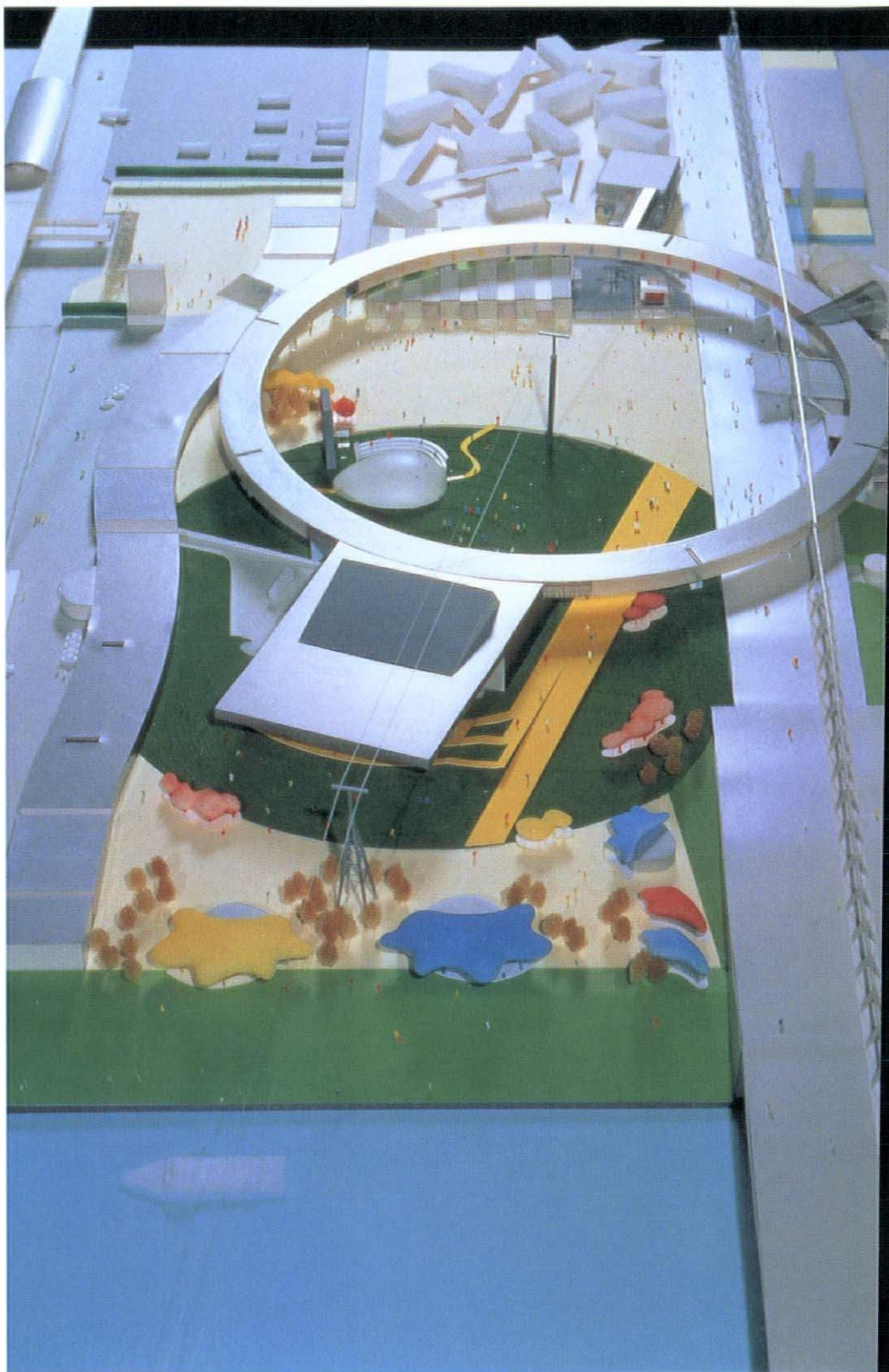
仮設というイベントの特性から、通常は用いることのできない構造、素材、色を使用することが可能だった。つまりバルーンを用いることができたのだ。それによって最少の材料で最大のエリアを架構することができる。「紙風船」がこのプロジェクトの発想の鍵であった。紙風船は、手の上で弾ませるとバリバリと音をたてる。海辺の潮風にふかれてバルーンの屋根がやはり音をたててそよぐところを思いうかべた。バルーンの素材にリップストップナイロンを使用することで、風に吹かれるとそよそよと音をたてる。

会場を上空から見下ろすゴンドラによって博覧会に到着すると、目の前にはおもちゃ箱をひっくり返したようなカラフルなバルーン達が出迎える。

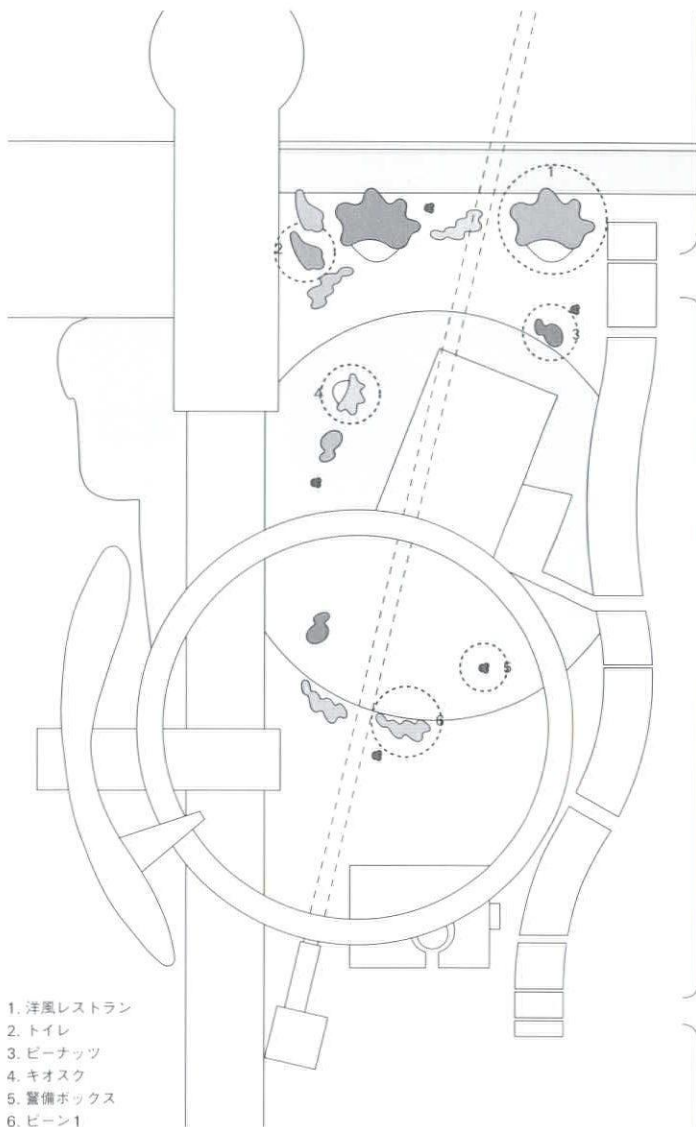
Tokyo World City Expo was due to run for 206 day on Tokyo's new water front area, Odaiba. We designed 15 building for facilities ranging from restaurants to police boxes.

The temporary nature of the event allowed us to explore more unusual structures, materials and colours, hence the inflated roofs, providing maximum site coverage with the least material. The Japanese 'kami fusen', a colourful ball made from waxed paper was a key inspiration for the project. The crispy noise it makes when it is played with was something we imagined our inflated roofs would make as they swayed in the bayside breeze. The balloons were made of rip-stop nylon which produced this great sound as it rested in the wind.

One arrived at the expo by gondola, which crossed the site - so the view from above of the roofs became equally important, the buildings looking like toys scattered on a playing field.

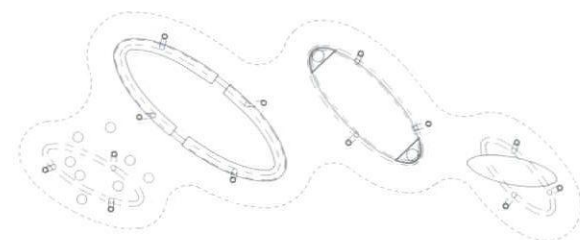


全体配置

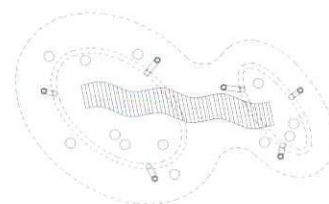


1. 洋風レストラン
2. トイレ
3. ビーナッツ
4. キオスク
5. 警備ボックス
6. ビーン1

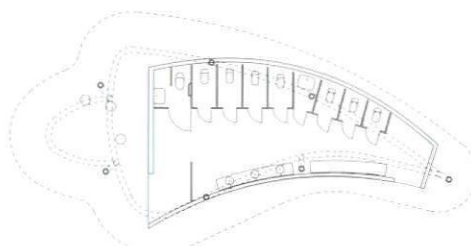
配置ドローイング



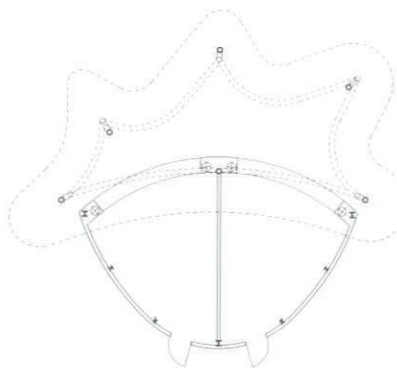
ビーン1 平面図 S=1:300



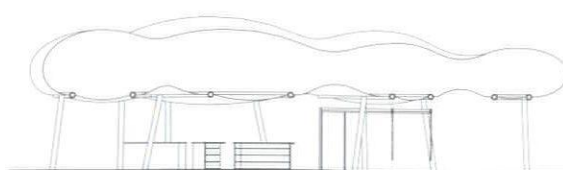
ビーナッツ 平面図 S=1:300



トイレ 平面図 S=1:300



キオスク 平面図 S=1:300



ビーン1 立面図 S=1:300

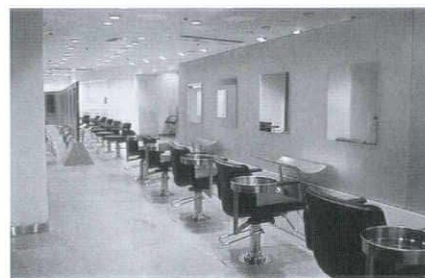
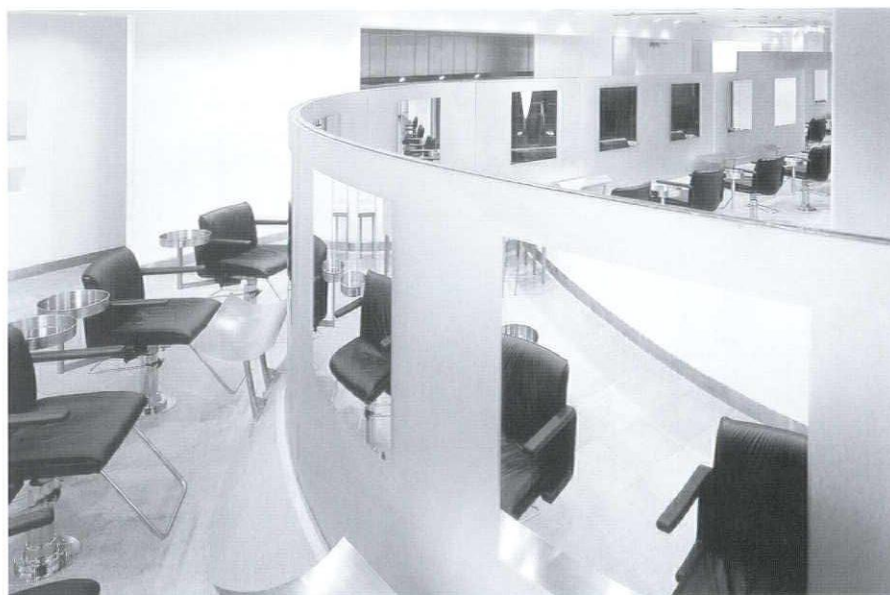
大関早苗美容室 Sanae Ozeki

主要用途：美容室
所在地：東京都中央区銀座
竣工：1989年6月
延床面積：195m²
詳細：曲げミラー一部タペ加工
project: hairsalon
location: Ginza
completion: June 1989
floor area: 195sqm
features: curved acid etched mirror

東京にやってきたばかりの私たちは、本当に驚いていた。みんな鏡やガラスに写り込んだ自分の姿をほんとうにいつでもどこでもチェックしている。そんなに気になる？

銀座の中心に位置する大関早苗美容室は、あまり時間のないOLやショップ店員の顧客を多く抱える美容室だ。私たちはこのプロジェクトをベルトコンベヤーに見立てた。一部で曲線を描く長いミラーの帯を30セットの客席が囲む。曲面のミラーには都市の完璧主義な虚栄心が歪んで映し出される（なんてね）。

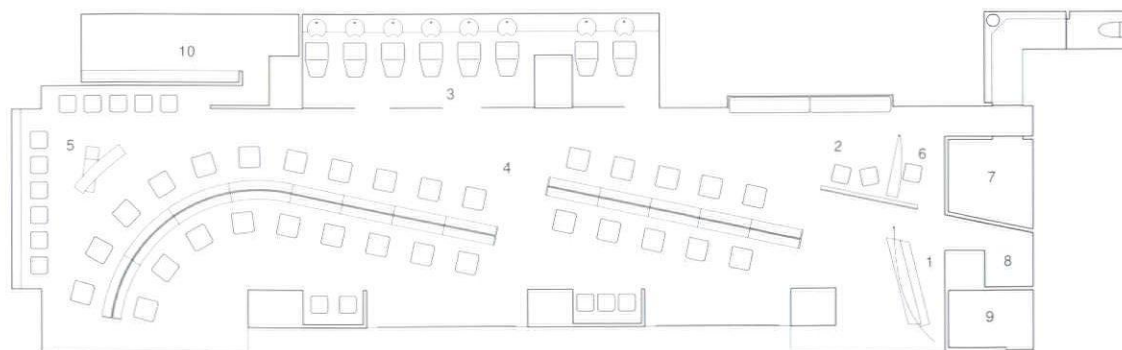
忙しい日には50人のスタッフと50人の客が店内に溢れる。華やかな人々が空間に色を加えるから、インテリアの色と素材は最小限に押さえ、ガラス、テラゾ、ステンレスのみを用いた。



Freshly arrived in Tokyo we were totally surprised by the vanity of people in the city - constantly checking their appearance, publicly, in mirrors or reflections.

Located in the heart of Ginza, Sanae Ozeki hairsalon primarily serves a clientele of office ladies and shoppers, none of which have too much time on their hands. We looked at the project as a conveyor belt. 30 set chairs surround a long ribbon of mirror which has a sweeping curve at one end. Tongue in cheek, the concave/convex face of the mirror was meant to distort the somewhat perfect vanity of the city.

Colour and materials were kept to a minimum, using just glass, terrazzo and stainless steel. So on a busy day 50 staff and up to 50 guests add colour and life to the space, without competing against the interior.



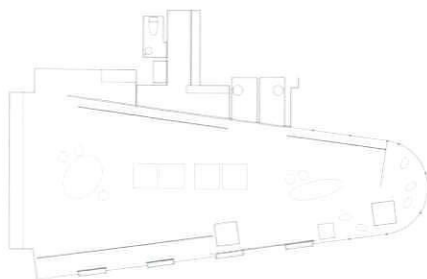
1. レセプション
2. 待ち合い
3. シャンプー・スペース
4. セット
5. パーマエリア
6. メーキャップ
7. エステティック・ルーム
8. クローク
9. 事務室
10. スタッフ・ルーム

ヨーガン・レール

Jürgen Lehl

浜松店

Hamamatsu

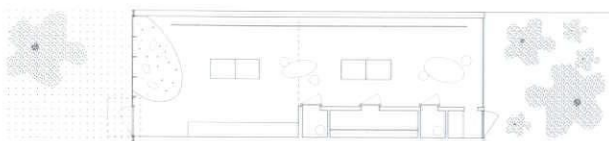


ヨーガン・レール

Jürgen Lehl

佐賀店

Saga

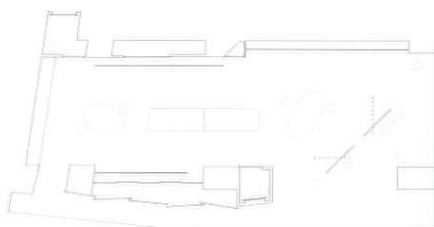


ヨーガン・レール

Jürgen Lehl

京都店

Kyoto

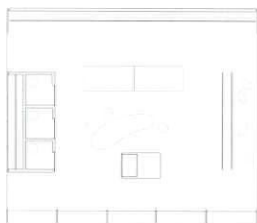


ヨーガン・レール

Jürgen Lehl

横浜店

Yokohama



各平面図 S=1:300

主要用途: 服飾店舗

所在地: 札幌市、佐賀市、横浜市、浜松市、京都市、神戸市

竣工: 1993~95年

project: boutique

location: Sapporo, Saga, Yokohama, Hamamatsu, Kyoto, Kobe

completion: 1993~95

Jürgen Lehl is a well known and respected fashion house whose clothes are 100% organically composed and naturally dyed. The design of Jürgen Lehl's clothes refers to the familiar - to traditional Japanese clothing - while being recognisably contemporary in both a subdued and elegant way. Lehl's clothes are a part of a consistent approach to design that extends to that of the settings in which they are displayed.

Lehl was very concerned that a feeling of wabisabi was conveyed within the six new stores we designed. Wabisabi being that feeling of warmth and patina generated by continual use. In order to achieve that feeling we resorted to craftsmen rather than to machine manufacturing such as hand poured and hand sandblasted glass, hand hammered aluminium, hand worked wood, pure exposed silver leaf and unpolished stone. These materials gave that wabisabi feeling yet still formed a sharp and elegant back drop for the clothes.

ヨーガン・レールは100%天然素材と自然の染料を使用した洋服のデザインでその名を知られている。レールの服のデザインは日本の伝統的な服飾との関連性をよく引き合いに出されるが、一方でそのエレガントさ、柔らかさにおいて非常に今日的でもある。レールの洋服における一貫したデザイン観はそれがディスプレイされる空間のしつらえにも延長されていった。

レールは、私たちのデザインした6店舗において侘び寂びの感覚を伝えて欲しいということにこだわっていた。侘び寂びとは使い続けることで生まれる温かみや古色といったものだ。そういった雰囲気を得るために、工業製品のなものをさけて、職人の手の跡を感じさせる素材、工法を使用することにした。例えば手作りのガラスに手でサンドブラストをかけたり、打ち出しのアルミ、手彫りの木、銀箔、天然石などを使用したのである。こういった素材は侘び寂びの感覚を表現しながらも洋服に対してシャープでエレガントなバックドロップとなっている。

浜松店

佐賀店

京都店

横浜店

U-project U-project

主要用途：ファッション・アトリエ

竣工予定：2001年4月

延床面積：567m²

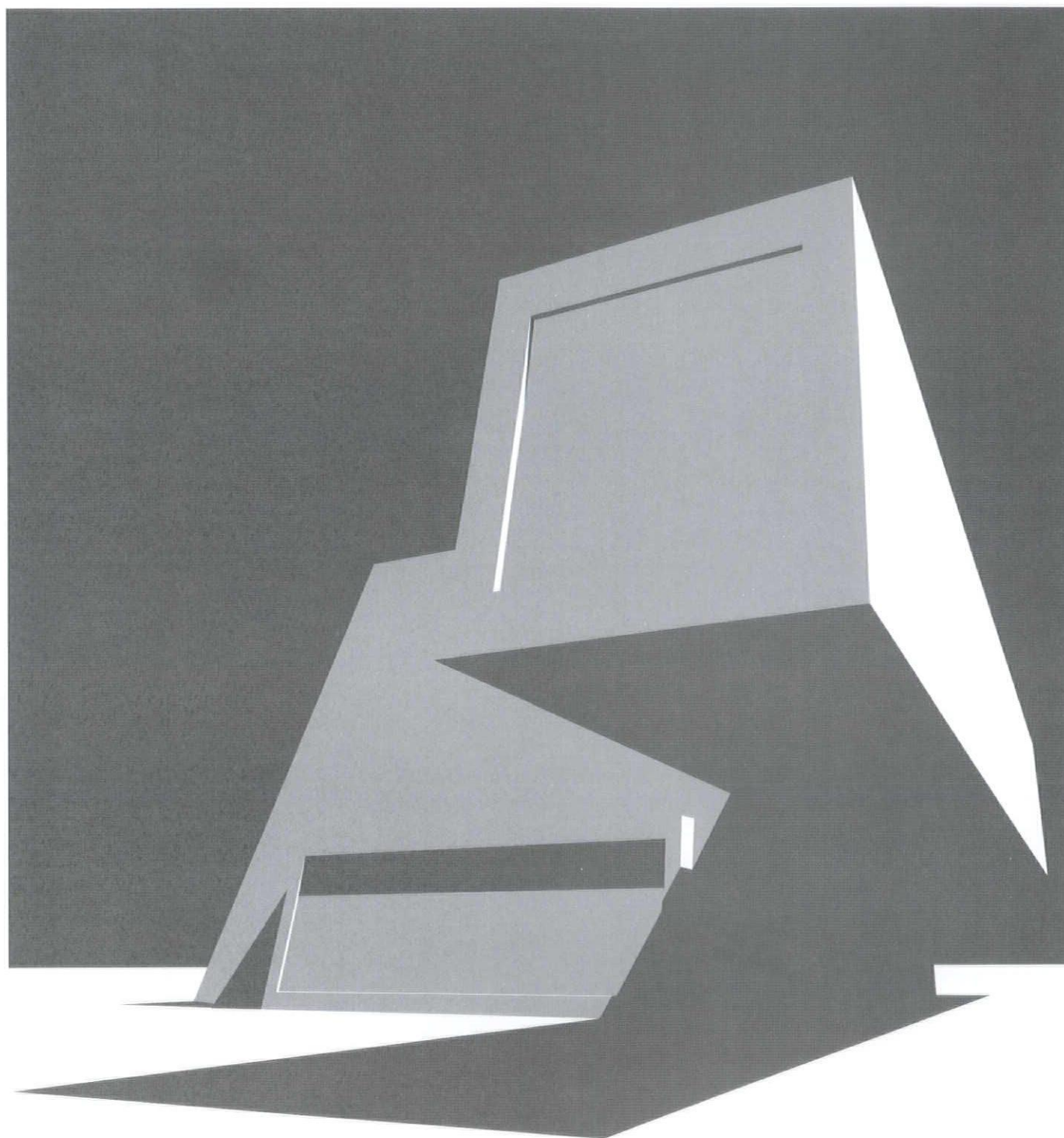
備考：20mキャンティレバー・プレス・チューブ、レンガ、キャスト付き温室

project: fashion atelier

completion: April 2001

floor area: 567sqm

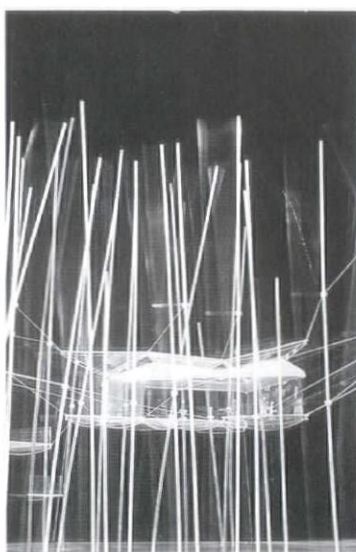
features: 20m cantilever press tube, London brick, wheely green house



グラスハウス 2001 "Bamboo house"
Glass house 2001 "Bamboo house"

15

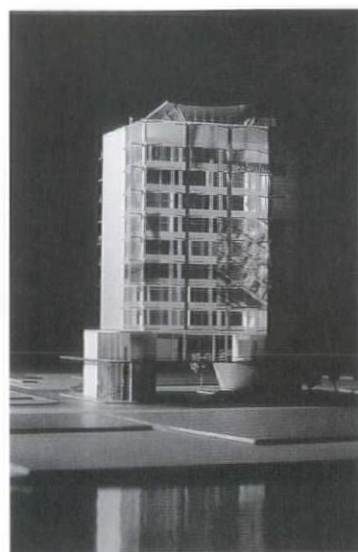
デザイン: 1990年6月
備考: インテリジェント竹ポール、熱・電気伝導ガラス床、透明度コントロールガラス、グラスファイバー布 / 第25回セントラル硝子国際建築設計競技「グラスハウス2001」最優秀賞
design: Jun. 1990
features: intelligent bamboo poles, heat and electricity conductive glass floor, transparency controlled glass sheets, glassfiber fabric
25th central glass international architecture competition, first prize



Nプロジェクト
N-project

16

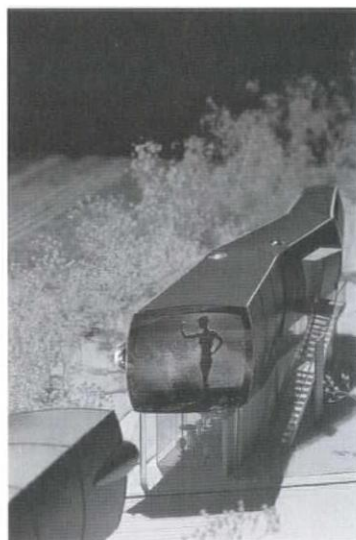
主要用途: ガソリンスタンド、レストラン、オフィス、ペントハウス
所在地: 長野県長野市
デザイン: 1994年3月
備考: LCDメディアファサード
project: gas station, fastfood, office, penthouse
location: Nagano city, Nagano prefecture
design: Mar. 1994
features: coloured LCD media facade



ビデオ銭湯
Video-sento

17

主要用途: 銭湯、アスレチックジム、カフェ
所在地: 神奈川県横浜市
デザイン: 1994年3月
延床面積: 211.16m²
備考: 浴室と屋外から鑑賞できるツインビデオスクリーン、魅かれあう男湯と女湯
project: sento, athletics gym, cafe
location: Yokohama, Kanagawa prefecture
design: Mar. 1994
floor area: 211.16sqm
features: twin video screens visible from bath and outside, male-female attraction



イデアワークステーション
Idee Workstation

18

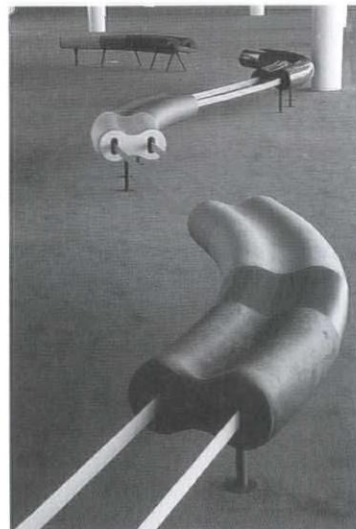
主要用途: イデア家具ショールーム、デザインオフィス
所在地: 東京都世田谷区下馬
竣工: 1996年6月
延床面積: 193m²
備考: 50年代のガソリンスタンド、看板スクリーン、ツインポリカーボネート、エキスパンドメタル、MOW板、色付きフィルム
project: idee furniture showroom, design office
location: Shimouma, Tokyo
completion: Jun. 1996
floor area: 193sqm
features: 50's gas station, billboard screen, twinwall polycarbonate, expanded metal, made of waste, coloured film



くねくねベンチ
Kune kune bench

19

主要用途: 長岡リリックホールロビー家具
所在地: 長野県長岡市
竣工: 1996年10月
材料: 自動巻取り式ナイロンベルト、ビニール、スエード、サテン、ナイロン、鮮やかなカラー
project: lyric hall foyer furniture
location: Nagaoka city, Nagano prefecture
completion: Oct. 1996
material: self-retracting nylon belts stretch between benches, vinyl, velvet, suede, satin, bright colours



20

主要用途: クラブ / 所在地: 東京都歌舞伎町 / 竣工: 1997年10月 / 延床面積: 1570m² / 備考: 高さ40m曲面プロジェクションスクリーン、オレンジ・バー・CODE、ナイトブルー・エンCODE、パニラ・デCODE
project: night club/location: Kabukicho, Tokyo/completion: Oct. 1997/floor area: 1570sqm/features: 40m wide curved projection screen wall, orange barCODE, night blue enCODE, vanilla deCODE



ラ・チヨッカ
La Ciocca

21

主要用途：美容室

所在地：千葉県市川市本八幡

竣工：1997年8月

延床面積：73m²

備考：360°回転ミラーボックス、床・

壁・天井イエローライトグリーン

project: hairsalon

location: Motoyawata, Chiba pre-
fecture

completion: Aug.1997

floor area: 73sqm

feature: mirrorboxes swiveling

360degrees, floor・wall・ceiling:

yellow lime green



ちゅうくくちエア、ちゅうくくベンチ
chu-coo chair, chu-coo bench

22

主要用途：ロビー家具、所在地：NHK長野放送局、デラックス、
BBH/竣工：1998年2月/サイズ：チェア w600 d800 h690、
ベンチ w2000 d450 h410/材料：つや有りビニール、ヘルベ
ット、蛇革、クローム
project: lobby furniture/locations: NHK Nagano, DELUXE,
BBH/completion: Feb. 1998/size: chair/w600 d800 h690,
bench/w2000 d450 h410/material: shiny vinyl, velvet,
snake skin, chrome



真ッ赤プロジェクト
project RED

23

主要用途：デパート店舗ファサード改装

所在地：東京都

デザイン：1999年11月

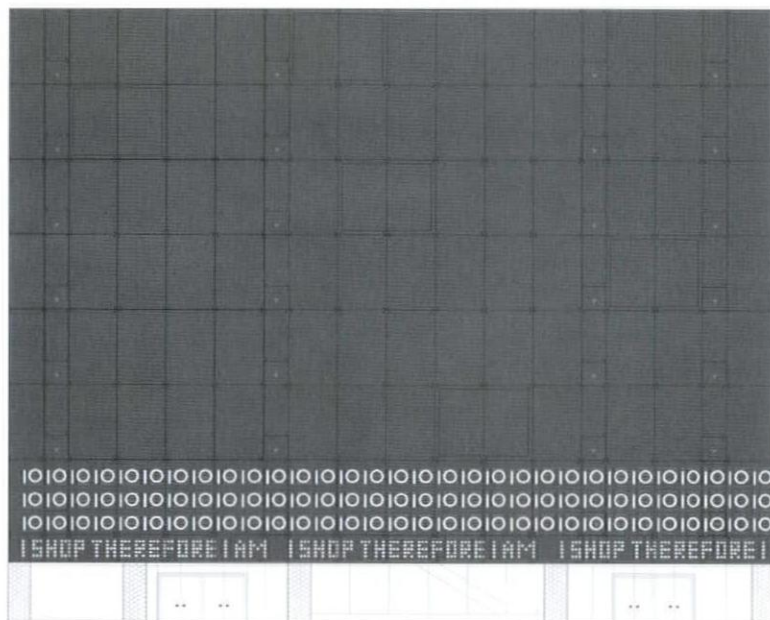
備考：真ッ赤なりフレクター、LED、シブヤ・ギャル、カリスマ・
ショウケース

project: department store facade

location: Tokyo

design: Nov. 1999

feature: red reflectors, LEDs, shibuya girls, charisma
showcase



バートル・ボグル・ヘガティ (BBH)
Bartle Boger Hegarty (BBH)

24

主要用途：オフィス、ミーティングスペース、所在地：東京都港区赤坂/竣工：
1999年8月/延床面積：84.9m²/備考：白い（ラッカー塗り）U、
掘りこたつ、Zランプ
project: office, meeting space/location: Akasaka, Tokyo/comple-
tion: Aug. 1999/floor area: 84.9sqm/feature: white (lacquered) U,
hori kotatsu, anglepoise lighting



ビーチ・ハウス
Beach House

25

主要用途：別荘

所在地：静岡県下田市入田浜

竣工予定：2000年12月

延床面積：219m²

備考：FRPスクリーン、デッキ、オー
シャンビュー、切妻屋根

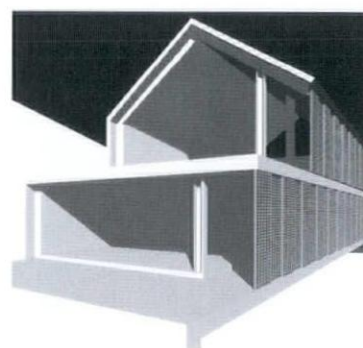
project: weekend house

location: National park iritahama
beach, Shimoda, Izu peninsula,
Shizuoka prefecture

completion: Dec. 2000

floor area: 219sqm

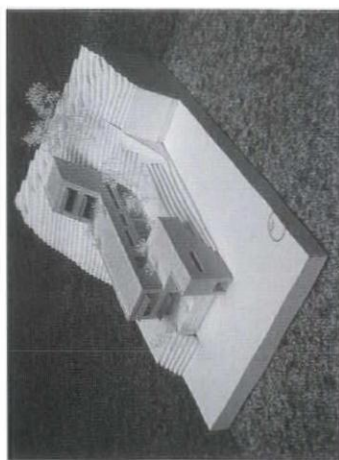
feature: fiberglass screens, decks,
totally glazed seafront facade,
pitched roof



26

ヘビハウス
Hebi House

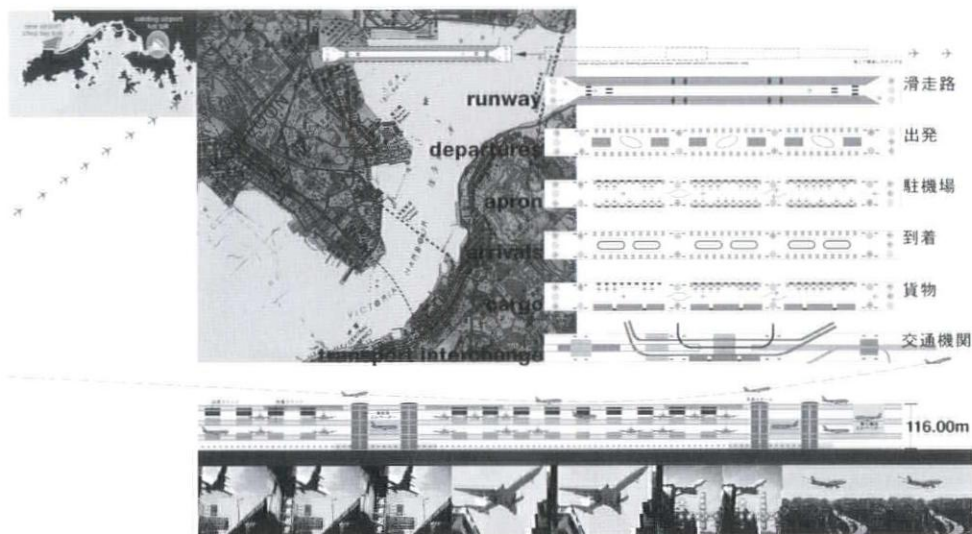
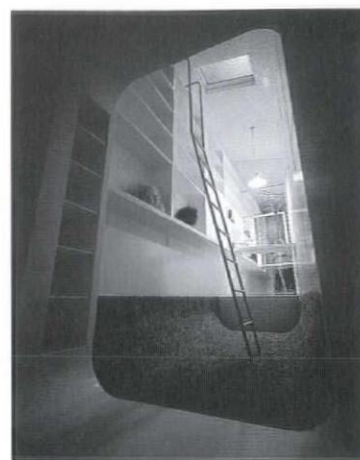
主要用途：2世帯3世代住宅、所在地：神奈川県横浜市、デザイン：1998年2月／備考：3次元的に斜面を這い上がる3世代のための住宅
project: house for 2 families, 3 generations/location: Yokohama, Kanagawa prefecture/design: Feb. 1998/feature: snaking in 3 dimensions, 3 generations



27

シン・デン・ラウンジ
Sin Den lounge

主要用途：オフィス、ミーティングスペース
所在地：東京都渋谷区神宮前
竣工：1999年6月
延床面積：7.4m²
備考：オレンジ・シャギーカーペット、サイケデリック・金色ウォールペーパー
project: lounge for hairsalon
location: Jingumae, Tokyo
completion: Jun. 1999
floor area: 7.4sqm
feature: orange shaggy carpet, psychedelic gold wallpaper



香港空港
Hong Kong Airport

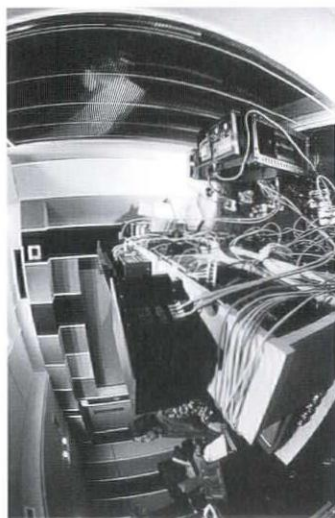
28

主要用途：空港／所在地：香港／デザイン：1997年7月／サイズ：H116m、W300m、L4000m／備考：航空滑走路、ジャンボエレベーター、香港の既存インフラの活用
project: Airport/location: Hong Kong/design: Jul. 1997/size: H116m, W300m, L4000m/feature: aircraft carrier runway, jumbo elevators, uses existing Hong Kong infrastructure

29

ストロ
strobo

主要用途：レコーディングスタジオ、所在地：東京都板橋区、竣工：2000年1月／延床面積：124m²／備考：一面のブルー、バジマストライプ、ケーブル
project: recording studio/location: Itabashi-ku, Tokyo/completion: Jan. 2000/floor area: 124sqm/feature: blue colours full range, pyjama stripes, cables



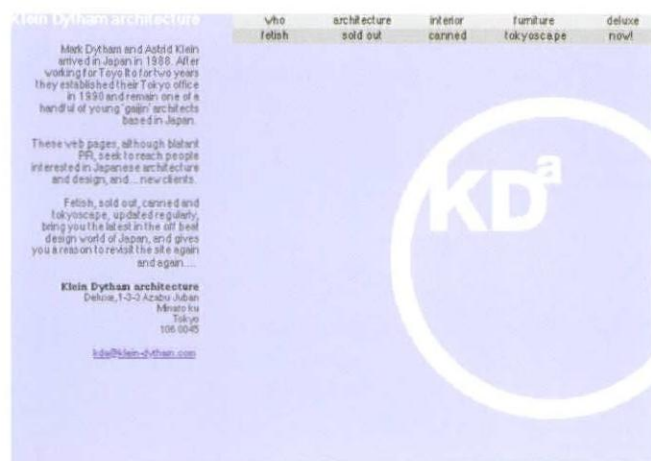
30

シルバーシート
silver seat

主要用途：老人ケアハウス用アームチェア
所在地：埼玉県入間市
竣工：1997年3月
サイズ：w690 d620 h820
材料：花柄ベルベット、木
project: arm chair for elderly home
locations: Iruma, Saitama prefecture
completion: Mar. 1997
size: w690 d620 h820
material: velvet roses, wood



私達が香港のプロジェクトに携わっていた1992年当時、図面を香港と東京でやり取りするためには2台のコンピュータをダイレクトに国際電話ラインで繋ぐという非常に高価な方法を取るしかなかった。93年にはインターネットが次第に広がりを見せ始め、94年には互いの国のプロバイダを通じてインターネット経由で図面をやり取りすることが可能になっていた。95年、私達はブラウザーとウェブページを知った。そのころウェブはまだヒヨコ状態だったが、その潜在的なパワーをそこに窺い知ることができた。その年の夏に始まった私達のウェブページには、architecture、interiors、competitionsといったKDaの作品に焦点をあてたセクションの他に自分達の目を通して見た日本に焦点をあてたセクションがある。サイトの形をこのようにしたのは建築のページは建築家しか興味を持たない、だからなにかもっと広い情報を提供できればもっと多くの人の興味を引きつけることができると考えたからだ。そしていつのまにか相手がほとんど無意識の内に自分達の作品を紹介できる、というふうになった。96年の3月、私達のサイトはyahoo! のクールサイト・オブ・ザ・デーに選ばれた。3日のうちに63000アクセスを記録したのだ。翌97年にはyahoo! サイト・オブ・ザ・ウィーク、その年末にはトップ50サイト・オブ・ジ・イヤーにも選ばれた。今でも毎日5000~9000アクセスを数えている。

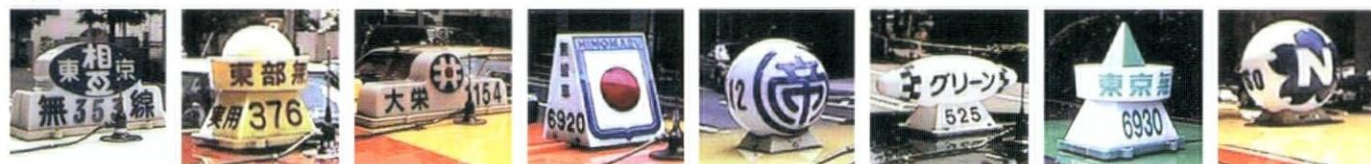


Top Page

Tokyo Scape

TOKYO SCAPEでは、東京の風景に溶け込んで見えてしまっているのだが、そこから切り取ることで東京という都市を相対化できるような東京のヴィジュアルな断片を拾い集めて紹介。

Taxi



Street Zoo



Hoarding



Vending



Canned

日本のドリンク業界では毎年1000以上の新商品が登場する。そのなかで次のシーズンまで生きのびることができるのはほんとうに一握りの商品だけだ。このページではそんな缶飲料のなかからヒット商品や幻の珍品を紹介。



2000



air



momiji



banana cola



beer water



cherry



cherry me



life saver



kohaku maku



first lady



get wet



gomen ne



pokemon



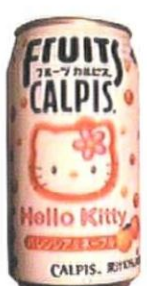
half & half



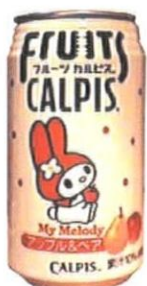
hanabi



hot wine



hello kitty



melody



nacchan



nice one



beer nouveau (1)



nude



ocha



pepsiman



pepsi R2D2



post water



seaside story



pepsi R2D2 (top)



shimi jimi



sour



suntory is (only)
thinking of the earth



winter's tale



supporter



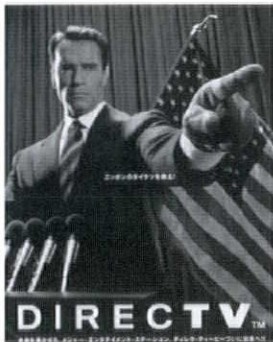
doraemon



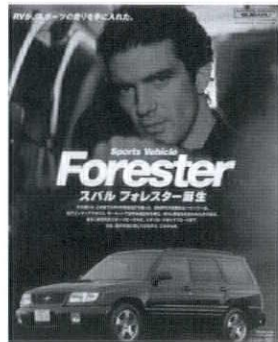
pepsi R2D2 (bottom)

Sold Out

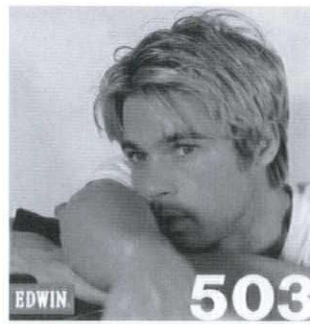
日本のCMに登場する世界的有名人をキャッチしてリーク。ギャラもプライドも高い彼等は母国ではあまりマスコミに登場しない。テレビをつける度にハリウッド・スターの笑顔が見られるのは非常に日本的。



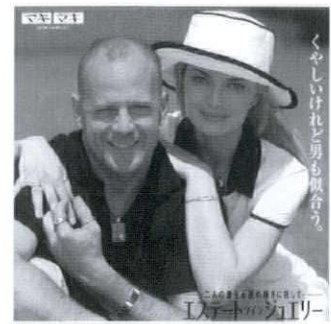
arnold schwarzenegger



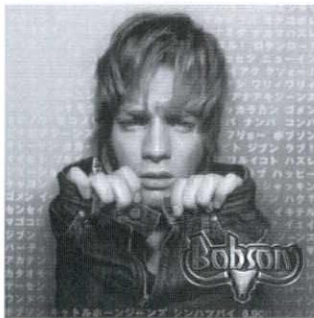
antonio banderas



brad pitt



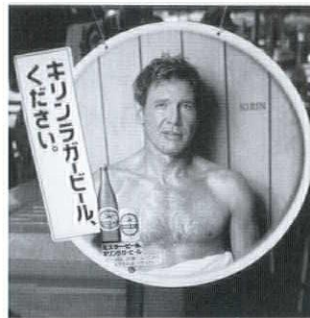
bruce willis



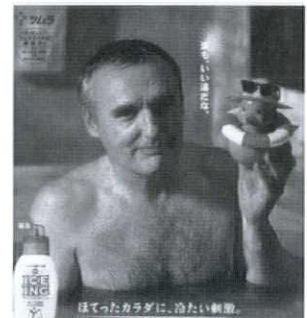
ewan mcgregor



jodie foster



harrison ford



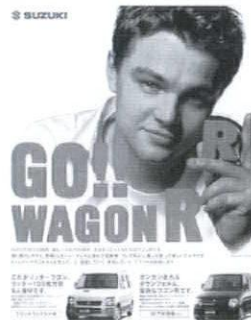
dennis hopper



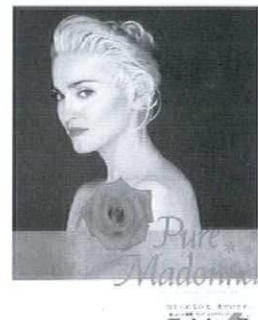
jamiroquai



leonardo di caprio



leonardo di caprio



madonna



mariah carey



mark dytham



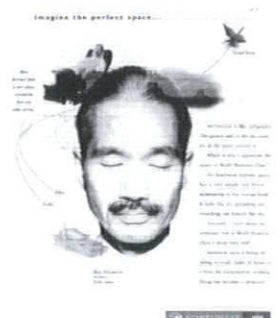
jean reno



ringo starr



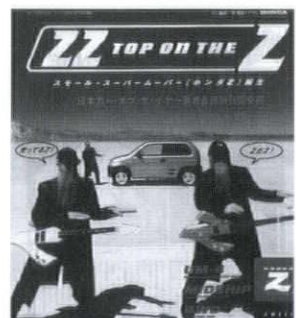
meg ryan



shin takamatsu



pocari sweat/stevia



zz top

Fetish

日本の消費文化はある意味とても素晴らしい。常に目新しく面白くてとんでもないものが生み出され続けている。だからインスピレーションの源には事欠かない。FETISHではそんなアンテナに引っ掛かったアイテムの一部を紹介。



dogwalker



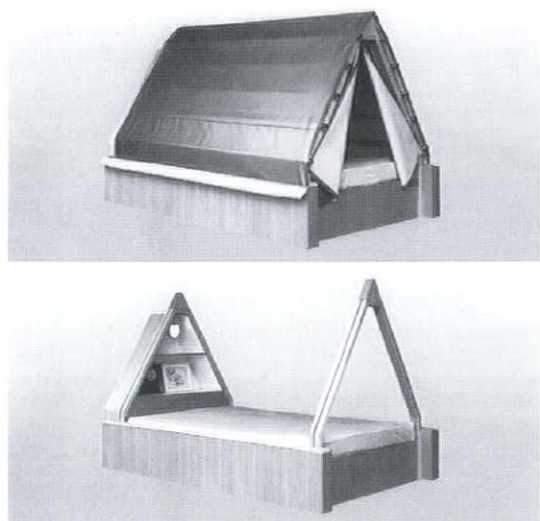
i-gum



i-ripoff



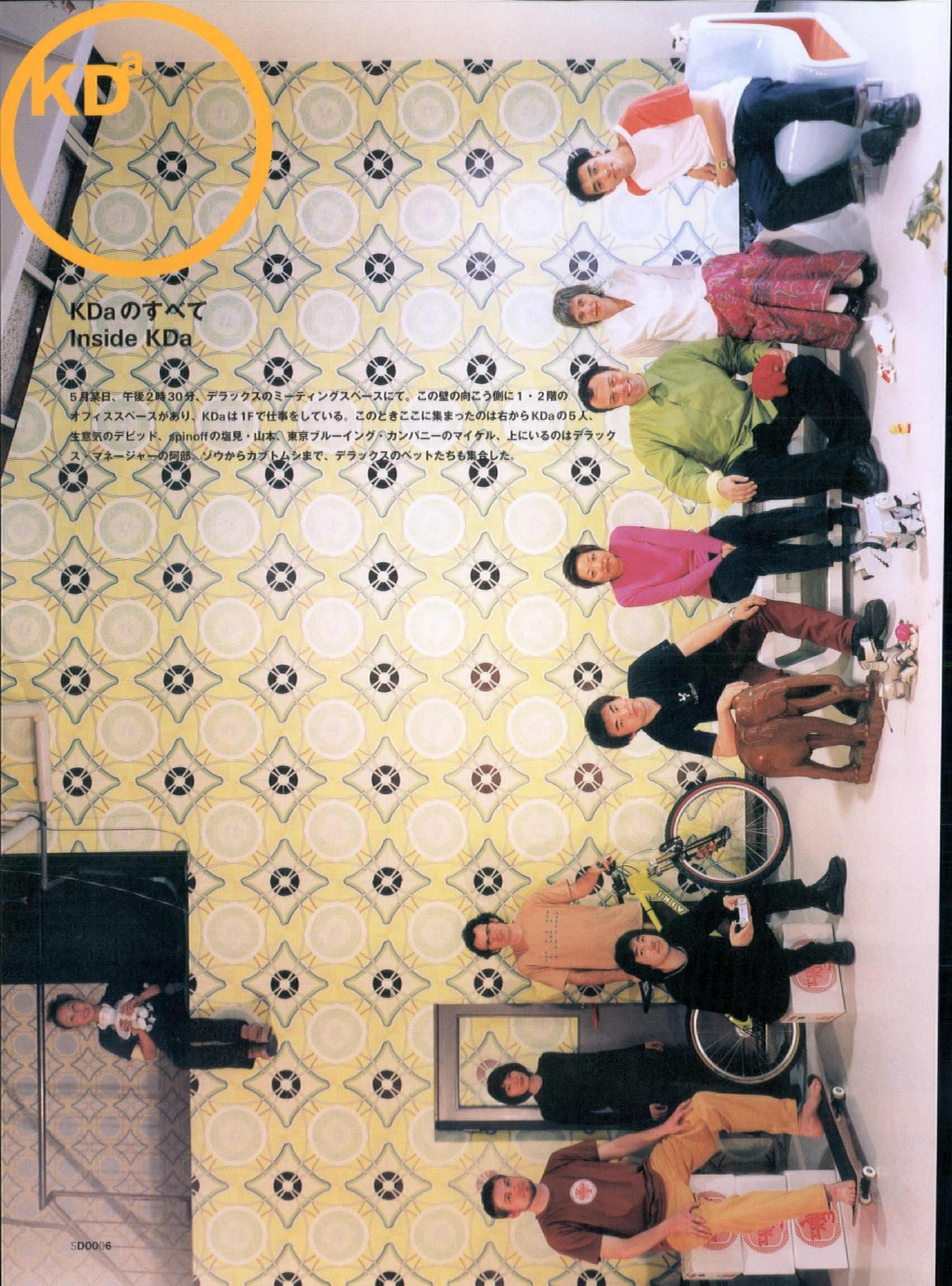
puri-kura camera



quakebed



skelton cup-noodle



KDa

KDaのすべて Inside KDa

5月某日、午後2時30分、デラックスのミーティングスペースにて。この壁の向こう側に1・2階のオフィススペースがあり、KDaは1Fで仕事をしている。このときここに集まったのは右からKDaの5人、生意気のデビッド、spinoffの塩見・山本、東京ブルーイング・カンパニーのマイケル、上にはいるのはデラックス・マネージャーの阿部。ゾウからカブトムシまで、デラックスのペットたちも集合した。

**KDa
staff**



Mark Dytham



Astrid Klein



Yukinari Hisayama



Yuko Iwamatsu

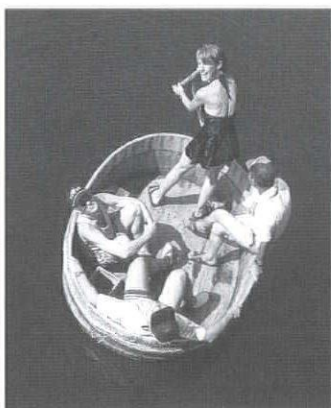
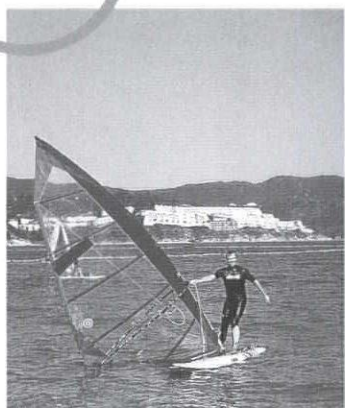


Hiroto Kubo

**KDa
party on**



**KDa
sports**



**KDa
celebs**



KDa toon

私達は、家具デザイナーあるいはプロダクトデザイナーとして自分達がプロフェッショナルであるとは考えていない。プロダクトのデザインには生産やマーケティングに対するシビアな知識や経験が必要だが、それは建築家としての我々とはまた少し違う専門領域であるように思う。しかし、スペシフィックな一回性のものや、自分達のためのものであれば、デザインしてみたいと思っている。建築はアイデアが生まれてから実際の建物になるまでに非常に長いプロセスを必要とする。だから時々、建築ではない小さな作品、例えば家具や仮囲い、またはバーチャルな洗濯機や年賀状でさえも、それらをデザインし、短期間でアイデアを形にすることの喜びはむしろ自分達にとって大切なことだ。

年賀状

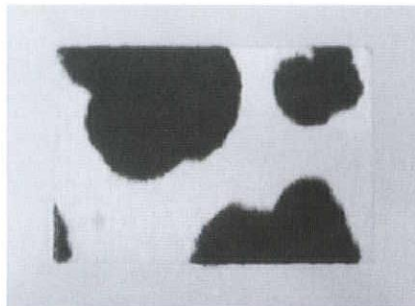
ウシ：牛柄フェイクファー張り

トラ：タイガーバーム付き

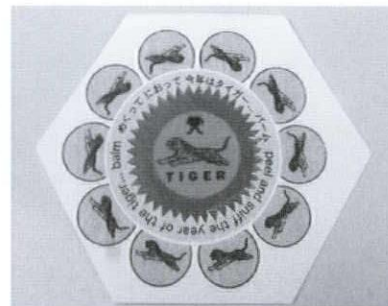
ウサギ：ウサギ型バルーン

Y2K：2000年問題対応済

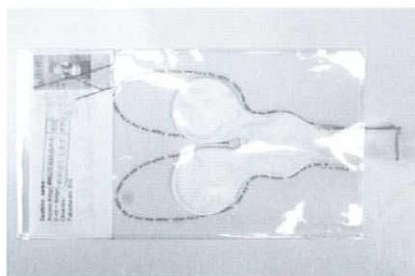
日常あまり会う機会のない人達にも1年に少なくとも1度は挨拶ができる「年賀状」は日本の素敵な習慣だと思う。だから私達はこの年に1度の挨拶を心のこもったものにしたいと思い、毎年ハンドメイドの年賀状を作っている。



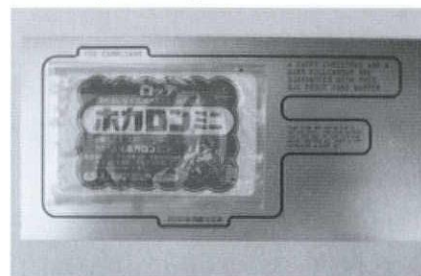
1997年版 year of the ox



1998年版 year of the tiger



1999年版 year of the rabbit



2000年版 Y2K bug

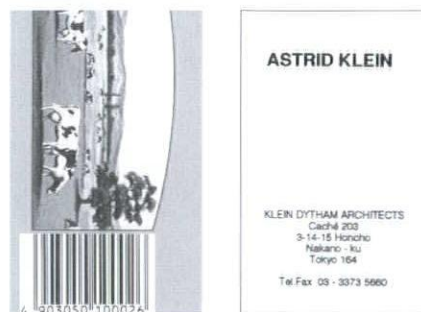
名刺

仕事を始めた当初の名刺と現在のもの。初めのは牛乳やバターなど食品の紙パックをカットして手作りしていた。現在の名刺は、とにかくまず名前を覚えてほしいという気持ちからビビッドな黄色の表には名前のみを、裏面にインフォメーション、という形を取っている。



名刺／表

名刺／裏

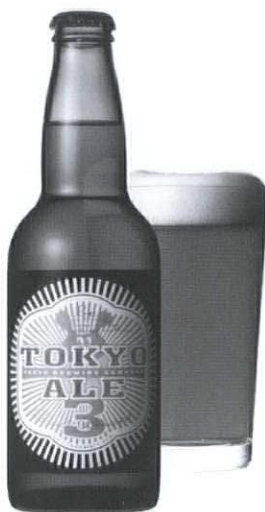


旧名刺／表

旧名刺／裏

Tokyo Ale

DELUXEのパーティーには欠かせないビール、TOKYO ALE。KDaにブルー・ハブの設計依頼が来たのがはじまり。そちらの方は今やっと実現に向け進行中なのだが、先行してまずは早く飲みたい、ピンで売ろう、ということに。現在は都内80箇所のバーで販売中。ラベルは生意気のデザイン。



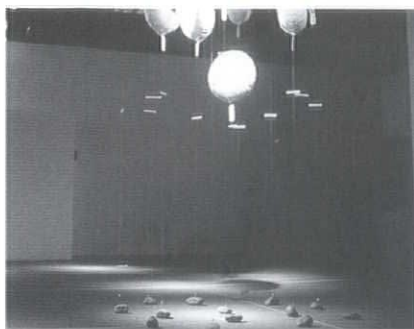
snofa

ヘブシマンのために家具を作るとしたら？という問いかけから生まれたソファ兼スノボ練習器。彼はスーパースポーツマンを自負しているけれど実はおちょこちょい、というキャラクター。転んでも優しいソファの上で練習させてあげたい。



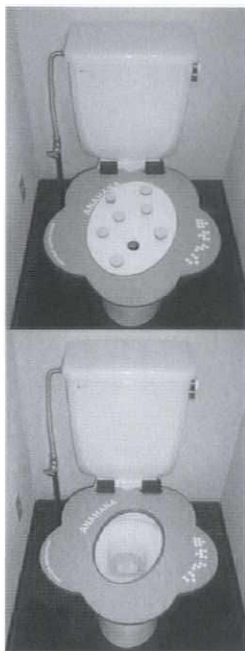
バルーン

30代建築家100人展で自分達の作品を紹介するために製作したバルーン。ヘリウムガスで浮かんたバルーンの糸を手繰り寄せるとバルーンにプリントされたプロジェクトを見ることができる。

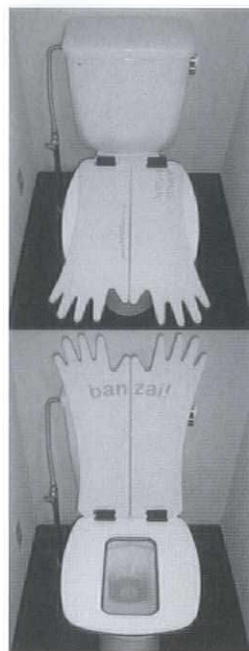


Benza

抗菌ラミネートデコラ貼りの便座。カラフルでたのしい形の便座はフラットだから掃除も簡単。ヒンジ部分は硬質ゴムのスタンドに便座を差し込むようになっている。表面には取扱説明にウィットを織りませた俳句が描かれている。



ANA HANA



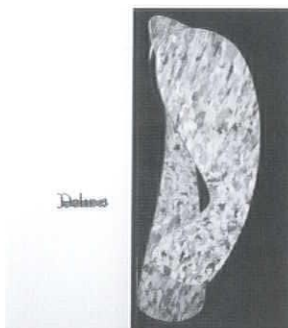
BANZAI BENZA



BENZA ACE

ドアハンドル

デラックスのメインエントランスに取り付けられたドアハンドル。ワークステーションで外壁に使用されているMOW板の残りを採り出してカットしてもらった。中と外で押板の形を変えてあるのがガラスドアを透かして見える。



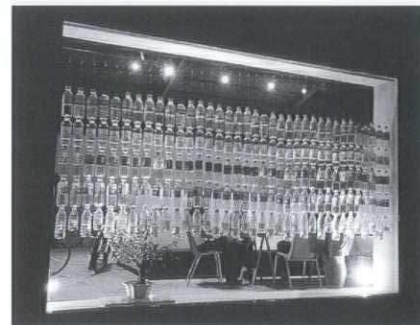
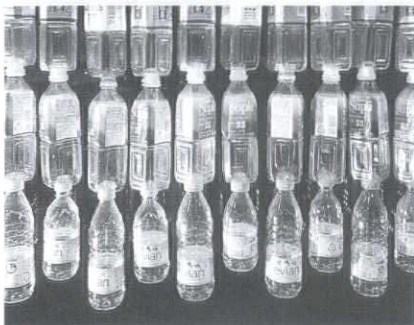
Deluxe washing machine

今まで家の奥に追いやられていた洗濯機に、ライト・マッサージチェアの2ファンクションを追加して居間にも置けるような「見える家電」を提案。エレファント・デザインとのコラボレーションによる空想家電。



P.E.T. nolenn

リサイクル・ハンドメイドによる「のれん」の提案。ペットボトルを釣り糸で繋ぎ一番下のボトルに水を入れて安定を取る。昼には窓からの光が床にボトルの影を描き、夜にはライトアップでキラキラと反射する。



1年半前のこと。麻布十番にある無人の自動車修理工場を見つけた。そこはとにかくボロボロで、しかし広くてどこか強烈に魅力的なスペースだった。さっそく入居の手続きを進め、シェアメンバーを募り、ペンキを塗ったり、パーティションを作ったり、みんなで少しずつ手を加えてデラックスを作ってきた。この改良は入居後1年以上経た今でも続いている。

現在デラックスはKDa、spinoff（インテリアデザイン）、生意気（グラフィック・デザイン）、東京ブルーイング・カンパニー（地ビールTOKYO ALE）、中目黒薬局（DJ & CG）、ドレミ（ミュージシャン）という全部で6つのチームでシェアしている。デラックスはこれら6チームの活動拠点であるとともに、イベントやワークショップの場としても活用されている。



=



+



+



+



+



+



昨年10月、ハブニングにあわせて生意気デザインのパターンを壁一面に自分達で貼った。完成後にはデザイナーズウィークで東京に集結していた内外のデザイン関係者を招き、ウォールペーパー・パーティーを開催した。



入居後1年経って打ち放しの床も大分汚れが目立ってきたので思いきって塗装した。ビニール袋の即席作業服を着て、大騒ぎしながらみんなで塗った。

DELUXE Events



Playboy

プレイ・メーツがデラックスにやってきた！メンバーの友人からの依頼で雑誌プレイ・ボーイのパーティーにスペースレンタル。しかしもちろん場所を貸すだけでなくちゃんとパーティーにも参加して楽しんだのだった。



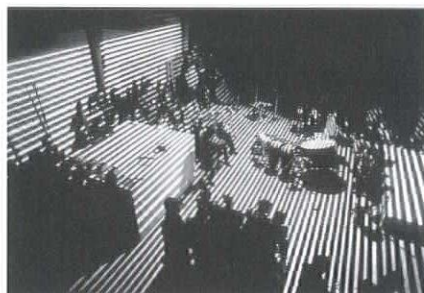
Poetry Night

詩人の夕べ、と銘打ったこのイベントは確かに詩の朗読で始まったのだが、しまいには酔って盛り上がりすぎた参加者が大声で合唱しだし、大騒動になってしまったのだった。



DJ Night by Nakameguro Yakkyoku

デラックスのメンバーである中目黒薬局はDJ quiet stormの名で音楽活動もしている。不定期に行われるこのイベントでは彼の友人たちもレコードコレクションを持参してDJナイトを繰り広げる。



RE[]/Responsive Enviroment performance "Cut"

RE[]/Responsive Environmentとパーカッションニスト、伊勢友一によるライブパフォーマンス。照明装置によりスペース全体にストライプ状の光が投影され、パーカッションのライブ演奏とシンクロしながら、リズムカルに変化する様々な光のシーンが作りだされる。



Ishihara Midori for Morphe 2000 『くものうえおふろ』

石原みどりによるパフォーマンス『くものうえおふろ』。空中に吊られた風呂桶の中には羽毛が充たされ、彼女は毎日ここで入浴。羽毛の降る中日常通りミーティングなども行った。Morphe2000の一環としてTV取材もやって来た。



TOMATO Workshop

英国のデザイン集団トマトがデラックスを拠点に東京で20日間に渡るワークショップを行った。世界各国から若者が集まり、アップルからはG4数台が貸出されるなど、期間中デラックスはキャンパスのように賑わった。



Silly Psyche Exhibition by Namaiki

「生意気」が作り出す、ちょっとカワイイおまぬけな、サイケデリックアート」ということで、デラックス・メンバー生意気が展覧会を開催。カスタムメイドのシャギーカーペットがデラックスを占拠した。

DELUXE Events

DELUXE soup kitchen	99/1/30
'Monsters of Rock' by Henrik	99/2/7
A-Activity talkshop	99/2/20
Hotwave	99/4/11
Sound Installation by Carl-Michael von Hauswolff	99/5/16
Playboy	99/9/9
Tanqueray Arts Award	99/9/10
Wallpaper Party	99/10/11
Hotwave	99/11/18
RES Edit Video Festival	99/11/27, 29
Poetry Night	99/5/9
DJ Night by Nakameguro Yakkyoku	99/6/17
Tron Collection 2000	99/7/13
Aids Day by Global Village	99/12/4
RE Responsive Environment Performance "Cut"	99/12/18, 19
Ishihara Midori for Morphe 2000	00/3/10-18
Tomato Workshop	00/3/20-4/10
Music Night by Tokyo Ale	00/4/22
Silly Psyche Exhibition by Namaiki	00/5/13-18

萩原 修

はくが、ダイサムさんにはじめて会ったのは1997年。彼は、リビングデザインセンター OZONEに友人のデザイナーのロス・ミクブライドの展示会の搬入の手伝いに来ていた。当時、ダイサムさんたちとロスさんは青山でオフィスをシェアしていたのだ。現在、ダイサムさんたちは、また、違った人たちと共同でオフィス(というかアジト)を構えているらしい。ダイサムさんたちとは、その後も展示会のオープニングでときたま顔をあわせる程度で特別に親しい間柄ではない。その仕事について直接話を聞いたこともなければ、できあがった作品をたくさん見ているわけではない。でも、気になる(めだつ)存在であることは間違いない。今回、編集部から原稿依頼がきたときにも、その旨を正直に話をした。編集部はそれでもかまわないという。彼らのデザインについて感じていることを素直に書いてほしいと言われた。

作品の質をささえる造形力

はくは、編集部から送られてきた彼らの作品の資料をあらためてながめた。その資料はモノクロのコピーだったので、色に関する情報が抜け落ちていた。以前、雑誌などで紹介されていた〈イデーワークステーション〉やNHK長野放送局のエントランスロビー家具のあざやかな色彩がわからない。もちろん、素材感や空間の質も伝わってこない。かわりに見えてきたのは、彼らの造形力の確かさだった。彼らの仕事は、とすると「派手でかっこいいだけ……」「受けねらいの外国人……」「うわついで表面的……」などと受け取られかねない。正直いうと、はくも心のどこかでは、そんな風に感じていたのかもしれない。しかし、あらためて資料を見直すなかで、彼らの確かな造形力を確認することができた。日本に来てから約10年。言葉の壁を乗り越えて、独創的な作品をつくり続ける造形力(実力と言いかえてもいいかもしれない)が彼らにはもともとあったのだ。よく考えれば、当たり前のことなのだけど、案外見落としがちなポイントなので、押さ

えておきたい。

だれにでも親しみやすいカタチ

彼らのカタチを形容する言葉はたくさんある。ユニーク、有機的、柔らか、軽快、動きがある、などなど。そして、彼らのカタチはどれも独創的で、そう、ちまたでは見たことないカタチなのだ。いったいこれらのカタチはどこから来ているのだろうか？ 自然から？ 宇宙から？ 未来から？

例えば、〈長岡リリックホール〉のホワイエ家具。ベンチにもパーテーションにもなるその家具は、大蛇のようにくねくねとはいまわっているように見えるし、〈UK98 パビリオン〉のバルーンは、どう見ても宇宙基地のようだし、仮囲いの〈ピカピカPRETZEL 仮囲い〉は、未来の住居を連想させる。はくのような素人でも、難しい理屈抜きに楽しめる作品ばかりである。若い人に人気があるのもうなずける。その独創的なカタチは、確かな造形力にささえられて、安っぽくならず成立している。造形力のない人が理屈やコンセプトをふりまわして、見たくもない醜いカタチをつくってしまうのは、よくあることだ。

斬新な発想とジャンルを超えた活動

もちろん、造形力だけが彼らの作品の質を支えているわけではないだろう。とにかく感心するのは、既成の概念にとらわれないその発想だ。竹林に浮かぶガラスの住宅。リビングの真ん中に置くドーナツ型のスケルトン洗濯機などは、カタチを整えることだけがデザインだと勘違いしているデザインおたくには、遠くおよばない発想である。また、彼らに好感がもてるのは、建築、インテリア、家具、プロダクト、グラフィックと幅広いデザインジャンルを手がけていこうとする態度だ。はくは、そろそろ産業主導の縦割りのデザインジャンルには無理がきていると考えている。生活や社会を良くすることを目的としたデザインにはジャンルは必要ない。映像を建築に取り入れた〈ビデオ銭湯〉や、グラフィックを積極的に利用した〈かんぱん shelter〉、また、

ホームページでの活動などは、頭の硬い建築家には、きっと理解できないだろう。

日本の生活を楽しむデザインへ

そして、彼らのデザインの魅力の根底には、彼ら自身が生活を楽しもうという姿勢がある。次々と生まれる楽しいデザインには、彼らの楽しさがにじみでている。なにせ、彼らは自分の仕事場やビールの缶までデザインしているのだ。彼らの楽しいエネルギーは、今後も着実に、新しい仕事の可能性を切り開いていくだろう。きっと、建築界では、注目の若手建築家なのだろう。こうして、本誌に特集が組まれるくらいである。同世代のはくとしては、喜ばしい限りだ。でも、不安がないわけではない。それは、彼らが本当に日本に定着するかということである。今はまだ、旅行者として日本を楽しんでいると見えなくもない。だからこそ、これだけ軽やかなデザインが可能だとも言える。遊牧民という言葉が頭に浮かぶ。とくに、心配なのは、日本の文化や生活習慣をデザインにとりいれることである。例えば、バートル・ボグレル・ヘガティの〈chu-coo chair〉や〈ブリティッシュ・カウンスル・インフォメーションセンター〉の漢字やカタカナのグラフィックなど、下手をすると、よく日本を知らない外国人が遊びで日本風のデザインをしてると思われそう。外国なら受けるかもしれないが、ここは日本である。これからの評価は、ますます外国人だからとは見られなくなっていくだろう。その時こそ、彼らの本当の真価が問われるのかもしれない。著名な外国人建築家たちが日本で活躍した例はたくさんあっても、彼らのように日本で本格的な活動をスタートさせた外国人はめずらしい。だからこそ、彼らが今後、日本の生活をどのようにデザインしていくのか興味深い。これからも、その前向きなパワーで日本の生活を楽しんでくれることを、おおいに期待したい。

(はぎわら・しゅう／デザイン・ディレクター)

西沢立衛

アストリッド・クラインとマーク・ダイサムに初めて出会ったのは、僕が大学院のときだったから、たしか1989年とかそこらだったと思う。そのころ彼らは伊東豊雄建築設計事務所に在籍しており、当時学生だった僕はよくそこでアルバイトをしていて、彼らに初めて会ったのだった。最初の印象は、このふたりははっきり言って不良だなと思った。ファッションといいアイデアといい歩き方といい、センスのかたまりというか、とにかくおしゃれな連中だった。要するに、ふたりともカッコよかったのである。

ある日、僕が使っていた机の目の前のパーティションに、図面コピーとかファックス書類とかの紙がいっぱい貼ってあって、それらと一緒に、小さいスタディ模型が画鋏で止められているのを見つけた。大きさはA4サイズくらいであろうか。敷地から建物から全部コピー紙のような柔らかな紙でつくられた、ラフなスタディ模型で、アストリッドとマークによるものであった。当時伊東事務所では、〈八代市立博物館〉やドイツの〈フランクフルト市立エッセンハイム幼稚園〉をはじめとして、ランドスケープを積極的に活用したデザインがいくつかあったのだが、書類の山に埋まるように目の前に張りつけにされていたその模型もそういうタイプの、建物とランドスケープの両方を表現したスタディ模型だった。それを見て僕が感心したのは、その紙の模型が、制作にほとんど30分も掛けてないのではないかと思えるような、かなりいい加減なものだったことである。しかしその割には、柔らかな紙の地面が画鋏のせいで適当にカーブしていて、それがかえってランドスケープの繊細で軽快な起伏をたいへん巧妙に表現しているようにも見たのだった。また、模型という立体物がファックスとか打ち合わせ記録とか汚いコピーとかとまったく同列に、ごちゃごちゃと重なり合う書類の山に埋もれながら壁に張りつけにされていたことにも、僕はいたく感心した。たいへん即物

的で事務的な汚い書類の山の中に、同じようないい加減さで張りつけられている、かわいいアクセサリーのような存在……書類のゴミの山にほとんどシームレスに連続してゆくような、たいへん投げやりな存在だったわけである。とくにそれまで模型なんかにまったく興味がなかった僕としては、A4ファックス用紙1枚くらいの重みしかないその模型の、なんとも言えない軽さにショックを受けたのだった。しかしその後も、そういったゴミのようなウィットのような建築物のようなものを、事務所の窓台とか、廊下の端とか、電話の横とかで、たびたび見かけることがあった。そういうわけで僕は、これはただの不良ではないのだなと思い直しはじめたのである。

実は今回、彼らの仕事のうち建築デザインにスポットを当てて書いてくれと頼まれたのだが、それはけっこう僕には難しかった。というのも、僕が彼らのデザインを好きな点というのは、彼らのデザインというものが、いわゆる建築物単体に限定されるものではないからである。もちろんアストリッドもマークも建築に対して真摯だし才能豊かなのは言うまでもないが、でも一方で彼らは、自分の身の周り……普段生活してゆく上で身近に転がっているスプーンやソファや空き缶や看板や建築や洋服や洗濯機や人間の、ほとんど全部に興味を持って、そのほとんど全部にデザインのチャンスを見ているからである。例えば建物をつくるときには、その中にどういう形の家具が置かれるべきかつねに考えているし、建物の前にどんな木が立っているとさらにいいかつねに想像しているし、かつ、建物がソファのように居心地がよくてウェブ広告のように軽やかであるとよいと、たぶん思っている。アストリッドとマークのデザインというのは、なにかたいへん軽くて、いわゆる建築物がどうしても持つてしまう重さや固さというものが何か消えて、建物が大きな家具のように見えたり、街角の映像広告のように見えたり、

もしくは風船が建物のように見えたりもする。僕はそういうのを見る度に、むかし伊東事務所で見たと、ぜんぜん模型然としていないスタディ模型がどこか見ようによってはアートにも見えるような、しかし隣の伝言メモと同じにも見えるような感じ……そういう感じを、どこか思い出すのである。つまり彼らのデザインというのは、建築物だけに限定して完結するようなものでなくて、むしろ逆に、建築デザイン以外の領域に連続してゆくような軽やかさがある。家具からインテリアから銭湯から街角の仮囲いから捨てられた空き缶に至るまで、自分が日常的に接している身の周りのあらゆるモノが全部デザインの対象になってゆくような、そういう広がりを持っていると思う。建築設計という狭い領域に閉ざされない、もっと広範なデザインの可能性を彼らが求めているのだらうと思う。その点で彼らはやはり一貫して、デザインの対象が建物であっても洗濯機であっても何であっても、クライン・ダイサム・アーキテクツのデザインにはジャンルのボーダーをひよいと乗り越えるような彼らしさが、一貫していつも溢れ出ている。僕はその一貫性に、自分とまったく異なる彼らの個性を感じもして、強く惹かれているわけである。

(にしざわ・りゅうえ／建築家)

マーク・ダイサム Mark Dytham

1964／イギリス、ノーサンブトンシャーに生まれる。

1985／ニューキャッスル大学卒業。建築において芸術学士号取得。
アメリカへの旅行奨学金取得。

1985／ミルトン・ケインズ開発会社（イギリス、ミルトン・ケインズ）

1986／SOM（アメリカ、シカゴ）

1988／ロイヤル・カレッジ・オブ・アート首席修了（イギリス、ロンドン）。

建築において芸術学修士号取得。

SOM（イギリス、ロンドン）

ミルトン・ケインズディベロップメントコーポレーション奨学

1989／伊東豊雄建築設計事務所（東京）

1990／（有）クライン・ダイサム・アーキテクツ設立

2000／M.B.E (Member of the British Empire) 名譽大英勳章第五位 叙勳

features > Mac 信者／MECS／ダイアリーに「GYM」と必ず書いてある

アストリッド・クライン Astrid Klein

1962／イタリア、バレーゼに生まれる。

1983／エコール・ド・ボザール卒業（フランス、ミュルーズ）

1985／フランコ・ヘニー・スタジオ（イタリア、バレーゼ）

1986／エコール・ド・アール・デコラティーフ卒業（フランス、ストラスブール）。

インテリアデザインにおいて芸術学士号取得。

1988／ロイヤル・カレッジ・オブ・アート修了（イギリス、ロンドン）。

建築において芸術学修士号取得。

リチャード・ロジャース旅行奨学金

YRM パートナシップ（イギリス、ロンドン）

1989／伊東豊雄建築設計事務所（東京）

1990／（有）クライン・ダイサム・アーキテクツ設立

1997／日本大学理工学部建築学科講師

features > ルーフ・ガーデナー／WACS／コーヒー中毒にならないよう気を付けている

久山幸成 Yukinari Hisayama

1973／兵庫県赤穂市生まれ

1995／第30回セントラルガラス国際建築設計競技「迎賓館」入賞

1996／横浜国立大学建築学科卒業

卒業設計吉原賞

JIA 神奈川卒業設計競技銀賞

1996／クライン・ダイサム・アーキテクツ勤務

features > 獲せの大喰い／めっちゃナイス・ボーイ／技群の記憶力

岩松裕子 Yuko Iwamatsu

1975／神奈川県横浜市生まれ

1997／東京芸術大学建築学科卒業

1998／spinoff 勤務

2000／クライン・ダイサム・アーキテクツ勤務

features > カリスマOL／食べこぼしクイーン／能率ボット

久保寛人 Hiroto Kubo

1975／千葉県船橋市生まれ

1999／日本大学理工学部卒業

1999／クライン・ダイサム・アーキテクツ勤務

features > 甘いモノ大王／マジマジ／マルチ・タスク

写真クレジット

高山幸三：表紙、pp.10-13、pp.28-30、p.54（24）、p.55（27）

木田勝久：pp.14-17、p.32（右端）p.34（左上）p.35（下）、p.44、p.51（上から2,4番目）、p.53（18）

ナカサカパートナーズ：p.37（左、中）p.51（上から1,3番目）、p.54（21）

藤塚光政：p.19-21、p.37（右）p.50、p.54（22）、

大橋富雄：p.48

生意気：p.55（28）、p.65（Silly Psyche）

伊藤伸司：p.65（RE）

堀内広治：p.53（17）

その他特記なきものはKDa

著者略歴

伊東豊雄 Toyo Ito

1941年京城生まれ。東京大学工学部建築学科卒業。1965年菊竹清訓建築設計事務所入所。

1971年URBOT設立。1979年伊東豊雄建築設計事務所名称変更。

萩原 修 Shu Hagiwara

1961年東京都生まれ。武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科卒業。大日本印刷（株）CDC事業部を経て、1993年よりリビングデザインセンター OZONEにて展覧会・出版などを手がける。

西沢立衛 Ryue Nishizawa

1966年東京都生まれ。横浜国立大学大学院修士課程修了。1990年妹島和世建築設計事務所入所。1997年西沢立衛建築設計事務所設立。

渡部千春 Chiharu Watabe

1969年新潟県生まれ。東京造形大学卒業。1993年渡英。1994年より国内外のデザインを中心に執筆活動を行う。

リーズナブルって
いいなあ



ビルオートメーションシステム「A&A」や工場計装システム「FACIAS（フェイス）」は、ハードウェアを汎用機器で構成するオープンシステム。だからリーズナブルでフレキシブル。しかも付加価値の高いシステムで設備の機能を引き出します。

「ビルや工場が生き生き。オープンシステムだから可能です」



ネット社会に
頼もしいわ

大量の情報を伝送できる光ファイバの先行配線システム「GIGA LINE（ギガライン）」や統合配線システム「KSCS」で、次世代情報化オフィスを提案します。

情報の洪水がきたって
大丈夫。光ファイバで
余裕の対応

地球環境を配慮したパンチングメタルのシステム天井や潜熱蓄熱式床暖房用OAFフロア。総合設備会社としての長年の経験がかたちになりました。これから、もっともっと一歩先行くオフィス環境を実現します。

「もっと快適に、もっと機能的に。欲張りなオフィス環境をサポートします」



リニューアルすれば
まだまだ使えますよ

「き」がつくヤツと評判です。



太陽光や風力も
最大限にいかします

長年培ってきた電気設備の技術力で太陽光や風力を最大限に活用。クリーンなエネルギーで、環境保護にしっかり貢献できる発電システムを強力にサポートします。

地球に
優しいんです

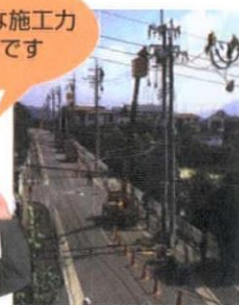
「電気や熱にも思いやり。エネルギーを有効活用します」

豊かな実績と技術力によって、コージェネレーションや地域熱供給の最適システムを構築。環境性・経済性に優れたトータルエンジニアリングで、エネルギーの高効率な利用を可能にします。



省エネなんだな、
これが

トータルな施工力が
自慢です



「地球にやさしくスムーズに。交差点でも非開削で掘り進めます」

きんでん独自の技術で、交差点でも非開削で掘り進める「急曲線へJカーブ推進工法」。交通支障もなく、工期の短縮でコストも削減できます。



技術力で
コストを削減します

「社会を支えるエネルギーや情報通信。ネットワーク構築からメンテナンスまでお任せ下さい」

エネルギーや情報通信ネットワーク。品質・安全・環境に配慮した高い技術と経験を生かして、ネットワーク構築からメンテナンスまでトータルにエンジニアリングを行います。

私たちは、情報・エネルギー・環境の幅広いフィールドで、高品位な技術を駆使するシステムインテグレータです。だからこそ、お客様のニーズに応えるだけでなく、さらにその一歩先のご提案をしていける。いつも「気がつく」、名前に「きがつくきんでん」ですから「もっとお役にたてるご提案を」と

きんでん

SDレビュー2000

第19回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

The 19th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawing

[募集対象]

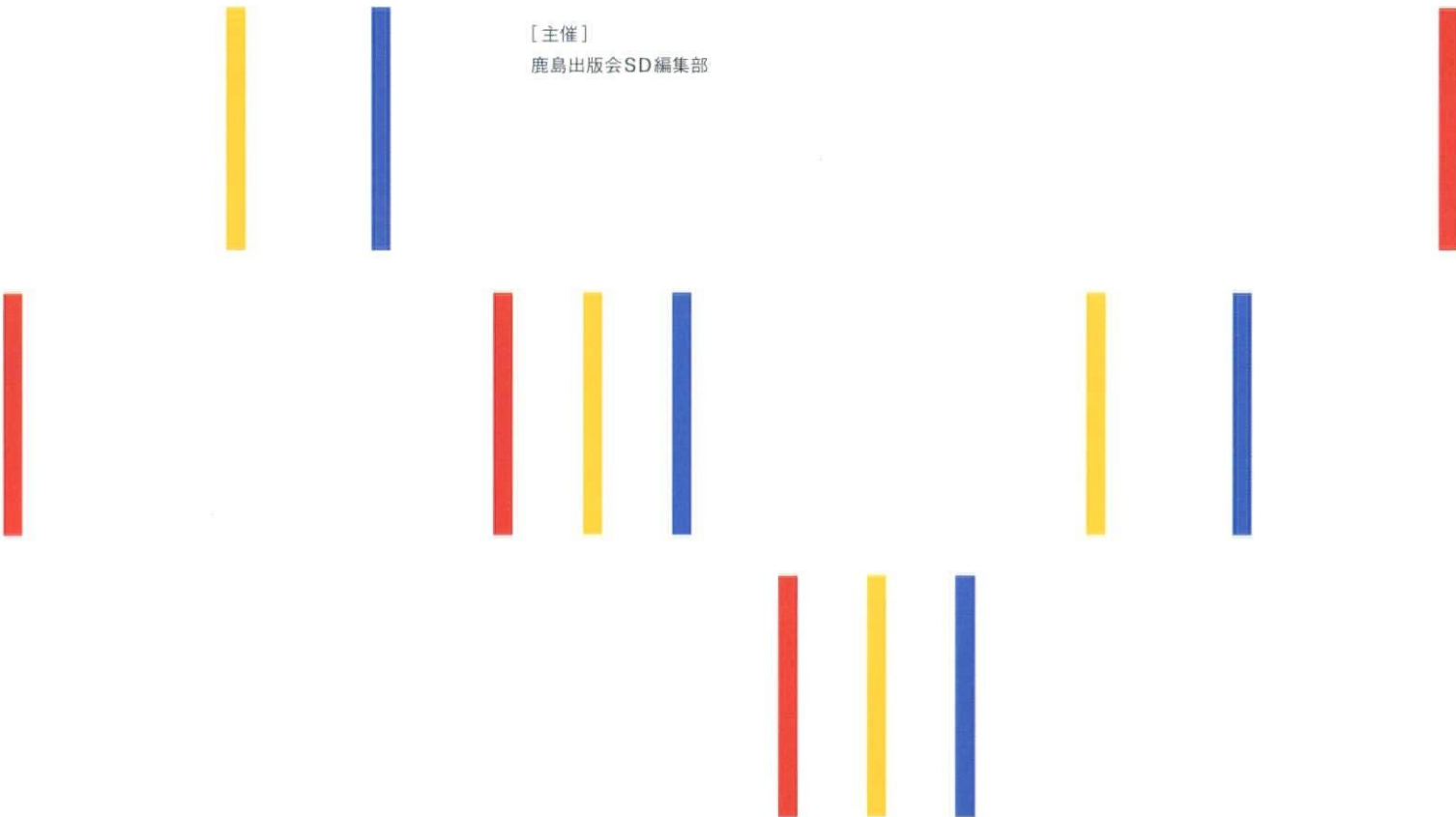
実施を前提とした設計中ないしは施工中の建築、屋外空間、インテリア。国外に建つものも含める。
但し、応募の時点で既に完成しているもの、雑誌などに発表済みのもの、実施の見込みが全く無いもの
コンへの応募作品（公開、指名、入選、落選を問わず）は対象外とする。
応募作品数は原則として1人1点に限る（グループの場合もメンバーが同じであれば1点のみ）。

[応募資格]

特になし。

[主催]

鹿島出版会SD編集部



SD Space Design Review 2000

[鹿島賞、朝倉賞、SD賞、新人賞]

入選展に展示された作品の中から、

鹿島賞、朝倉賞、SD賞、新人賞を選び記念品を贈呈します。

発表はSD 2000年12月号誌上にて行う予定です。

〔SDレビュー2000入選展〕

東京展

期間：2000年9月20日(水)～10月1日(日)(予定)

会場：東京都渋谷区猿楽町 18-8

代官山ヒルサイドテラス F 棟 ヒルサイドフォーラム

大阪展

期間：2000年10月5日(木)～10月15日(日)(予定)

会場：大阪府南河内郡河南町東山

大阪芸術大学芸術情報センター 展示ホール

〔入選者の出展〕

入選者は通知後、指定期間(約40日間)以内に、展覧会に出展するための図面、模型、その他のプレゼンテーションを製作し、後日指定の日時、場所に搬入すること。入選者には製作費用として、一律5万円が支給されます。

〔誌上発表〕

SD 2000年12月号(予定)

〔問い合わせ〕

SDレビュー2000に関する質問は、SD編集部へハガキまたはFAXにてお問い合わせ下さい。宛先は提出先宛を参照のこと。

募集要項

〔提出物〕

プレゼンテーション：

1. 設計意図を説明するために必要と思われる図面、写真等特に制約はなく、各自選択すること。表現方法は自由であるが、プレゼンテーションそれ自体の技術や密度は、審査にあたっての主要な評価対象とはされない。
2. プロジェクト名、建築用途、施主名(事業主体名)、工事予定期間、主体構造、主要仕上げ材料、建築面積、延床面積。
3. 400字以内の設計主旨文(省略してもよい)

以上をA3判用紙(420×297mm)4枚以内にまとめたもの。パネル化は不可(クリアファイル等に入っている場合は審査時に取り外します)。設計者氏名、設計組織名は一切記入しないこと。2、3は添付書類に含めず1と共にA3判用紙に記述することに注意。

添付書類：

プロジェクト名、応募者(＝設計者)名・フリガナ、応募者の年齢、職業、勤務先名とその住所(以上、組織の場合は、その担当者について明記)、応募者への連絡先(自宅か勤務先か明記のうえ、郵便番号、住所、電話、FAX番号)、共同設計者名、設計者略歴(入選の際、展覧会パンフレットに掲載いたします)。

以上の事項をA4判用紙に記載したもの。

〔応募受付〕

・開始 2000年6月22日(木)

・締切 2000年6月30日(金)

郵送または持参のこと(持参の場合は平日の午後2時から午後5時まで。郵送は当日消印有効)。受付後、受領通知を発送いたします。7月6日までに通知が届かない場合はSD編集部へご連絡下さい。

〔提出先〕

〒107-8345 東京都港区赤坂 6-5-13

鹿島出版会SD編集部 SDレビュー係

TEL：03-5561-2555 FAX：03-5561-2565

(地下鉄千代田線赤坂駅より徒歩5分鹿島建設赤坂別館4F)

〔結果通知〕

前記の審査員により15点前後が選抜された後、入選者のみに7月下旬までに書類にて通知します。

〔提出物の返却〕

提出物(図面、添付書類等)は、2000年8月21日(月)から9月22日(金)までの平日午前11時から正午まで、午後1時から午後5時までの間に、鹿島出版会SD編集部まで直接受取にいられた場合に限り、返却します。

但し、梱包材、クリアファイル等はお返しいたしません。

〔審査員〕

横文彦(建築家)

岡部憲明(建築家、神戸芸術工科大学教授)

芦原太郎(建築家)

小川晋一(建築家、近畿大学工学部助教授)

鹿島昭一(鹿島建設 取締役相談役)

廊下が道だとすれば、
腰壁は限りなく
ガードレールに近い。



ま、いいか。後で消せるしね。



おっと、
ぶつかっちゃった。



あらら、お大事に。



こすっちゃったけど、
緊急事態だから…。



壁はいいけど、カラダに良くないよ。

※標準色はここに使用した色を含め全8色あります。

傷が目立たない、汚れが落としやすい。医療、福祉施設のための新・木調腰壁材『シンセテック』
大勢の人が行き交う病院や福祉施設の廊下は公道と同じ。ストレッチャーや車椅子などの衝突や接触も多く、腰壁はさ
ながらガードレールのような存在です。『シンセテック』は、汚れが付着しても比較的落としやすく、傷がついても目立
ちににくいのが特長。ハードな使用環境に耐える優れた機能性と、木の温かなニュアンスを兼ね備えた木調腰壁材です。

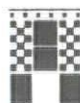
（木の温かさを知っています。） **新・木調腰壁材**
シンセテック

株式会社 **タジマ** 東・西日本床工事業協同組合

営業本部 〒101-8577東京都千代田区岩本町3-11-13 TEL.03(5821)7731 FAX.03(3862)5908

東京営業所 〒101-8577東京都千代田区岩本町3-11-13 TEL.03(5821)7741 FAX.03(3861)3615

大阪営業所 〒550-0003大阪市西区京町堀1-10-5 TEL.06(6441)5951 FAX.06(6444)2596



床の情報とトータルなソフトを提案する
タジマショールームへぜひお越し下さい。

TAJIMA SHOWROOM

A.M.9:30~P.M.5:30(土・日・振日休館)
アドレス <http://www.tajima-inc.com> TEL.03(5821)7731



豊かなアメニティ環境をめざして 新しい病院のインテリアデザイン

文・構成＝日建スペースデザイン／ヘルスケアデザインチーム



大和成和病院ロビー

1. 今、病院が変わりつつある

病院環境のアメニティを良くしようという気運が高まって久しい。冷たい、無味乾燥と揶揄された以前のような病院設計はすっかり影をひそめ、新しくオープンする病院ではさまざまなデザインが試みられ、むしろデザインの過剰傾向が批判の対象になるほどである。

ひと昔前、病院の建築設計にはインテリアデザイナーという職業はほとんど無縁であった。医療環境の設計は複雑な機能の、難解な組み合わせパズル解きにエネルギーが費やされ、患者のための快適空間、インテリアの調和といったことは二の次になることが多かった。ホスピタリティという視点からホテルと比較してみると、客である患者のアメニティは軽

視されてきたと言わざるをえない。ホテルであれば、デザインの良し悪し、顧客満足度が営業成績に大きく影響する。設計者も職能が試されるわけである。またオーナーも定期的に改修工事を行なう努力を払わないと客足が遠のいてしまう。ところが病院の場合はどうだ。施設的环境が多少悪くても患者さんは来てくれた。医療サイドの事情が環境のアメニティを妨げる結果となっても、仕方がないと患者側も許してきた。しかし最近事情が変わってきている。患者さんの細やかな要望に応えるために、あるいは、より多くの患者さんを集め安定した病院運営のために、さらに充実した医療サービスが求められるようになってきている。患者サイドが病院を選ぶ時代である。もちろん医療面の充実が最も重要であるのは

言うまでもないが、施設デザインの良し悪し、つまりアメニティ環境の充実度も患者サイドの病院選びの大きな要素である。病院の設計に建築設計者のパートナーとしてインテリアデザイナーが参画するケースが徐々に増えつつあり、ホテルのようなロビーの病院、ショッピングセンターのようなアトリウムを持った病院など、いわゆる「病院らしくない病院」も続々誕生しつつある。

これからは単に病院らしくないというだけに留まらず、更に一歩踏み込んだ配慮と工夫が求められている。病院はホテルよりもアメニティ豊かな場所であるべきであり、新しい病院設計もそろそろ次の段階にさしかかっている状況だ。



木の持つ暖かみが、患者の緊張感を和らげる

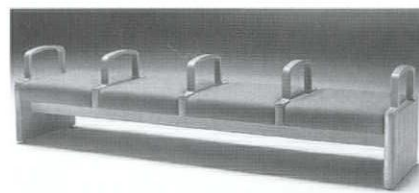
写真=SS大阪



写真=SS大阪



緊急時、イスの肘を取り外しベッドとして使用できる



背のないベンチにも立ち上がり易いように手すりが付いている

2. アメニティ豊かな空間

木のもつ暖かい表情と、カーペットでアメニティ環境を実現した病院

[りんくう総合医療センター泉佐野病院]

外来診療部門のロビーは病院の顔であり、その病院の医療に対する考え方が表れる場所である。患者が診察してもらうまで待つ間の緊張感をいかに和らげ、不安や痛みをできるだけ癒すことができる空間に仕上げるかは、病院のインテリアデザインの重要なテーマである。この病院では、内装と家具に明るい色の木を多く使い、ナチュラルで暖かみのあるアメニティ

豊かなインテリアデザインを実現している。床材はカーペットを用い、柔らかい雰囲気である。カーペット床は、ソフトで滑りにくく歩行に安全、騒音を吸収し室内が静か、浮遊塵埃が減るなどさまざまな効果があり、病院のアメニティ環境向上に大いに貢献している。病院のカーペットについてはメンテナンスについて議論のあるところだが、ここでは病室や診療部門等と廊下や待ち合い等のパブリックスペースに領域を分け、前者はよりメンテナンスを重視する長尺シート床材のゾーン、後者は患者のアメニティを重視するカーペット床のゾーンと、はっきり適材適所という考え方で使い分け

ている。また、ここの待ち合いベンチは木製でひとりづつ成型合板の肘掛けがついており、安楽性と立ち上がり易さに配慮している。ところで、この病院は関西国際空港の対岸に位置する総合医療センターで、空港に最も近い。万が一の事故や災害時には一時に大量の負傷者が送り込まれてくる可能性があり、その時待ち合いベンチに一時的に負傷者を寝かせられるように、肘は脱着可能な設計にしている。



明るくて広い待ち合いロビー

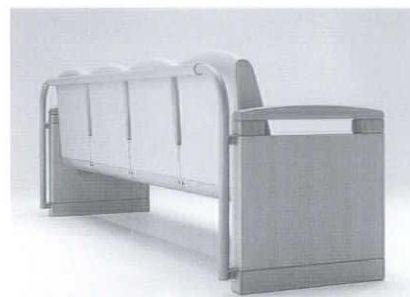
待ち合い椅子の肘掛けが跳ね上げ式になっている病院 [春日井市民病院]

以前、病院の待ち合いに用いられる椅子は、一般的なロビーチェア例えば銀行などのソファとほとんど違いがないものが多かった。特に安価な商品が使われることが多く「病院のベンチ」というのは、最も簡便で粗末な長椅子のことを指すくらいであった。だがここ数年、病院のアメニティについて世の中の関心が高くなり、安楽性や立ち上がり易さ、それにメンテナンス性能等を考慮した椅子が徐々に開発され、以前のような状況はだんだ

ん改善されてきている。この病院のロビー椅子は、外来診察部門の待ち合い椅子として、さまざまな工夫がこらされている。安楽性や立ち上がり易さを良くするため、肘掛けが取りつけてあるが、どうしても患者さんを椅子に寝かしておかねばならない状況が発生した時には、新幹線の椅子のように肘掛けを跳ね上げることができる仕掛けになっている。また、具合の悪い患者さんが横になれるようにという配慮だけではなく、大規模災害時を想定した対策も最近の設計コンセプトの特徴である。また、背中側に手すりがあるという配慮だけではなく、大規模災害時を想定した対策も最近の設計コンセプトの特徴である。また、背中側に手すりがしっかりと取りつけてあるのも親切である。もうひとつ、ユニークな配慮として、車



肘は跳ね上げ式になっている



背面には手すりが付いている



車椅子用に座面が跳ね上げ式になっている箇所もある

椅子の患者さんとその付き添いの方が並んで座って待ってられるように座面を跳ね上げできる場所を設けてあることである。車椅子の患者さんが待ち合いベンチの脇に居ると通路をふさいでしまうことが多い。そこで車椅子の患者さんが居てもらう場所を最前列に設け、座面を劇場の椅子のように跳ね上げ式にすることにより、付き添い者と並んで座れるように配慮している。シートの張地はメンテナンスの容易なビニールレザーとし、抗菌仕様である。機能が盛りだくさんなユニークな例として紹介させていただいた。

街並みをロビーのコンセプトにした病院
[秋田赤十字病院]

病院を訪れて玄関を入ると、すぐ目の前に待ち合い椅子がずらりと並び、人があふれている光景に出くわすことがある。そしてなんとも重たい気分になった経験は誰しもあるのではないのだろうか。患者として訪れたのならなおさらである。これは病院全体の計画面積が足りないことや、建築設計時、医療サイドの要望がロビースペースを圧迫して起きていることが多いためと思われる。

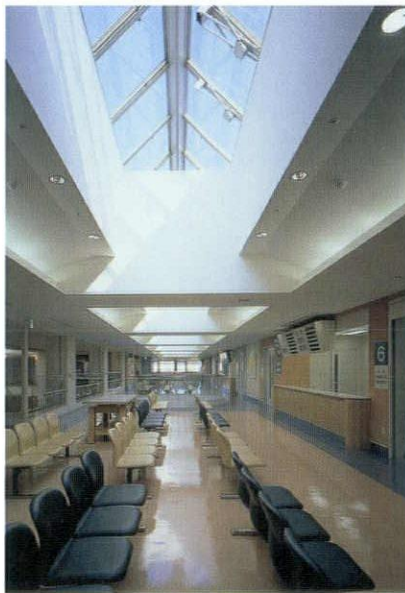
この病院のエントランスホールは広々としたアトリウムになっており「赤十字プラザ」と呼ばれている。レストラン、花屋、コンビニエンスストア、喫茶コーナー、図書コーナー等と並列するように外来受付が配置され、ちょうど街の中に病院があるように、プラザの向うに病院の受付がある。そしてあちこちに、ゆったりとした余裕を感じさせる休息用のハイバックチェアが置かれ、さらにボランティアによるアートワークもふんだんに配置されている。ときには、コンサートなどのイベントも開催されるスペースでもある。病院という特別な場所ではなく、日常生活空間の一部に病院があるというのがこのコンセプトである。入院患者、外来患者にとって、気持ちの上で普通の生活の延長でいられるというのも癒し効果のひとつであり、病院のアメニティを考える上でたいへん重要なことである。入院生活によって社会から隔絶されない、社会性を失わないという環境が患者にとって大事なのだ。

また、ここの床材は、天然リノリウム材を採用している。これは木のくずやコルクなどを亜麻仁油で固めた、自然素材だけで作られた製品で、製造の歴史が100年以上あるエコ素材である。これ自体、滅菌作用があり、テクスチャーもナチュラルで、清掃およびメンテナンスも容易であることから雪国の病院の床材として選定されている。

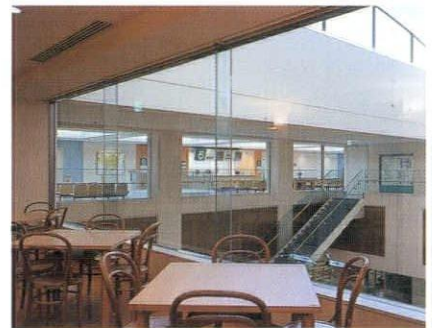


広々としたエントランスホール。赤十字プラザと呼ばれる

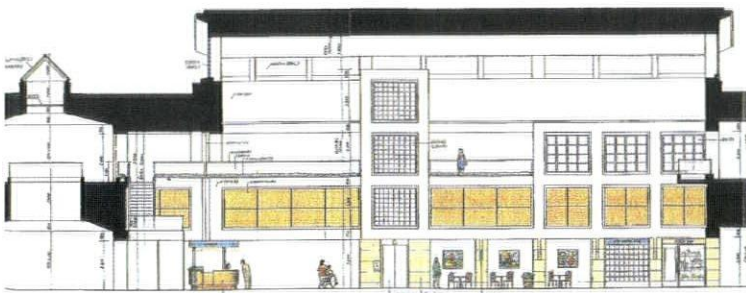
写真 (P.76) = 岡本公二



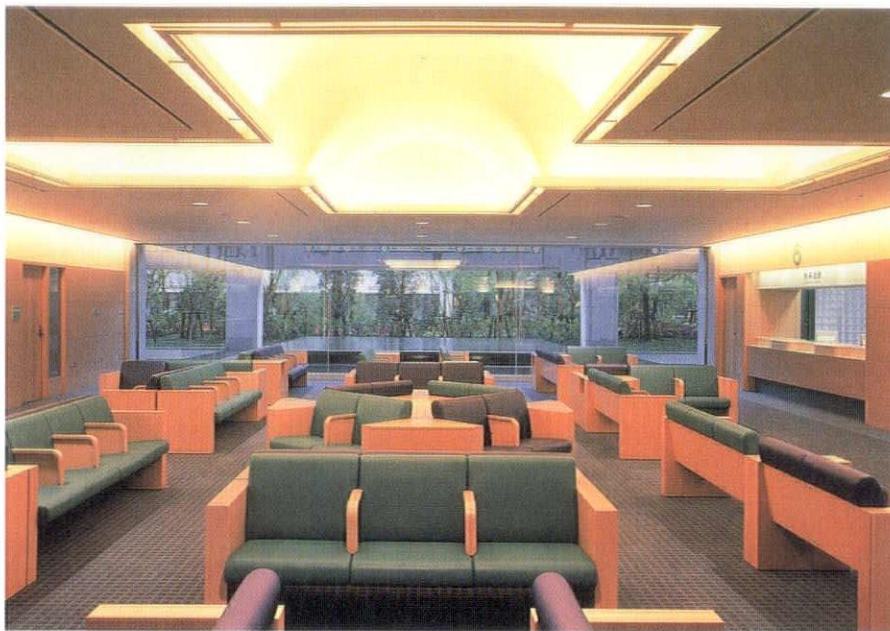
トップライトのある外来診療待ち合いロビー



プラザを見下ろすレストラン



赤十字プラザ 断面図



聖路加国際病院／待ち合いロビー



仁多町立病院／レストラン 写真(右3点)＝ルート・サン



仁多町立病院／待ち合いロビー



島根県立中央病院／アメニティ・プラザ

写真＝SS大阪



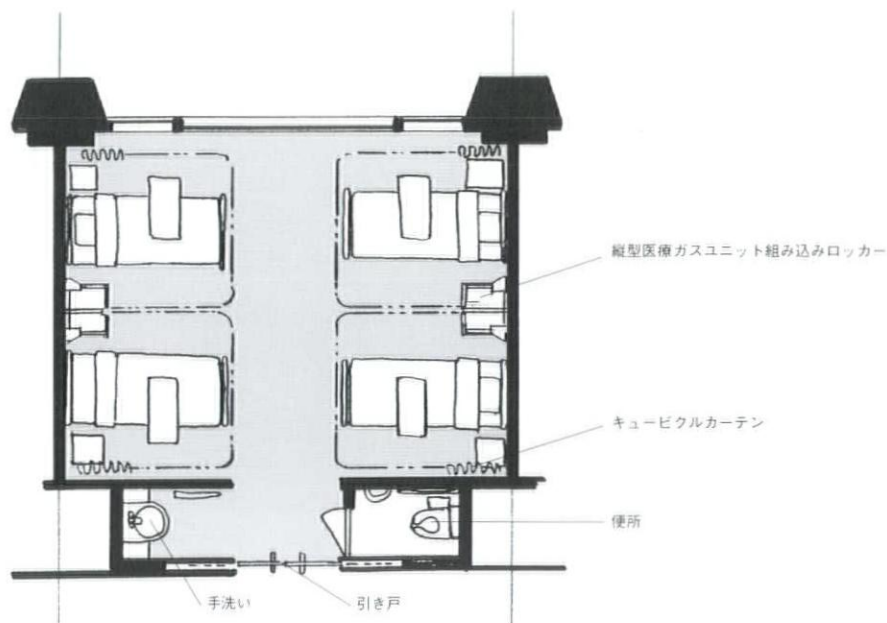
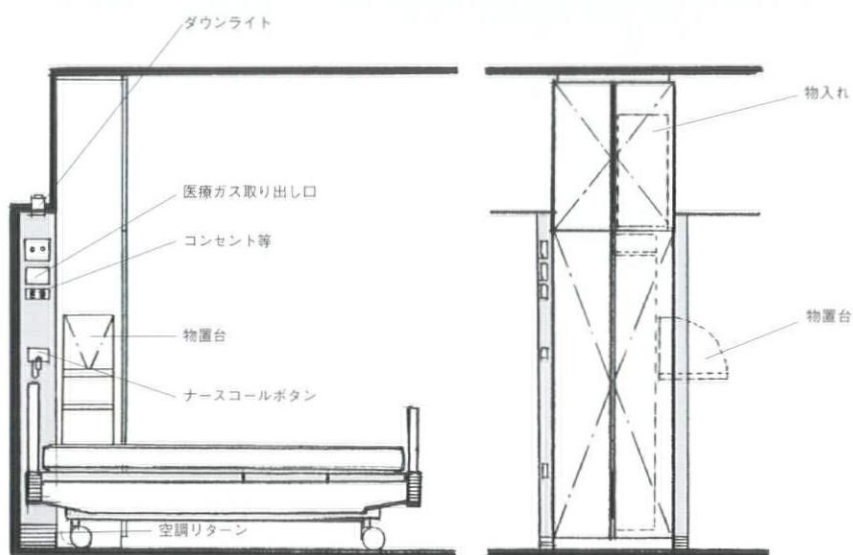
仁多町立病院／ナースステーション

3. 心地よい病室への工夫

縦型医療ガスユニット組み込みロッカー
でベッド周りの環境を改善した病室
[泉佐野病院]

多床室のベッドのまくら元は、お世辞にもきれいと言えないのが一般的である。床頭台、ロッカー、テレビがそれぞれ別個のデザインで鎮座し、壁のまん中には医療ガスのユニットが取り付けられ、電気コード、ナースコールのケーブルが垂れ下がっている。見舞いにももらった花の置き場所にも困り、絵を掛ける場所もないことが多い。流行のヒーリングアートにしても、アートの質云々以前の問題である。この病室では、ロッカーと医療ガスユニットを一体化してデザインすることにより、多床室の環境改善を実現している。

一般的な横型の医療ガスユニットは患者用のスイッチ類がベッドに寝た姿勢では使いづらく、また施工上も問題がある。間仕切り壁の内部に配管すると、壁に開口が生じ隣室との遮音性が損なわれてしまうからである。そこで縦型ガスユニットとベッドサイドロッカーを組み合わせ、かつ患者用のスイッチ類は床頭台に組み込むことで、これらの問題を解決している。ロッカー側面にはマガジンラック、ピンナップボード、起倒式の棚などをコンパクトにまとめ、患者のアメニティを充実させながら、医療関係設備と患者用設備を完全に分離することでベッド廻りの操作性をわかりやすくしている。



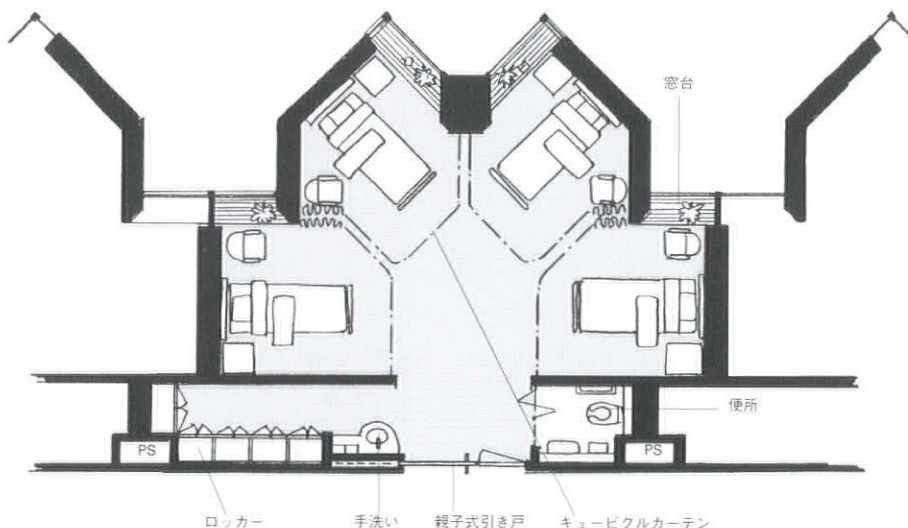
ベッド毎に窓がある4床病室
[秋田赤十字病院]

最近の病院の多床室は4人部屋が主体だが、窓側のふたつのベッドと廊下側では、環境の快適さに不公平が生じる。窓側は外の景色や太陽の光を享受できるのに対し、廊下側はプライバシーという点でも窓側の環境からは劣ることになる。特にベッド周りのキュービクルカーテンを閉めた場合、廊下側の圧迫感はおおさらだ。だが、多床室の良さも多く指摘されている。建築設計上効率がいいのはもちろん、看護も少ない人員で済むということ、それに、患者同士のコミュニケーションがあるということである。個室より多床室の方が好きという人がいるのも事実である。ここに紹介する病室は、建築設計の工夫で廊下側のベッドにも窓を設ける平面計画を実現している。これにより、各ベッドまわりの環境、プライバシーは格段によくなり、同時に看護サイドにとっても、部屋の入口から4台のベッドの状況把握がし易くなっている。プライバシーを確保しながら、患者同士のコミュニケーションも適度にとることができ、多床室の良さも充分残している。この病院では、個室を希望する入院患者が減り、この4人部屋を希望する人が増えたという報告もされている。



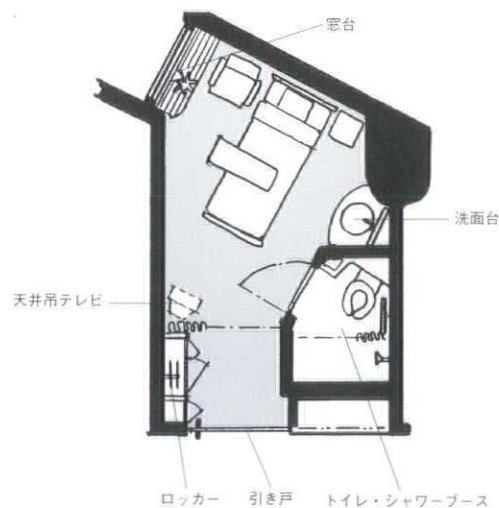
どのベッドからでも外の景色が見える

写真＝岡本公二



一般病室がすべて個室の病院
[聖路加国際病院]

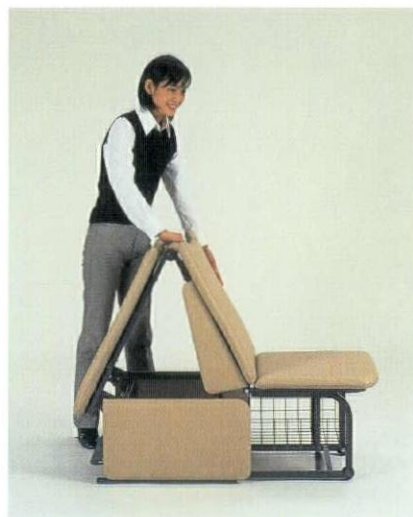
この病院は、すべての病室が個室ということで話題になった。厳密にはシングルケアユニットといい、トイレとシャワーが付属しており、患者のプライバシーを守りながら、廊下側から容態を把握し易いプランになっている。日本の病院の、アメニティ向上の流れは、この単位空間から始まったと言っても過言ではない。完成してから少し年が経つが、ここまで患者本位の設計思想を貫いた病院はまだ少ない。



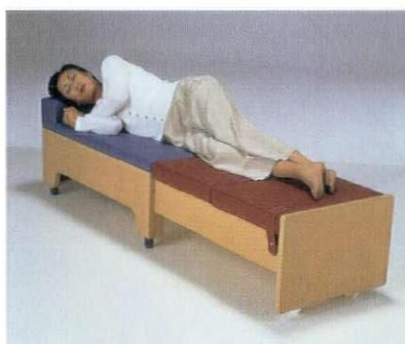
付き添いのベッドになる椅子の開発

ひとつの看護チームが看護する入院患者のベッド数を看護単位というが、欧米の20～30床に対し、日本では40～50床前後が多い。つまり日本では、ひとりの看護婦がより多くの患者をみなければならぬのが実態である。日本のどの病院でも完全看護を唱っているが、実際には入院患者の家族の付き添いが必要になるケースが発生する。病室の家具類の中で、付き添い用の仮眠出来る椅子の要望というのが、実はかなり多い。

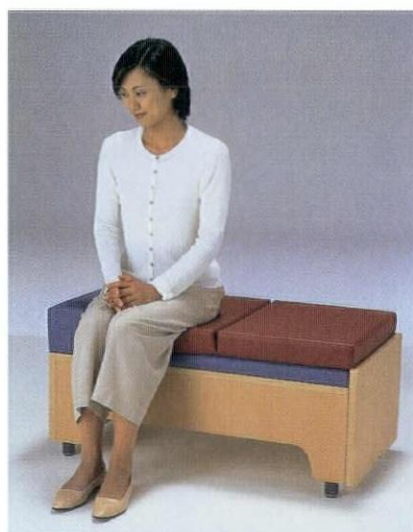
限られた療養スペースの中で、より多くの収納、複数の見舞い客用の椅子、付き添い者の仮眠スペース等を満足させる方法として、ユニークな病室用の家具を開発した。通常はできるだけコンパクトなサイズで椅子として機能し、必要に応じて見舞客用の多人数用ベンチや付き添い者用のベッドに変形する仕掛けになっている。また内部は収納スペースとして活用し、より安全で操作しやすいように、試作を繰り返して完成をみた。なかなか多床室では置くスペースが確保できないことが多いかもしれないが、医療現場の看護スタッフの意見をさらに聞きながら、病室を有効に利用するアイデアとして、今後も引き続き改良していけば、面白い商品に発展する可能性を秘めていると考えている。



安楽椅子を伸ばすと簡易ベッドに早変わりする

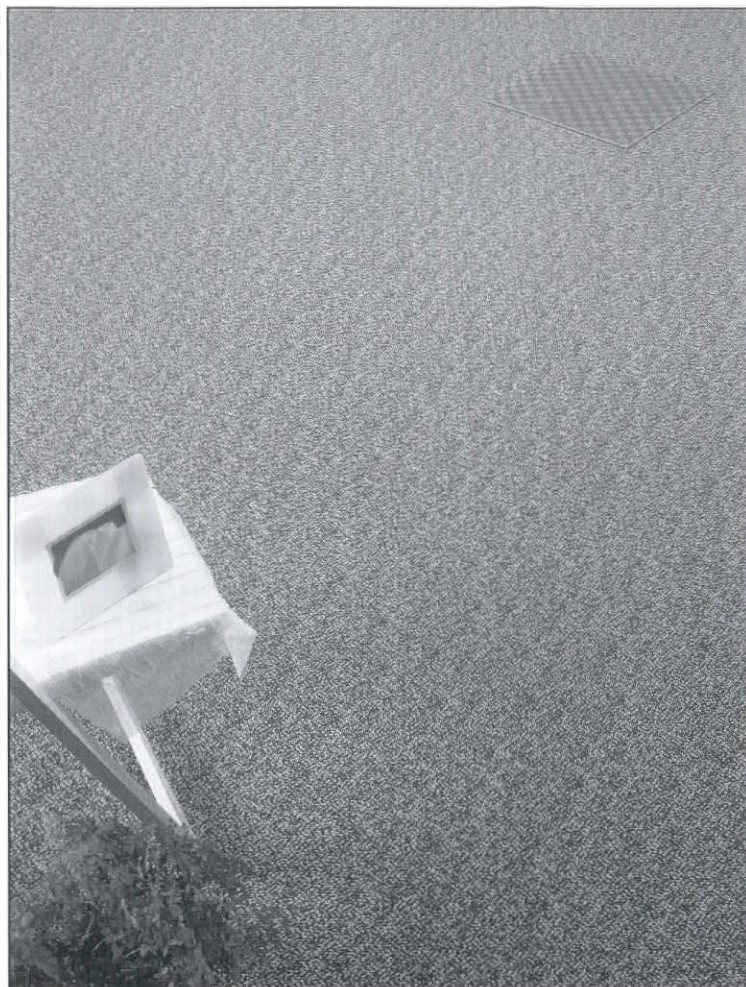


ベンチを伸ばしてベッドにする。内部は収納として利用している



資料提供＝日建スペースデザイン

日建スペースデザイン／ヘルスケアデザインチーム
東京設計室 吉川 昭・大西美紀・砂川洋一郎
大阪設計室 二瓶 学・松嶋一幸・高橋文吾
名古屋設計室 弓立順子・溝口周子



制菌加工タイルカーペット ロアノークバレー

(セルフロック®加工標準仕様)

組 成: BCFナイロン100% (アントロン40%+ルーミナ60%)

寸 法: 50cm×50cm

パイル形状: バターンループ

パイル長: 5.0mm~3.0mm

全 厚: 8.0mm ±0.5mm

バックング: ガラス繊維・PVC積層バックング

防 炎: 防炎性能試験番号 EO 990370

制 電 性: JIS-L-1904 ストロール法 合成ゴム底

23℃×25%RH 1kv以下

防 汚 性: フッ素樹脂加工+原着系使用

価 格: 9,600円/㎡(税別)



制菌加工カーペット(特定用途)

●繊維上の菌の増殖を抑制し、制菌効果を発揮します。

(試験対象菌種: 黄色ぶどう球菌、肺炎桿菌、MRSA)

1. 繊維を被覆するような汚れや糊剤が付着すると、正常な制菌効果が得られないことがあります。
2. 漂白剤の使用により、制菌効果が低下することがあります。
3. 洗濯後のすすぎは充分に行ってください。

三菱バーリントン株式会社

本 社: 〒103-0007 東京都中央区日本橋浜町2-62-6 (品川不動産ビル9F) TEL:03(3662)5631(代) FAX:03(3662)5639
大 阪 支 店: 〒530-6040 大阪市北区天満橋1-8-30 (OAPタワー32F) TEL:06(6881)6541(代) FAX:06(6881)6536
名古屋支店: 〒450-0002 名古屋市中村区名駅3-28-12 (大名古屋ビル9F) TEL:052(561)6724(代) FAX:052(561)6739
福岡支店: 〒810-0001 福岡市中央区天神2-12-1 (天神ビル4F 三菱レイコン内) TEL:092(731)5567(代) FAX:092(771)0138
広島支店: 〒730-0031 広島市中区紙屋町1-2-26 (さくら広島ビル4F) TEL:082(244)3581(代) FAX:082(242)0153

Kawashima

36インチサイズのクッションバックカーペット

Comfortplus series

コンフォートプラス シリーズ



クッションとカーペットを一体化。
コンフォートプラスが優れた歩行感を実現します。

- 最良の歩行感を提供するコンフォートプラス・バックングシステム
- 施工時間・コストを大幅に削減。91.44cm×91.44cmのモジュラータイプ。
- デザインも思いのまま。ミルトロン・ジェットプリンティングシステム。

movementsplus

ムーブメントプラス

14柄69色

16,400円/枚(約19,600円/㎡)

colorweaveplus

カラーウィーブプラス

15柄71色

11,400円/枚(約13,600円/㎡)

midnightplus

ミッドナイトプラス

15柄60色

13,200円/枚(約15,800円/㎡)

川島織物

katm

インターネット・ホームページ <http://www.kawashima.co.jp>

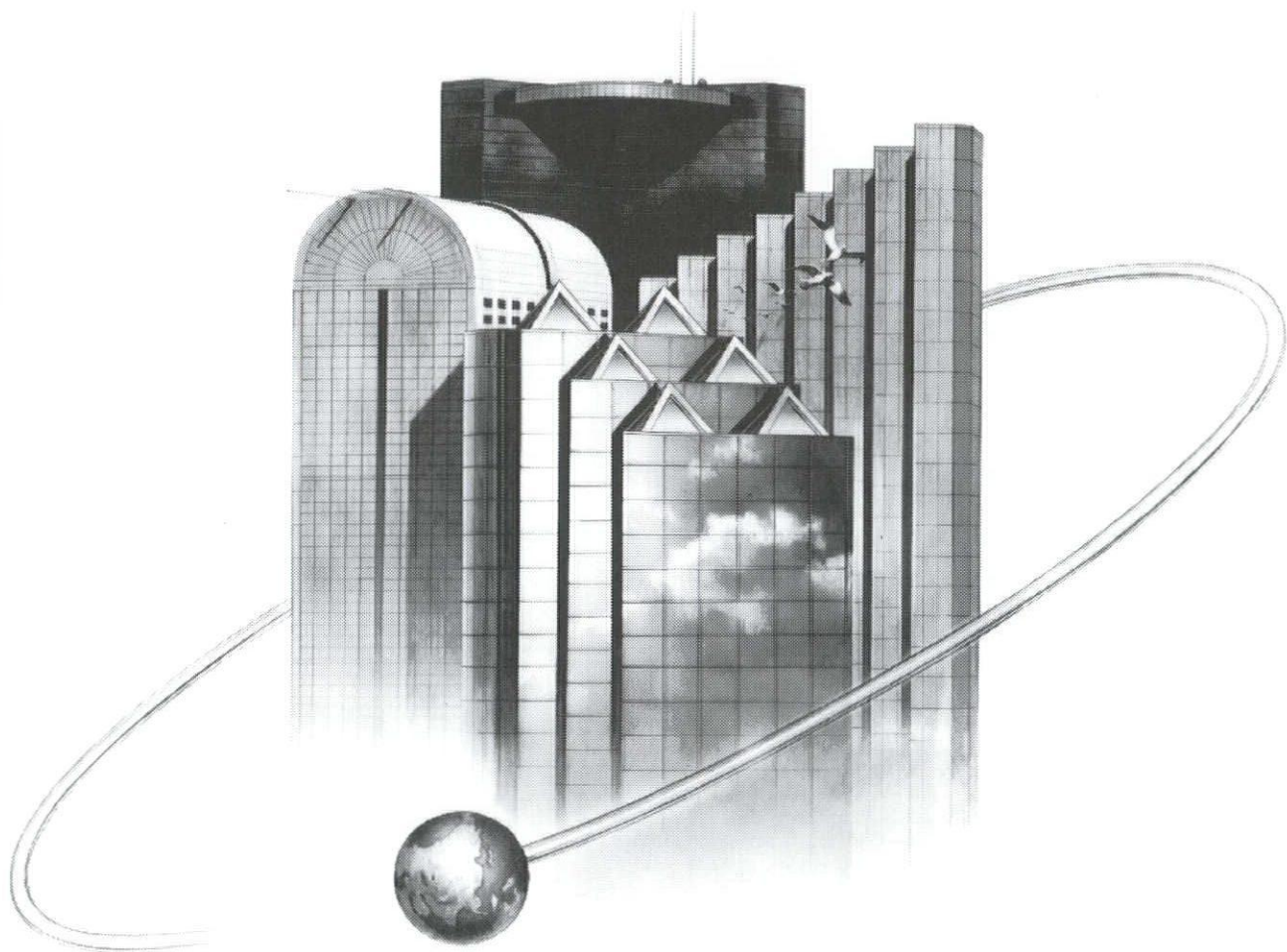
SHOWROOM

●札幌 TEL.011-281-0867
●大宮 TEL.048-652-5177
●千葉 TEL.043-245-2022
●東京 TEL.03-3355-0575

●名古屋 TEL.052-932-8681
●京都 TEL.075-621-0292
●大阪 TEL.06-6369-6180
●神戸 TEL.078-857-8108

●広島 TEL.082-224-3051
●福岡 TEL.092-472-8208

快適創造



人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。

それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。

都市、コミュニティ、産業施設…人を取りまくさまざまな環境について考え、

その理想を追いつづけている三機工業は、

いま、地球環境という視点にたって、素晴らしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。



三機工業株式会社

〒100-8484 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL.03(3502)6111

メディアージュ

Mediage

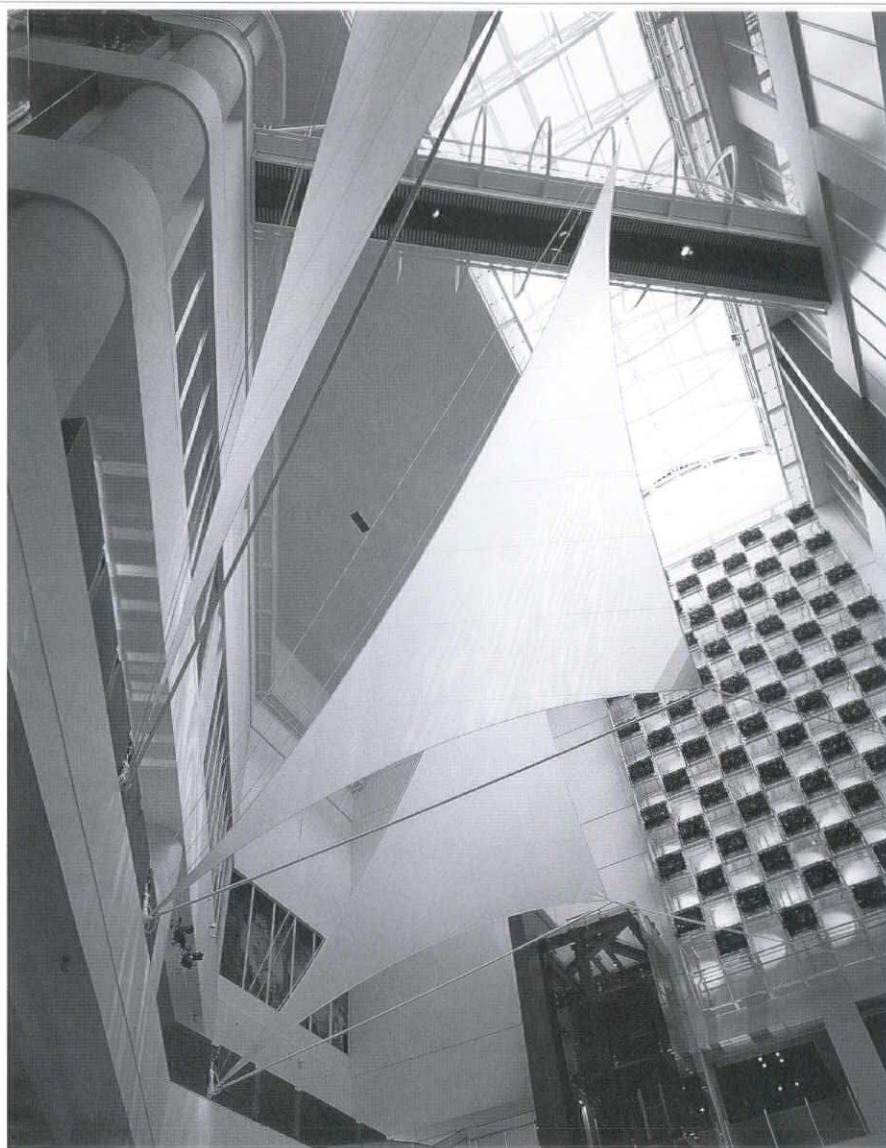
「メディアージュ」は、「アクアシティお台場」の約3分の1におよぶ、約27,000m²を使った6つのフロアに、マルチコンプレックスシネマ、アトラクション、カフェ、レストラン、ショップなどが配置された、都市型エンタテインメント施設である。

施設の中心に位置するアトリウム「バゴ」は、五感で感じる自然をデザインコンセプトとした。そして、太古の時代から現在までを重ね合わせる、時間と空間を超えた場所をイメージした。6層吹き抜け、トップライトまでの高さが約39mあるこの空間に、木、石、土、緑、水といった自然の材料を選び、ソリッドな表現で、落ち着きと暖かみのある、新しいアトリウム空間をかたちづくるように努めた。本物の植栽が連なるグリーンウォール、床に埋められ息づくように発光する琥珀色のベネチアンガラスブロック、太古からの地層を思わせる化石の壁、やさしい風と光を感じさせるセイル・ストラクチャー、緩やかなアールを描き太古の巨木をイメージさせる2本の木の柱などは、この空間をかたちづくる大切な要素である。

照明もアトリウム全体を演出する重要な要素と位置づけ、昼の明るさと夜の暗さを活かし、時間の流れをドラマチックに感じさせるものとした。トップライトから降りそそぐ自然光は、朝、昼、夕暮れへと少しずつ空間を変化させ、それを受け継ぐように、夕暮れから夜にかけて、床や壁からの光を主とした人工光へと移行し、昼のすがすがしさと対照的に、夜の深みのある落ち着いた雰囲気を作りだしている。

そして、このアトリウム「バゴ」にはスーパーオーディオCDシステムによるオリジナル環境音が流れ、安らぎに満ちた空間が演出されている。

(森本 真／デザイナー、日建スペースデザイン)



アトリウム「バゴ」見上げ



アトリウム「パゴ」



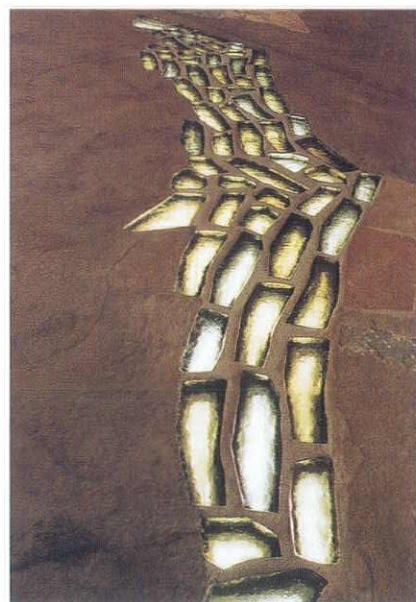
アトリウム「バゴ」。左に化石の壁を見る



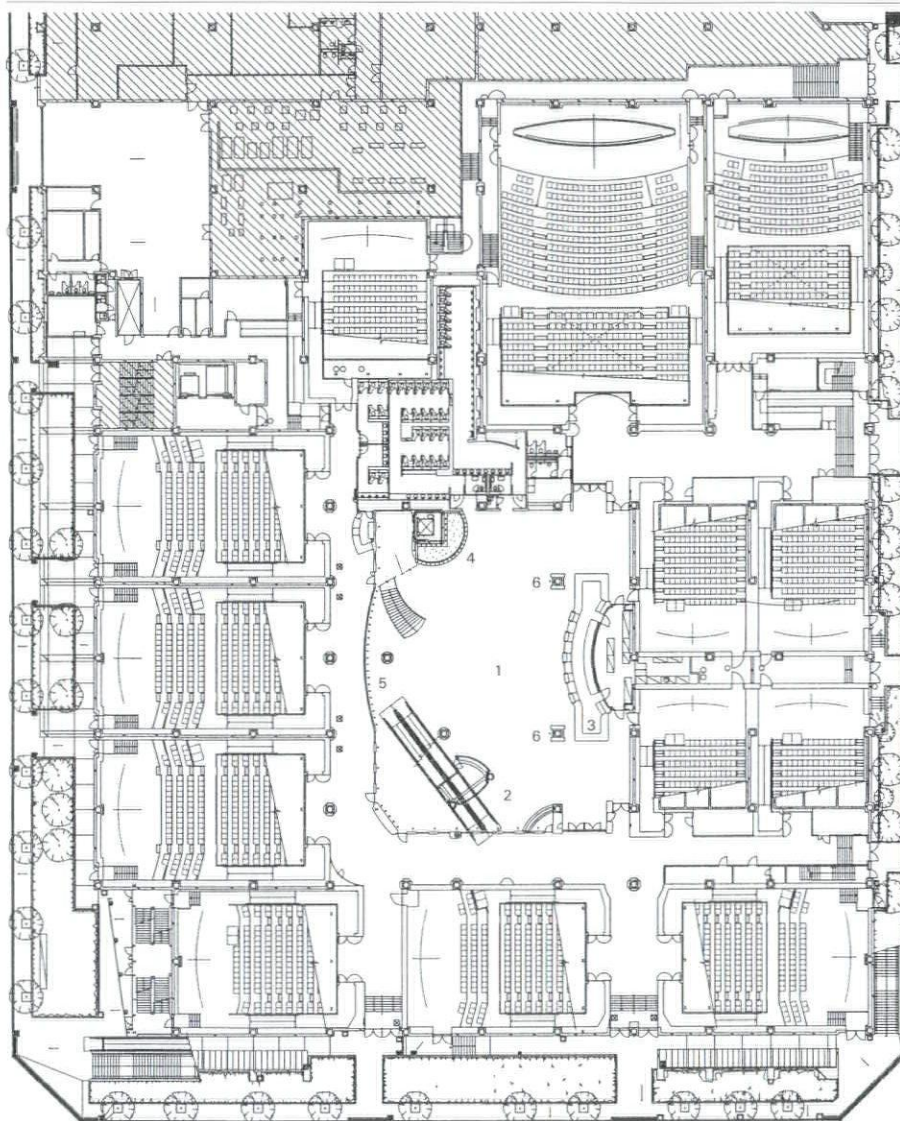
化石の壁は約100m²あり、一部に本物の化石や貝殻を埋め込んだ



アトリウム「バゴ」。ガラスブロックの床と、奥にバー・カウンターを見る



床のガラスブロックは、厚み約40mm。約900個全てベネチアで特注製造したものである。床下のグラスファイバー照明により色が変わる

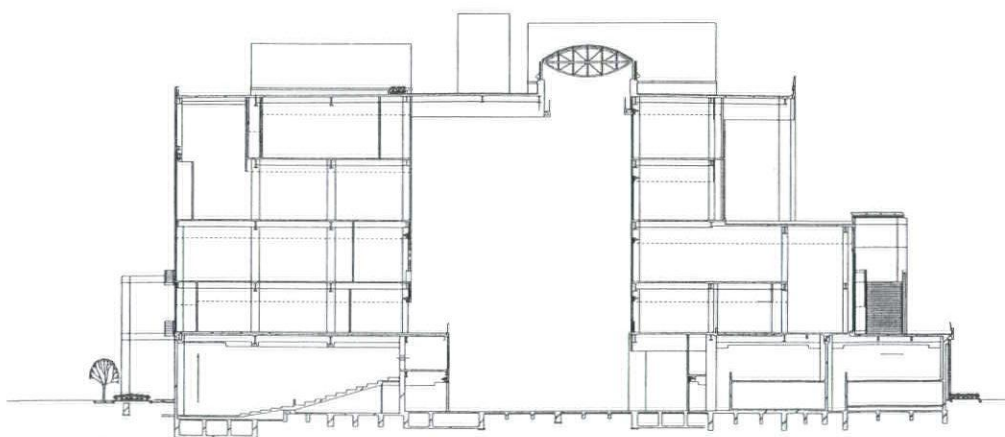


1階平面図 S=1:800

名称：メディアージュ (MEDIAGE)
 主用途：都市型エンタテインメント施設
 発注者：ソニー アーバン エンタテインメント(株)
 総合コンセプト、デザイン企画/監修：
 ソニー アーバン エンタテインメント(株)
 プロジェクト管理：
 ソニー(株)ソニー ファシリティマネジメント(株)
 建築設計：アトリウム「バゴ」/共用空間
 スペースコンセプト：
 YOSHI DESIGN NY / Sony Development
 設計：
 (株)日建スペースデザイン
 (株)竹中工務店
 (株)ワークテクト (照明デザイン)

写真：P.83、P.84、P.85左
 Nacasa & Partners

1. アトリウム「バゴ」
2. バー・カウンター
3. コンセッション
4. 池
5. 化石の壁
6. 木の柱



断面図 S=1:800

人と空間 都市と地球

人にやさしい快適な居住空間から
地球環境をふまえた都市構築まで、
建築が創造する未来社会の様相は
構想の一端を担う建材にも関わり、
時の流れでしか見えない性能や
スペックでは語れない品質が必要となります。
YKK APがめざしているものは
調和とやさしさに満ちた高品位商品の提供と
建築創造に携わる方々への
総合的なサポート体制の確立です。

**YKK
ap**

 YKKア-キテクチュラルプロダクツ株式会社

東京都千代田区神田和泉町1

<http://www.ykkap.co.jp>

個性が集まって大きなエネルギー

サッシ・カーテンウォールの総合メーカー



私たちは、今、ひと昔前の科学技術の進歩を強調するだけの時代から
“テクノロジーとヒューマニズムの調和”をめざす新しい時代をつくろうとしています。

とくに人間の生活空間を創造する建築業界においては、
こうした先進性が強く要求されていますが、その中で、生活空間としてのアメニティ（快適さ）や、
建築物内外の両面にわたるデザイン・外観・色彩など
美的付加価値の重要性もますますそのウェートを高めています。
弊社は斬新で、確かな品質の製品を供給することを通して、
社会へ大きく貢献していきたいと考えています。



昭和サッシ

昭和鋼機株式会社

本社 ▶ 〒101-0031 東京都千代田区東神田2丁目10番6号
☎東京(03)5687-1101(代表)

所沢工場 ▶ 〒354-0045 埼玉県入間郡三芳町大字上富1163番地

明石工場 ▶ 〒674-0093 兵庫県明石市二見町南二見21番3号

昭和鋼機サービス株式会社 ▶ 〒354-0045 埼玉県入間郡三芳町大字上富1163番地
大阪支店・札幌営業所・仙台営業所・横浜営業所・名古屋営業所・九州営業所

第7回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展

www.venezia-2000.com

La Biennale di Venezia 2000

ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展シンポジウム @ 東商ホール 07, Apl, 2000

去る4月7日、東京、丸の内の東商ホールにおいて「第7回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展・国際シンポジウム」が開かれた。

基調講演は今回のヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展総合ディレクターを務めるマッシミリアーノ・フクサス。

パネル・ディスカッションでは、司会を三宅理一、パネラーには、[project.co.jp]メンバーから北野宏明、佐々木龍郎、福田和也、津村耕祐が参加した。

シンポジウムのドキュメント、その後の[project.co.jp]メンバーによるコメントを再構成してレポートする。

マッシミリアーノ・フクサスによる基調講演によって、今回のヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展（以下、V.B.）の特殊性、先進性が世界に先駆けて公開されることになった。

.....
フクサス

いまから1年半と少し前、私は（パレスチナ平和会議場）というプロジェクトを依頼された。シモンベレスとアラファト議長が和平交渉の席についた頃のことだ。アラファトとシモンベレスは、イタリアの投資家と相談し、テルアビブのジャファという地区、アラブ人が住んでいるパレスチナ地域を建設敷地として選んだ。ふたつの異なる民族が非常に複雑な問題を抱え、紛争を繰り返していた地域、そこに平和会議場をつくらうというプロジェクトである。

このプロジェクトを耳にした時にまず考えたのは、歴史的困難を抱えた場所や人々に対して、建築家としてどんな貢献ができるのか、ということだった。

その後、V.B.の総合ディレクターに任命されたわけだが、このふたつの出来事を通じて、世界の建築家は、世の中を良くするため、また人々の生活の質を上げるため、さらには平和のためにどのような貢献ができるのか、それを真剣に考えるべき時がきたのではないかと考えた。建築家に課せられた課題、責任というものに考察を深める機会となったのだ。

私たち建築家の最大の関心はやはり人々の住む都市である。都市という領域の中には、人間のドラマがあり、矛盾点があり、問題点が集約されている。人間の問題のすべてが凝縮された都市の将来のビジョン／展望はどうあるべきなのか、将来のシナリオはどうなるのか、真剣に考えるべき時がきた。

このような経緯で今回のV.B.のテーマを「都市——美よりも倫理を」とした。

また、今回のV.B.は体制側から提案された展覧会ではなく、あらゆる人々にオープンで民主的なものにした。特に若い世代には広く門戸を開きたいと考えている。そのためにウェブ・サイトをまず立ち上げた。アーティスト、クリエイター、建築家すべてが一丸となって、若い頭で自由に考えた新しい都市の姿をインターネット上でも探していきたい。

ウェブをたち上げてから1年の間に、若い世代からいろいろな提案をいただいた。参加者は大きくふたつのグループに分かれているようだ。ひとつは、環境アートの都市空間を考えているタイプ。具体的には、都市に流入する難民に、どのようなスペースを提供することが可能かといった、難民問題に焦点をおいて都市環境を考えるもの。

もうひとつは、技術的な側面に焦点を置いたもの。新しい世紀である21世紀は私たちが人間の問題を解決するために、より効率よく技術を使っていくべきだ。新技術、情報技術や通信技術を積極的に自由に民主的に使うことが、人類最大の資産になるのではないだろうか。

○後半パネル・ディスカッション

司会：三宅理一（建築史家、慶応義塾大学大学院教授）

パネラー：

北野宏明（科学者）

佐々木龍郎（建築家）

津村耕祐（ファッションデザイナー）

福田和也（作家、評論家）

.....
福田
私にとって「近代文明、あるいは近代思想の乗り越え」は非常に大きなテーマ。近代的な枠組みを越えた都市像をつくる、という[project.co.jp]の建築家の方々の提案に共感して参加した。

V.B.では「ネットポリス」という概念を提示する。これは、ヘレニズム期にヨーロッパから中近東に点在した、古代都市のネットワークを念頭においた、デジタルネットワークで結ばれた小都市群のこと。

情報革命が都市に何をもたらすのか、インターネット技術が都市とそれを支える政治や文化に何を要求するのか、ということが大前提となっている。

情報革命が都市のあり方に要求する変化は次の3点。

1.大量インフラと政治主体の消滅

インターネットが普及することによって、SOHOのようなかたちでデスクワークのためにオフィスに行く必要がなくなる。もう少し進歩すると、かなりのサービスや仕事が、単なる情報の処理を越えて、より円滑に行えるようになるだろう。さ

インターネット上でのV.B.：〈エキスポ・オン・ライン〉について。

エキスポ・オン・ラインは以下のセクションからなる。

- 1.フォーラム：インターネットを通じてコメント・アイディアなどを送ることで参加できる（現在、終了）。
- 2.コンクール：「第3ミレニアム都市」についてのコンクール。若手の建築家・アーティストが自由に参加できる。既に1000人の参加者を得て、現在審査中。
- 3.リアルタイム・シティ：リアルタイムで接続された世界中の都市の姿を映し出す。
- 4.ビデオ：インタビュー形式でさまざまな建築家・アーティストたちのヴィジョンを収録。

ヴェネチア・ビエンナーレ公式web site <http://194.185.28.38/gb/index.html>

EXPO on line <http://194.185.28.38/it/expoing2.html>

（インターネット部門責任者、ドリアーナ・マンドレリ@シンポジウム）

今回の会場は複数のすばらしい場所を確保した。

まず、昔の軍の造船所で、ヴェニス共和国が兵器や船をつくっていた軍事地区だったアルセナーレ会場。ここにはコルデリエという18世紀の歴史的建造物がある。長さ280m、幅18m、各スパン6m。

今回のヴェネチア・ビエンナーレはこのコルデリエを中心に展開される。この中には280mの巨大ビデオスクリーンを設置し、世界の都市が抱えている問題を30台のビデオプロジェクターで投影する。

サンパウロ、ボンベイ、モスクワ、上海等々、もちろん東京も含めて。地方都市、歴史的都市から、近代的メガロポリスへと変容しつつある大都市の姿をリアルタイムで見せる。

イタリアのパビリオンは今回初めて、各国政府のパビリオンと同じジャルディーニ会場に設置される。

その他にガッチャンドレ地区、ベネト地区がある。（フクサス@シンポジウム）

今回のV.B.は、マッシミリアーノ・フクサスのカラーが非常に強く出ており、企画展示の方に重点がシフトしているように思える。（西森）



コルデリエ地区

フカサスの基調講演の後、会場客席から小池一子氏が呼ばれ、日本政府館の解説が行われた。

日本政府館・概要

コミッショナー：磯崎新

サブコミッショナー・キュレーター：小池一子

テーマ：「少女都市」

参加アーティスト：妹島和世・西澤立衛、津村耕佑、オランダの若手写真家・デキヤヨイ（新人）
近未来の都市を生きる主役として、ジェンダーの枠に取り込まれていない人々を設定した。

それを「少女」と見立て、芸術の領域、制度、国家の枠などを取り壊しつつ、従来の建築展にない見せ方と視点によって都市像を描く。（@シンポジウム）

ファッションは半年や1年くらいで飽きてしまうので、飽きたらお店に持って帰ってきてもらって、それを集めて難民の人たちに送ろうとした。実際、仕分けするボランティアが大変らしいので、ある特定のアイテムに限定して。

でも、戻ってきたのは2着しかなかった（笑）。

エキジビジョンなどで古着になったものは送っている。理想的には古着としてどんどんリユースされていくといい。（津村）

らに、オンラインであらゆるものが購入でき、あらゆる情報が取り入れられるようになっており、ただ物を買ったり情報を得たりするために都市に出てくる意味がなくなる。すると、大量移動、大量居住を前提とした近代都市成立の必然性が完全に崩壊してしまう。同時に、現在のように大きい交通量、輸送量を許容することを前提としている大都市を運営する主体としての政治主体も意味をなさなくなる。

2. 差異の許容

中国の山岳部、ロシアのバイカル湖から東の部分などといった土地と、インターネットの空間との間には非常に大きな差異がある。このヴァーチャル空間と現実空間の差異を、均質化するのではなく、許容していくことが必要なのではないか。

そうすると、国民国家を代表とする、国家を全面的に均質化していくという近代がプログラムとして持ってきた思想もなくなり、様々な価値観や思想、経済力、生活スタイルの差異を許容するようなものになるのではないか。

3. 国民国家的メンバースhip

この国の国民であるから投票権がある、といった政治参加の仕組みの意義がなくなっていく。そのとき、都市を存立させる基盤は何になるのか。機能的な意味、必要な意味によって都市を成り立たせることができないとすれば、都市が必要になるのは、完全に対面関係的な場所で行われる文化や価値観の共有、さらに言えば社交、政治になる。

政治的に真の自由を獲得する場所として、都市が必要になるだろう。

その都市は非常に小規模な物にならなければならず、自分たちが政治的な権利を獲得するために、国民国家的な都市の枠からははずれなければならない。そのような小都市と国民国家との関係、緊張性を維持するために、小都市自体がネットワークをつくり世界中を覆っていく。

北野

私は、極端なテーゼとしてロボットのために、都市または空間を設計した場合に何が起るのかということを考えてみたい。

我々は、農耕技術によって飢えから解放され、移動技術で土地の束縛から解放され、通信技術でコミュニケーションに対する自由を獲得してきた。インターネット技術によって政治的自由、価値観の自由の獲得し、より抽象的な自由を獲得するようになっている。

同時に、ロボットというものは、どういう価値を我々に与えてくれるのか、どういうつきあいをしたらいいのか、というところがテーマだ。

ロボットというと、映画の「スターウォーズ」や「ターミネーター」のような、スーパーマン的に非常に能力の高いロボットを思い浮かべるだろう。確かに一部の機能に関しては実現可能だが、二足歩行自立型のロボットや、ソニーの（AI BO）のような四足歩行のロボットを考えても、我々の空間は実は非常に動き回りにくい空間である。我々がなんでもなく認識できる障害物や段差でも、彼らは見分けることができない。

これから20年経ったときにはそういう問題は解決されるかもしれないが、ここ5年、10年の段階ではきわめて制限された運動能力、認識能力しか持たない存在である。ロボットというのは非常にハンディキャップを背負った存在なのだ。そういう存在に対する都市または空間を考えていくと、ロボットにとってフレンドリーである以上に、人間にとってフレンドリーな空間の設計ができる。

また、ロボットというツールを使わないで都市を設計した場合、つまりロボットの眼を介さずに設計を進めた場合には、どうしても直感的作業になり、見落としが発生する。ところがロボットというプロブを使って設計していけば、物理的に見えないところは見えないといったように、都市を客観的に検証していくことになる。

津村

〈ファイナルホーム〉というタイトルの服をつくっている。

服として機能するが、体全体が全部ポケットになっていて、その中にゴミなどをつっこんでサバイバルできる。この服があれば、都市の中でどこに行っても寝起きできるのではないかと、という発想から「ホーム」という名前を付けた。家を背負って歩いているヤドカリのように、一個の服を着て移動して歩けば昔の遊牧民のように生活できるだろう、という提案でもある。実際に販売されているが、ゴミを詰めて都市の中でサバイバルしている人は、さすがにいない（笑）。

前々からロボットに服を着せたら面白いとは思ってはいたが、ロボットの表面というのは一体裸なのか、あれが最終の服なのかという疑問があった。だったら一度服を着せてもいいんじゃないか。

この場合の服というのは、おそらくカバーだろう。ロボットというひとつの製品のカバー。ロボットのデザインがこれから重要になってくるといように、そのカバーも重要になってくるだろう。

そんなことを考えていたら、（AI BO）の服をつくっているグループもいると聞いて、みんな同じことを考えているのだなと思った。

佐々木

ふたつ話をしたい。

まず「薄い建築」ということ。

インターネットで個人化が進むと、個人が自由にできる「表面」が必要になる。表面だけでつくった建築のモデル。厚さ5mくらいの建築が、サッカーフィールドをぐるり一周囲んでいる。最初は清掃工場や倉庫のように全然使われていない表面を広告のようなメディアとして使うのではなく、個人が都市の中で生き残る空間性・厚みを与えられないかというところからスタートしている。

2万人規模の人間がすべて討論に参加して自分たちの法律やシステムを決めていく。

ネットワーク的な古代都市のポリス、ヘレニズム的な古代都市のあり方をもとに、異質な文明の中に点々と散在し、かつネットワークされたポリスの中に共有する文明があるようなネットワーク都市のモデルを提示した。（福田）

個人の資産所有の形式は少なからず変化していくと考えている。

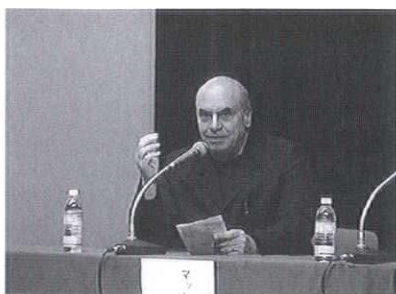
「ネットポリス」を所有する人達は、ただ住民として所有する人と、資産として所有する人の2通りの所有の仕方が考えられる。ネットポリスの「所有権」つまり「証券」はその「ネットポリス」の潜在的可能性と影響力によって価値が変動する。（西森）

抽象論ではなく、情報空間と現実空間との相互環境が構築されている今、その環境を行き来するインターフェイスとしてロボットが果たす役割は大きい。デジタルがバウハウスになり得なかったのは接触感がないからである。かつてバウハウスの中心にあった「建築」を「ロボット」と置き換えてみると、そこには情報革命後の都市が見えるのではないか。

現状でヒューマノイド・ロボットを都市に解き放つのは土台無理な話だが、そのテーゼの仕掛けとして2000年のV.B.でロボットを歩かせるのは象徴的なコトである。

構築の象徴としての建築は去り、流動的で皮膚感のある「繋がり」に移行している事実をロボットと「ネットポリス」で確認したい。（松井）

〈ファイナルホーム〉を最初に見たとき、スポーツ競技場のロッカールームにかかっているような写真で、これに遺品が全部入っていればお墓になるだろうな、と思った。詰めるものによって、そしてその詰めモノがあからさまに表出することにより、新たな意味が生じる、そんな都市の新陳代謝があるかもしれない。（佐々木）



マッシミリアーニ・フクサス



小池一子



シンポジウム会場

丸の内のことでいえば、昔このあたりに武家屋敷の周りを長屋という薄い建築が取り囲んでいて、それがパブリックとプライベートの境界になり、その中に非常に開放的な屋敷空間があった。現在は屋敷しかない無防備な建ち方であり、そのデザインも中途半端にならざるを得ない。このモデルは長屋しかない都市の状態でもあり、個人がすべてこの長屋に入ってしまうと、地面は連続するパブリックな床として開放できるのではないかと考えている。

それと「デジタルイズド・バリアフリー」「ネットポリス」「薄い建築」を、いかに実現化できるのか。普通なら管理者から10万人が住む都市をデザインしてくれと仕事を頼まれるわけだが、そういうプロセスではなく、逆に10万人集めるところから都市を始めなければならないのではないかと。都市が商品化され売買可能になれば、同じ志を持った人たちに所有可能なものになる。そこで、買う物として都市を考えると、できあがるのに50年〜100年かかるとみんな死んでしまうので、ものすごく早く都市をつくらなければならないという話になる。

たとえば、6ヵ月でつくって10年くらいみんなで楽しんで6ヵ月で壊せる都市ができないかと考えている。世界中からユニットが配送されてきてどんどん組み立てられていくようなイメージ。

三宅

6ヵ月という早いスピードで都市をつくるとなると、いまのような建設システム、ゼネコンのシステムでは賄いきれず、生産・建設システムの大幅な見直しが必要なのではないかと。東京など地盤が軟らかく、それを固めるだけで大変な仕事だというのが、そういった現実の条件は考慮に入っているのだろうか？

佐々木

当然、考えた。最初は湾岸の埋め立て地に6ヵ月で建てよう

ということが始めたが、地下だけでどうがんばっても3年かかるという話になった。そのときに世界地図を広げて、硬い土地がたくさんあるのではないかと気づき、逆に、土地のコンディションによって都市のスタイルが変わっていくべきだという方向に転換した。

三宅

全体として都市概念の問題が通底しているが、福田さんの「ネットポリス」とみなさんのお話との関係は？

福田

都市の存立基盤は何かという問いは、ヒューマノイドや遺伝子の問題とも関わるし、人間は何のために生きているかという問いと非常に密接に関わる問題だ。

ヒューマノイドが人間と同じ能力を日に日に持つようになり、人間の体もバイオテクノロジーの発明によって、自分の内臓パーツなどがどんどん取り替えられるようになってくる。そのときのヒューマニティとは何なのか。北野さんが飢餓などの災いから技術によって解放されてきたという話をしていたように、我々が技術的な飛躍によって今まで施されてきた限界がなくなってしまったときに、結局最後に残るのは価値観や美意識、思考ではないだろうか。都市は価値観の坩堝になるのではないかと。

「ネットポリス」という構想は、インターネットなどで5千人から2万人の人間が、スポーツや喫煙、食事、音楽、政治的ポリシー、宗教などのテーマに従って集まって、都市を持つということ。色々な国籍の人たちがネットワークで集まり、記憶などしてお金を集め、都市を丸ごと買ってしまふ。買った都市に住んで、情報技術を介さない、人と人との直接的な対話や交渉や議論の中で新しい価値観を見つけていく。

そういう場所として、都市の存在理由、基盤がある。

フクサス

私は、今日私たちが国際的に置かれている都市の状況について、非常に憂慮している。

例えば、アメリカにはプライベートシティというべき都市が生まれている。ゴルフができ、犯罪がなく、子供たちはみんなWASPの金髪の美しい子供たちで、水もふんだんにある、といった私的な地域。お金持ちだけが生まれてくる街で、税金もない、必要な物はすべて手に入れられる、一見問題のないように見える都市だ。

だが、実際にはその対極に貧しい人たちがいる。

金持ちがプライベートシティに住み、貧乏人が大きな都市に住むという構造が問題。その上、移民がいて戦争があるアフリカのような場所もある。コンボ、ボスニア、バイルートなどの紛争地域もある。

また、ウィーンの例もある。オーストリアは革命を経験しておらず、非常に保守的で経済力もある国である。ところが近年、ウィーンにはベルリンの壁崩壊以降、東欧（南のボスニア、コンボ）からの大量の難民が流入している。新しい人民が小さなウィーンという都市に70万人も入ってきている。

こういった都市の状況を見ていると、技術だけではとても解決できない複雑な問題を内包しているように思う。私はもともとと親愛的だが、最近では周りにあまりに多くの問題があり、それを見ていると心配の方がどんどん大きくなっていく。技術で問題がすべて片づくのか、疑問である。

私たち建築家はこのような複雑な問題を前にして何ができるのか。V.B.ではこの点に関しても考えていきたい。

福田

「ネットポリス」に限られたエリートのもになってしまうという危惧は、我々メンバーの中でも話していた。

難民が色々な場所では受ける政治的圧迫、社会的、文化的的不平等を、自分自身で都市をつくる手段を用意することで乗り越えていくようなアイディアも提案していきたい。

キャンピングカーで生活している人たちが集まるイベントや駐車場をつくることの方が近道のような気がする。（津村）

難民問題とスラム化した都市問題とはいくぶん隔たりがあるように思う。難民の問題は物理的な場所を提供することでは解決しない。民族が土地を所有するという考え方を捨てないかぎり、フクサスの言う「難民」の問題は消えることがないだろう。（西森）

24時間稼働する都市、個人が自分の使いやすいようにカスタマイズできる都市、それが求められる回答のひとつだと思う。そのための政治、経済などの基盤が[project.co.jp]の提唱する「ネットポリス」ではないだろうか。（西森）

近代国家は、それまでのドメスティックな民族をイデオロギーと経済のふたつの色分けを地面に描いて成立したもので、災害以外の内戦や経済難民の演繹的な原因はそこにある。次なる都市という有機的な生命体を捉えようとする時、眼前の苦痛に過敏であることは対処療法に過ぎず、そこで問題がすぐ替わってしまう。

現在、国家が上位にあって個人活動がその中に含まれているという近代の階層構成自身、ネットワークの中では解体されている。これは、都市の成立条件が近代と全く異なっていることの現れだ。人が地面（これまでの都市）に帰属している限り、難民や貧困は変わらない。しかし実際の都市で、北野氏の言う人的物的「超流動性」が起こったとき、全体にどんな影響を及ぼすか？

「ネットポリス」は、技術的な水準が新しい都市像を体現している。そこからのリファレンスなのだ。（井坂）

建築家が上の立場から考えて押しつけるのではなく、マイノリティ、難民らが自分はどうしたいのか決めるシステムを構築することはできないか？ という意味で自主的な意志決定の手法として「ネットポリス構想」は有効ではないか？ 真の民主主義を構築することは歴史上成功しているとは言えない現状で、直接民主主義が成立する規模の都市を構築する試みとして、「ネットポリス構想」は意義を持つと考える。（山崎）

磯崎氏は政府館のコミッショナーとは別に自らのセクションでも出展する。アクチュアルとヴァーチャルの外側に、第3次的概念「トランス／TRANCE／憑依」を定義し、身体と意識をどう都市に収容するか、という問題を扱う。

今回のV.B.では60年代から都市について言及していた磯崎氏の新たな都市論を見ることができるだろう。

(@シンポジウム)

「ネットポリス」のどこまでも均質なシステムは、それだけで自律するものではなく、一方でイデオロギー的にもフィジカルな面からも多様なグローブ（地球）表面と層状に重なることで成立する。したがって、今回のV.B.での展示では、既存の都市を複数サンプリングし、「ネットポリス」の手法を使って、既存の文脈の成立条件を相対化し、新しい都市の可能性を提案する。（井坂）

北野

こういう形の都市があり得るならば、重要なのはスピードとコスト。スピードが非常に短く、非常に低コストでできてはじめて、都市の流動性が極大化し、いまの我々が持っている都市に対するイメージとはまったく違う「超流動型」の都市になる可能性がある。

そのときの問題は多様性がなくなっていくこと。これはカルトの宗教が都市をつくりやすくなるという点で、かなり危険。それをある程度バランスするメカニズムをどうやってビルトインするかが大切だ。

多様性が一時的には極小化するように見えても、都市がどんどん早く変わっていくことで、トータルで見ると多様性が増えていくようなことになる面白。

またロボットに関しては津村さんが衣装を着せてくれるということで、ヴェネチア・スペシャル版を開発している。ヴェネチアで見ていただきたいので今回はお見せしないのが残念だ。

ベネチアスペシャルは大きさが割と小さく、子供程度。ベネチアまで連れていかなければならないので（笑）。

三宅

「ネットポリス」のロジスティクス、あるいはデリバリーオーダーのシステム、材料や人の集約といった具体的な点は？

佐々木

「ネットポリス」は世界に20個から30個くらいあり、すべてひとつの時間を共有していて、周辺との時差を持つ各ポリス間を、自由に移動できる。東京で使っている風景がそのままベルリンにスーパーインポーズされるような状況になる。

北野

実際の素材はフェデックスで送る（笑）。何百万個というフェデックス・パッケージが飛び交う。

三宅

いま建築界で一世を風靡しているものに、農協・漁業組合型のロジスティクス、一昔前でいう「産地直送型」と、「透明な美学型」がある。

それとは関係のない、フェデックス型ともいえるべきもので、面白い。

北野

「ネットポリス」は、ある意味グローバルスタンダード、標準的なもので構成される。「ネットポリス」が10個ある状態で、ひとつ新しくつくるときには、10個それぞれの一割を削ってフェデックスで送る。

ただし、ここでも多様性がなくなることが再び問題になる。同じ素材で同じデザイン、同じコンポーネントでないと成り立たないから。インターネットが普及して便利にはなるが、多様性がなくなってくるのと同じ問題だ。

三宅

津村さんのデザインは、グローバルスタンダードとはかなり違うように感じる。（ファイナルホーム）の発想というのは、いまここで議論されていることとはかなり違った要素があるのでは？

津村

使う土地の気候とか、使う人のメンタリティが異なるので、それぞれの都市においては違うあり方になるかもしれない。みんなに同じ格好をしてもらおうとは思わない。一人ひとり違う個性を出してもらいたい。服として考えないで、身につけられるバッグと考えてもらい、入れるものはそれぞれ自由でいい。自分がいつも大事にしているもの、いつも肌身離さず持っていたいものを入れておける「道具」として使ってもらいたい。

シンポジウムの最後には、観客として来場していた磯崎新氏にマイクが渡された。

三宅

全体を俯瞰すると、江戸時代の日本に例えて幕府の将軍がフクサスなら、将軍直轄の江戸に[project.co.jp]がいる。

薩摩藩や長州藩のような存在が日本政府館で、薩摩の中でも特に琉球のところで磯崎さんが出展することになる。

こう見ると日本は、少女、ロボット、超能力を出す国として紹介され、21世紀を先取りした強いアウラを放つことだろう。

このシンポジウムでフクサスが語ったことの底辺には紛れもない現実がある。視野を世界に向けたときにどうしてもなく避けて通れない苦難と争いの事実がある。それらとの直面に起因する深い思いと意気込みは、今回のV.B.に、具体的要素として、目に見える形で反映されている。通常2ヵ月の会期は他ジャンルと同じく6月から10月末までの4ヵ月になった。会場も複数新設され、予算も従来の倍以上だという。

V.B.に参加する建築家・アーティストたちは、何らかの形でこれに応えることが求められるだろう。特に、いまだ巨大な権威や政治機構に取り込まれていない若い世代には、より新しく身近でリアリティのある視点から、みずみずしくも旧来のしがらみにとらわれないプロジェクトが期待されているのではなかろうか。

第7回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展は6月18日に開幕を迎える。

（まつの・べん／建築家、ライフアンドシェルター社）

出展者グループ [project.co.jp] とは……

30代の若手建築家グループの有志が発端となり、今までにない新しい都市像を切り拓くため、異分野のデザイナー・評論家・科学者の参画を求めて発足したプロジェクトチーム。

井坂幸恵（建築家）、岡崎泰之（メディアアーキテクト）、佐々木龍郎（建築家）、西森陸雄（建築家）、山崎あかね（建築コーディネーター）、北野宏明（科学者）、

津村耕祐（ファッションデザイナー）、福田和也（文芸評論家）、松井龍哉（デザイナー）



シンポジウム・パネラー

左から、三宅理一、佐々木龍郎、北野宏明、マッシミリアーニ・フクサス、津村耕祐、福田和也



Exhibition Report

展覧会レポート

田中ルミ・戸村浩展
会期：
2000年4月6日(木)~28日(金)
会場：
ギャラリーMMG
主催：
ギャラリーMMG
企画：
ギャラリーMMG、益田祐作

羽原肅郎・益田祐作

比翼連理とも 偕老同穴ともいうべき二人展

本誌「SD」誌にて1995年10月号から24回連載された戸村浩氏が奥様の田中ルミさんとふたり展を開催された。

東京にも多数ある画廊の中で、まじめで知的な前衛をめざすアーティストにとって、好意的で意欲的で、素晴らしい画廊は、そう多くない。ここ「ギャラリーMMG」はその知と美の前衛を構築する人達の側に立つ屈指の画廊のひとつと言ってよいだろう。

主宰者の益田祐作氏は1974年にフランスのフェルナン・ムルロ版画工房と技術援助契約を結んで東京タワーのそばにフランス式のリトグラフの制作工房、「アトリエMMG」を創立され、その一環の施設として1991年にこの「ギャラリーMMG」を設立された。

筆者はこの益田氏の画廊で開催される展覧の根底を貫く思潮とも言うべきものが、このギャラリーの存在を大きなものにして思うように思う。益田氏はこの画廊の根本思想は「自然基体」だと言う。自然によって見事にコントロールされ、秩序化された素朴なもの、また、生成変化する事物の根底にあって持続する実体を、人間の知性によってさまざまな形に形成され表現されたものとも言うのだろうか。とにかく主宰者益田祐作氏の造形理念を通過するアーティスト達によって展覧されてきた。今回の「田中ルミ・戸村浩」も同様の線上にある。それは、次に掲げる益田氏の紹介文がそれを最もよく表現し、また、「田中ルミ・戸村浩」両氏への適切なクリティークとなっていよう。(はばら・しゅくろう／明星大学造形芸術学科教授)

田中ルミと戸村浩は、絶妙な夫婦、いや夫婦です。永遠の少女のようにローズ色の上品なエロチシズムを撒きちらす人形やコラージュの数々を縫い上げるルミさんと、「トムの時空形象学」と称する理路整然たるコンセプトで「時空の積み木」を空間に結晶するトムさん。

夫婦がお互いに自立した個として、生活を共にしながら、刺激しあい認めあい、批判しあい、時に反発しあいして、個々のすぐれた資質を花開かせた例は、ヨーロッパの近代美術のなかを探してみても、きわめて少ないことがわかります。例えば、ロベール・ドローネーとソニア・ドローネー、ハンス・アルプとソフィ・タ

ウベル・アルプ、バーバラ・ヘップワースとベン・ニコルソンなど、よく知られたカップルを思いだされると思います。

ところが、彼らにしても、ひとつのプロジェクトのために協同制作をしたことはあっても、夫婦でひとつの画廊空間で展覧会をひらいた例は、少なくとも生前にはないようです。

ルミさんとトムさんは、古風にいえば、比翼連理とも偕老同穴ともいうべきふたりでありながら、お互いに造形美術作家として、まるで別々の、しかし意外にどこかに共通している作品を生み出しているという点で、絶妙な夫婦なのです。

ルミさんの造形のもとになっているのは、祖母から母へ、そして子へとつながってゆく「縫う」という行為です。彼女の思いのこもった愛らしくもドキッとさせる人形たちが形作るコラージュは、女の子なら誰でも好きな端切れ、ボタン、ファスナー、糸巻き、包み紙、ラベル、そのほか日常のこまごまとした身のまわりの無名のものたちをチクタクと縫いつなげて生まれてきたものです。

ルミさんの発想は、彼女だけの内界のもので、とても理解ができませんが、その発想の連鎖は連想というより、心理の皺のしりとりみたいなもので、ある年代のある時期に心うばわれた女性たち(それはあまり多くて、ここに名前を書くこともできません)が種子になって生長し、育んできたものです。

この展覧会は、ルミさんのこういうさまざまな作品で編みあげた文章の読点の位置に、トムさんのしなやかな数理哲学的な作品を配して、ふたりの造形的対話を読んでもらおうとして企画しました。

トムさんの作品は、彼がMOVE FORMと呼んでいる平面から立体へ、また、立体から平面へと変容する「たためる絵画」「立方体」「正12面体」「菱形30面体」など、そのほか「レムニスケート・クロック」と彼が呼んでいる分針と秒針に新たに2本の針をつけた、形を刻む時計など……。

(ますだ・ゆうさく／MMG 版画工房、ギャラリーMMG 主宰)



会場風景

Exhibition Report

展覧会レポート

第2回「暮らしの中の椅子展」

会期:

2000年4月6日(木)~25日(火)

会場:

新宿パークタワー内OZONEプラザ

リビングデザインギャラリー生活スタジオ

主催:

朝日新聞社、リビングデザインセンターOZONE

素材としての「木」

題材としての「椅子」

河合俊和

この展覧会が求めたものは何か？素材としての木のテーマ性には、考えるべきことは多い。椅子という題材の中には、これからの日本の生活文化を考える上で重要な要素が内在していることも言うまでもないことであろう。

この展覧会の主旨が「日本の生活文化の中での椅子」という前提に立っているとすれば求められるものは、今どのような方向で主題を考えたか、という作家の明確な立脚点を評価するべきであろうし、展覧会として重視されるべき点であろう。また、人々の暮らしの中で、あるいは、広義においては日本の文化的次元でのそれらの存在意義にまで及ぶことになろう。求められるべきことは、日本の生活文化の中での木の椅子のもつ特殊性であり、またその独自性に最大の魅力が存在するとも考える。どこにそれらが存在しているのか？椅子本体なのか、生活様式の中での椅子なのか、素材なのか、あるいはかたちなのか。

木の椅子は心地良い、自然に誰もが思うことであろう。たとえ座面が木でとても堅くても、木の表情のあたたかさに、あるいは木の香りに包まれて座った感触が木であることによって、その痛さもしばし忘れてしまう。こんな時代だから、木のやさしい感触が良いと思いながら、素材がある意味、心の癒しの材料と化すことも多くないであろう。素材のもつ力を信じるのが、素材に頼ることは意味のないことだ。木は元来建築材料として、木工芸品として、あるいは生活用品として我々の生活の中で幅広く利用されてきた。その素材の持つ力は、測り知れず、魅了された人は自然の立木まで夢が及ぶことも少なくない。造り手として、素材の魅力を追求し、かつての人々が我々に伝えてくれたように、我々もまた後世に伝えていくことは本当に重要なことであると思うが、今、考察すべきことは、何が木の椅子を日本の生活文化の中で位置づけさせるのか、その造形的独自性は何なのか、その点を明確にしたい。

椅子一脚は、その時代においては水一滴かも知れないが、逆に、名品といわれる椅子が、半世紀たった今でもなお生産されている現状が何なのかを考えれば、その時代の一滴が、時代を越えて存在していくことは、明白な事実として我々の目前にあるのだ。

会場の中では椅子に触れることができ、そして座ることができる。互いにコミュニ

ケーションすることができることは、この種の展覧会にとって非常に大切なことであり、実現させたことは評価すべきことである。「あっ、これ座りやすい、これ座ってみて、やはり木の椅子がいいね」という会話が聞こえてくる。人々の表情には、それらに対する優劣よりも、もっと別なことを感じているようにも思えた。木の魅力を何らかの形で感じていることは、疑いもないことである。しかし、造り手にとって素材としての木を現代社会の癒しのために用いるのは木にとって、はなはだ迷惑なことである。ただ造り手の追求の結果として得られたものであれば、それはまたひとつの成果かもしれないが。

建築家、工芸家、あるいはデザイナー等の造形家にとって、木という素材は、石・金属・プラスチック・布・紙等と同じように位置づけされているはずである。いま、椅子という題材の中で、過去の変遷の中でみた量産化という問題に対して否定的な見解があるようだが、それは大きな認識の間違いがあるように思われる。それよりも考えるべきは、量産化の品質であり、良いデザインである。そして、安価で消費者に提供できるものであるならばこんな良いことはない。ゆえに、量産化された椅子を否定することが、木の椅子の肯定とはならない。素材は、その固有のものを持つがゆえに魅力的であることを認識する必要がある。そうでなければ、木は、癒しの材料として、商業的にのみ用いられることを避けられないのである。逆に、製品化という目的があるとすれば、それぞれの椅子に対してより厳密な判断が必要となろう。

アレッシィ社（伊）のオーナー、A.アレッシィ氏は、製品化の判断基準として4つのことを言及している。(1)美しさ、(2)コミュニケーション、(3)機能、(4)価格である。ひとつひとつの厳密な判断結果が製品化を意味しているのである。

素材としての「木」、題材としての「椅子」の魅力の発見は、それ自身に対してであり、その可能性に対しての考察の上に成り立っていると認識すべきである。この展覧会がその可能性を持つことは言うまでもないが、時代と共にその原点に返ることができるのであれば、その意味は大きい。最後に、ひとつひとつの椅子をつくられた方々に対して、その技術の高さ、丁寧さに敬意を表したい。(かわい・としかず／建築家)



3F: OZONE プラザ



6F: 生活スタジオ 写真提供: リビングデザインセンター

Exhibition Report

展覧会レポート

TAKEO PAPER SHOW 2000 考える紙

会期:

2000年4月19日～25日

会場:

青山スバイラル ガーデン&ホール

主催:

株式会社 竹尾

大阪展

会期:

2000年5月23日～25日

会場:

マイドームおおさか 1F 展示ホールA

名古屋展

会期:

2000年5月30日～6月1日

会場:

ナディアパーク国際デザインセンタービル 3F

デザインホール

工藤強勝

グラフィックを
豊饒させる紙素材

本展覧会は紙の専門商社(株)竹尾が毎年開催してきたペーパーショウのひとつではあったが、今年は創業100周年記念という節目にあたり、これまでとはいくつかの面でコンセプトを異にしていた。

単に話題や集客という点から分析すれば、1階スパイラルガーデンに展示された「RE DESIGN——日常の21世紀」展を見て感動し、たわいのない遊びに触れ、うなずき合う観覧者たちの表情、動き、流れを見ているだけで充分おつりがくるものであった。紙がいかにデザイナーやクリエイターのものではなく日常に浸透しているモノであるかを再認識する光景として残った。

この「RE DESIGN」展は過去にも企画し、好評を得たものであるだけに、ある程度の盛況は予想していた。内容は、ティッシュペーパー、ゆうパック、原稿用紙、切手、おむつ……など紙に関連のある日用品をグラフィックデザイナー、建築家、プロダクトデザイナーなどがリ・デザインしたものである。例えば隈研吾のチューブ型ゴキブリホイホイ、坂茂の四角いトイレトペーパーなどがあり、大江匡のコーヒードリッパーはデザインが優れているだけでなく機能的であり、すぐにも商品化できそうなものであった。総じて言えることはテーマに対して生活や環境を当然のようにインクルーシブに取り組んでいたのは建築家やプロダクトデザイナーに多く、グラフィックデザイナーの中には茶化したり、うけを狙っただけのものも見受けられ、日常の仕事への姿勢の違いを垣間みる結果にもなった。

むしろ、私の心を喚起し、最も興味深く感じさせたのは「紙とデザイン—竹尾ファインペーパーの50年」と題した展示スペースであった。ファインペーパーと

はカラフルな色調や質感の多様性をもった紙のことで、日本では戦後になって数多く抄造され、現在では数百にもおよぶ銘柄がラインナップされている。

本展では、その中から1949年から2000年までに誕生した代表的な50銘柄を選出し、50人のクリエイターがその紙を使用した作品を出品し、さまざまなモチーフを題材にエッセイを寄せていた。

さて、企画のシーケンスは50銘柄の紙によって制作された作品の数々を年代順に展示するという基本フォーマットではあったが、そこから想起されてくるものは、多元的な時空をはるかに超越していた。紙素材というキーワードは戦後日本のグラフィックデザインの豊饒をささえ、幾重もの地層を形成してきたことを確かにしていた。杉浦康平、早川良雄、田中一光、横尾忠則、栗津潔、勝井三雄らの仕事が光彩を放ち、さらに、これらの作品の大半が書物であったことも特筆しておかねばならない。電子メディアの席捲にともない、ペーパーレス時代の到来と呼ばれているとは言え、紙に印刷された記憶のオブジェが書物として、この50年を物語るドキュメントをタイムカプセル化していることを改めて検証することになった。

いずれにしても、紙を扱う一商社の主催とは言え、これだけデザインの現在・過去・未来を多面的に俯瞰したイベントを開催できるのことはとても素晴らしいことである。企画、構成を担当した原研哉の感性も相変わらず非の打ち所がなく、唸らせるものがあつた。

なお、前述した「RE DESIGN——日常の21世紀」と「紙とデザイン」は同名の書籍として記念出版されている。

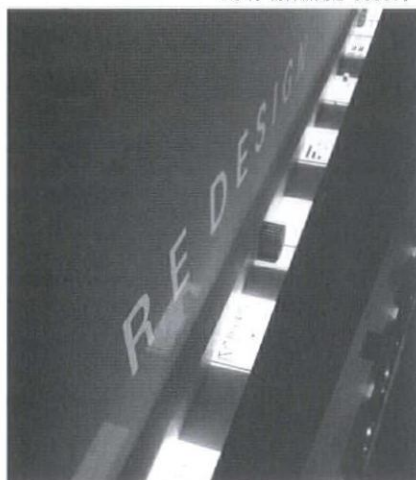
(くどう・つよかつ／グラフィックデザイナー)

記念出版「紙とデザイン」
B5判変型 竹尾 1000円

RE DESIGN

日常の21世紀

記念出版「RE DESIGN」
A5判 朝日新聞社 3000円



「RE DESIGN」 会場



「紙とデザイン—竹尾ファインペーパーの50年」 会場

Book Review

書評

評者 南 泰裕

20世紀「住宅」の 作品と商品をめぐる系譜学



「住宅」という考え方——20世紀的住宅の系譜
松村秀一著
A5変型 276頁
東京大学出版会 3200円

知人のIさんが家を建てたいと言うので、しばらく前から相談に乗っていた。しかし、Iさんは住宅の設計を建築家に依頼すべきか、プレハブ住宅メーカーに頼むべきか迷っていた。しばらくたって、Iさんはある住宅メーカーの担当者に、「建築家に設計を頼むことも考えている」と話しをしたらしい。するとその担当者は、「建築家の創る家は住む人間をないがしろにしている」「安藤忠雄の家は、雨の日に傘をささないと部屋を行き来できない」と、建築家による住宅がいかに良くないかを力説し始めたと言う。

私はその話を聞いて、どのように答えるべきか迷った。しかし結局のところ、建築家をめぐる諸々のイメージの流通に対し、どんなエクスキューズの言葉を紡ぐ気にもなれなかった。建築家をめぐる批判に対して、その反批判を組み合わせることはいくらかでも可能だが、それでは「住宅メーカーと建築家」といったような、二項対立的な構図の自明性を反復することにしかならない、と感じずにはおれなかったからである。そして、自分がそこで言葉を失ってしまったことに、あるもどかしさと違和感だけが残ったのだった。

住宅をめぐって絶えず直面する、そんな違和感のありかを、きわめて分かりやすい形で言葉にしてくれていたのがこの本だった。ここではプレハブやマンション、ニュータウンといった日常的な風景が見つめなおされ、われわれを取り巻く「名もなき住宅たち」の成立過程が丹念に解きほぐされていく。産業革命以降の鉄骨・鉄筋コンクリートという技術の開発や流通形態の確立などによって、住宅がプレファブリケーションの波に覆われ、マスプロダクションとしての住宅産業が隆盛していく様子を、20世紀初頭から現在に至るまで丁寧にフォローしているのである。また、それらがフォード型の自動車量産システムに依っていることも指摘され、「商品としての住宅」が、同時に居住空間の融通性を犠牲にしているなどの問題点が検証されている。

しかしこの本の重要性は、こうした住宅産業の史的検証のみにとどまっているのではない。筆者はここで、20世紀の著名な建築家たちが、実はこうした「名もなき住宅」の形成過程に深く交叉し続けてきたことを、冷静な眼差しで解き明かしているのである。例えば大量生産を前提として開発された、バックミンスター・

フラーによる〈ダイマキシオン・ハウス〉。住宅の工場生産化を見込んだ、ヴァルター・グロピウスによる〈トロツケン・モンタージュ・バウ〉。〈シトロアン型量産住宅〉や〈ベサックの集合住宅〉などによって、住宅の大量供給を模索した、ル・コルビュジエの活動。

「名のある住宅」と「名もなき住宅」とのこうした相補的な展開の系譜をたどることによって、この本は住宅の特殊と普遍という問題をめぐり、われわれに改めて再考をうながしてくる。つまりこの本は、「建築家と住宅メーカー」というダブルスタンダード的な対立項によって了解されてしまう構図（根拠）の虚構性を、実証的な手続きによってストレートに解き明かしてくれているのである。

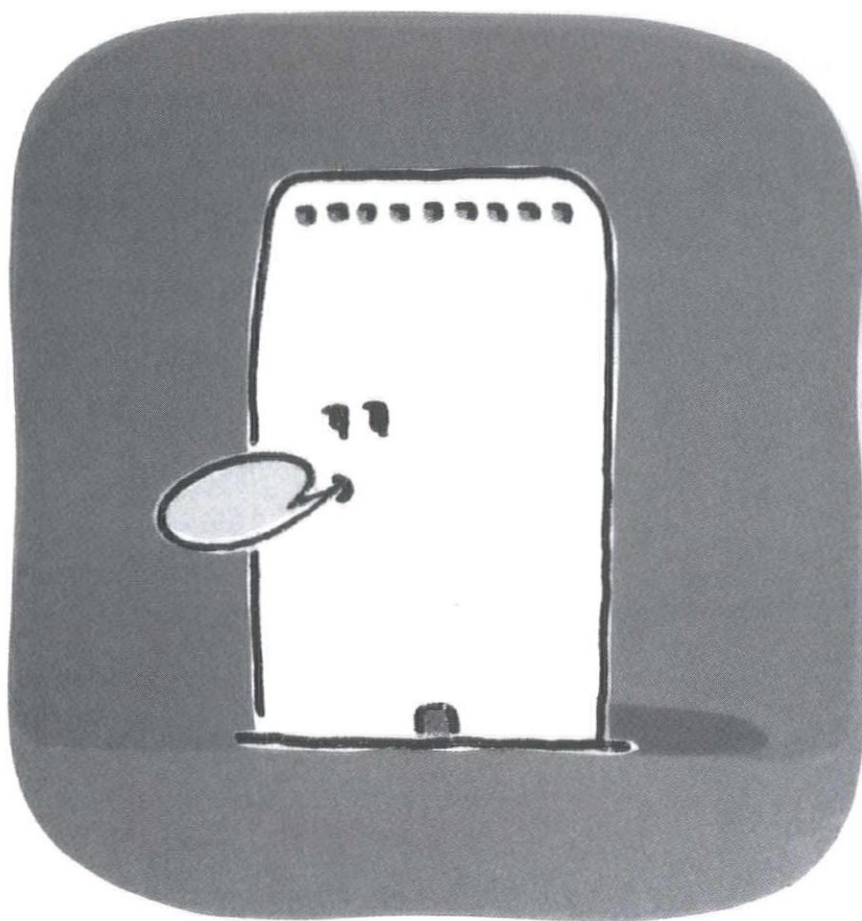
そこでは20世紀の資本と密着した住宅メーカーが、大上段に批判されているのでもなければ、建築家の特殊な態度が非難されているのでもない。各々の可能性と問題点が、たんとんとしかし正鵠を射た形であぶりだされ、読み終わってみれば、それら両者を対立項としてとらえようとする安易な思考を、あっさりとするがしく脱力させているのである。

そしてさらに言えば、こうした筆者の思考はこの本のタイトルにおいて集約的に表れている、とも言えるだろう。『「住宅」という考え方』というタイトルは、おそらくふたつの読み方ができる。第一に、「住宅」が各々の時代や人々によって、様々に異なった了解をされてきた、ということ。第二に、住宅というカッコ書きの言葉の中に、例えば地域や環境といった他の言葉を代入しうる可能性がある、ということ。その可能性を踏まえつつ、これからの居住の形式をめぐって何が言えるのかという問題を、本書はわれわれに投げかけている。

家を建てたいと言っていたIさんは、住宅メーカーの担当者があまりに安藤忠雄の住宅を批判するので、さすがに気になって、安藤の本を買って読んだらしい。その結果、逆に住宅についての安藤の考え方にいたく共鳴し、住宅メーカーに設計を頼むことをきっぱりやめたと言う。そしてこの本を読み終えた頃、また一から改めて住宅の相談に乗って欲しい、という旨の電子メールがIさんから届いていた。

(みなみ・やすひろ／アトリエ・アンブレックス主宰、慶應義塾大学非常勤講師)

人間すう、はく。ビルすう、はく。



私たちの呼吸は

自然の呼吸に

支えられています。

私たち人間が意識しないで呼吸しているように、人を取りまく環境も、知らないうちに呼吸しています。海も陸地も、動物も植物も。この地球全体が、ひとつの完成された空調システムとなり酸素をつくり、酸素を消費しています。

東熱のめざすひとつの頂点が、この自然の摂理を解明し、システム化することです。温度、湿度のコントロールによる環境を超えて、フィジカルな面から、メンタルな面の可能性のヒントが自然の中に隠されています。

ビルも呼吸しています。中にいる私たちのために。さまざまな分野のさまざまな建物が呼吸しています。だから東熱はいつも考えています。次に求められる

環境とは何だろう。より私たちに優しく、より私たちに身近な環境の実現のために。山の朝のさわやかな空気や、冬の夜の透明な空気を東熱は忘れません。

宇宙センターからスポーツドームまで、東熱のマインドはあなたのまわりに息づいています。

時代、呼吸、マインド
東洋熱工業

〒104-8324 東京都中央区京橋2-5-12 Tel.03(3562)1351(大代表)

いま開幕、 スポーツ ニューステージ。

多目的スペースがスポーツアリーナに一変！



ロビンス・オールスターは、シカゴブルズなどのNBA公式戦やアトランタオリンピックのメイン会場など、世界中で広く使われている本格的なフローリングによるポータブル・スポーツ・フロアシステムです。

- プレーヤーへの衝撃を吸収する弾力性に加え、永年の使用にも反りや狂いを起こさない高品質設計。
- 独特のジョイント・ロッキング方式により、短時間での組立て・取外しが可能で、しかも優れた収納性。

コンベンション施設、インドアスタジアムを短時間でバスケットボールやバレーボール、バドミントンなどに最適なスポーツアリーナに変身させることができるフローリングシステムです。

ロビンス FIBA・JBA・NBA公認コート

オールスター

ポータブル スポーツフロア システム

good new days
人間らしい美しい未来を

ヤナセ

総輸入元 株式会社 ヤナセ
商事事業部

東京都港区芝浦一丁目6-38 千105-0023
TEL. (03) 3452-4311

本社 大阪支店 名古屋支店 福岡支店 札幌支店 ヤナセ東北 ヤナセ静岡
03(3452)4311 06(6488)9801 052(241)2531 092(522)1331 011(231)2313 022(221)4171 054(261)4105

資料請求書
SD

詳しい資料を差しあげます。ハガキに資料請求券を貼付のうえ、ヤナセ 商事事業部までお送りください。

Information

お知らせ

2000 年日本建築学会賞 口作品部門受賞者記念講演会 「作品を語る」

受賞作品:

〈ビッグバレットふくしま〉北川原温

〈曼月居〉齊藤裕

東京会場

日時: 7月5日(水) 18:00~20:30

会場: 建築会館ホール 東京都港区芝5-26-20

講師: 北川原温、齊藤裕

司会: 神田孜(事業理事/竹中工務店)

定員: 300名

高知会場(7/11)、名古屋会場(7/14)でも開催。

問い合わせ: 日本建築学会

Tel: 03-3456-2051 Fax: 03-3456-2058

JIA Architects Museum 第1回企画展覧会

横 文彦:海へのオマージュ展

これまでに氏が計画した作品の中から海にちなむ5作品を展覧する。

会期: 6月10日(土)~6月23日(金)

時間: 11:00~19:00 日曜日休館

会場: JIA Architects Museum

東京都渋谷区神宮前2-3-18JIA館グランドフロア

入場料: 無料

問い合わせ: JIA プレス

Tel: 03-3408-7253 Fax: 03-3408-7240

建築からグラフィックまで ——エットレ・ソットサスと仲間たちの 軌跡 1980/1999展

会期: 5月28日(日)~7月29日(土)

時間: 10:00~18:00 会期中は無休

会場: 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館

香川県丸亀市浜町80-1

入場料: 一般950円 大学生650円 高校生以下
無料(20名以上の団体割引あり)

問い合わせ: 同美術館(担当: 中田)

Tel: 0877-24-7755 Fax: 0877-24-7766

ハイナー・シリング展 エントロピーの森

会期: 5月27日(土)~6月25日(日)

5/28、6/17に関連イベントあり。

会場: 1.横浜美術館アートギャラリー 2.ヨコハマ
マポートサイドギャラリー

時間: 会場1. 10:30~17:30 会場2. 11:
00~18:00 木曜日休館

入場料: 無料

問い合わせ: 横浜美術館 神奈川県横浜西区三
なとみらい3-4-1 Tel: 045-221-0300

アジア・デザイン・フォーラム東京 EAST WIND 2000/東風2000

アジアの建築・都市に関するシンポジウム、展覧会、出版を軸にして、アジア固有の価値を浮かび上がらせることを目的とした、「21世紀を射程に捉えた、アジアが発信する今世紀最後の都市・建築フォーラム」の開催。

1.展覧会

会期: 7月8日(土)~7月28日(金)

時間: 10:30~18:30

会場: 新宿パークタワー1階 ギャラリー1

入場料: 無料

2.シンポジウム

日時:

7月8日(土) 13:00~18:00

基調講演(伊藤滋、磯崎新)

7月9日(日) 9:00~18:00

会場: 新宿パークタワー3階 パークタワー・ホール

参加者: 日本の建築家11名、東南アジアの建築家10名、クリティック6名が参加する。

問い合わせ: プランテック総合計画事務所(担当: 広末、納村)

Tel: 03-3237-6857 Fax: 03-3237-6856

日本建築家協会1999年度 新人賞展

受賞者の受賞作品を中心に、過去の作品や進行中の作品、プロジェクト等、さまざまな活動を図面・写真・模型・CD ROM等で紹介する。

受賞者・受賞作品:

今村雅樹

〈太田市総合ふれあいセンター〉(群馬県太田市)

古谷誠章+八木佐千子

〈香北町やなせたかし記念館・詩とメルヘン絵本館〉(高知県香美郡)

吉松秀樹

〈宇土マリーナハウス〉(熊本県宇土市)

会期: 5月11日(木)~6月13日(火)

時間: 10:30~18:30 水曜日休館

会場: リビングデザインセンターOZONE

東京都新宿区西新宿3-7-1 新宿パークタワー内

入場料: 無料

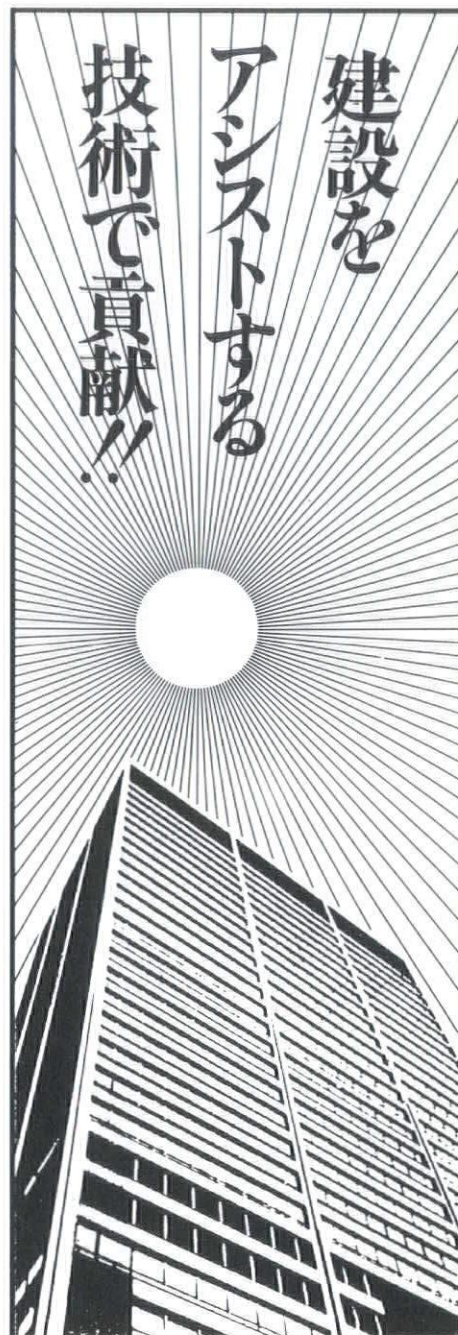
問い合わせ: 同センター(担当: 橋田)

Tel: 03-5322-6512

お詫びと訂正

SD0005号P.87に誤りがありました。以下のように訂正してお詫び申し上げます。

誤: 霜島健二→正: 霜島健二



- 一般電気設備工事=設計施工
- 防爆電気設備工事=設計施工
- 計装工事=設計施工
- 電気加熱保温工事=設計施工
- 静電気接地用リール——販売

ASTEC
SHOWA ASTEC

昭和アステック株式会社

(旧社名 昭和電機工業株式会社)

取締役社長 浦 道 雄

- 本社/東京都港区東新橋2丁目7番3号
電話03(3437)3851(代表) 〒105-0021
- 支社=関東・中部・関西・中国
- 営業所=新潟・鹿島・千葉・四日市・堺
倉敷・岩国・徳山・坂出・松山
新居浜・大分・福岡
- 駐在事務所=ジャカルタ・テヘラン・タイ
シンガポール・マレーシア

mitsubishi
三菱電機

エネルギー効率に優れた
PMギヤレス巻上機を採用。

薄形制御盤を昇降路内に収納。
全階で多様な乗場意匠を実現。

昇降路だけの エレベーター 三菱〈エレパック〉誕生。

新登場
ELEPAQ

三菱エレベーター
機械室レスタイプ／乗用・住宅用・寝台用

エレパック

機械室にあったすべての機器を昇降路内にすっきり収納しました。もちろん制御盤も昇降路内に設置。エレベーター乗場の出入口わきなどに置く必要はありません。昇降路だけのエレベーターですから、設計の自由度がアップ、すべての階で多様な乗場デザインを可能にします。

建物の設計自由度がアップ

ベントハウスがないので、日影規制への対応が容易。機械室と居室の位置関係で悩むこともなく、建物内外の設計がいっそう自由になります。

ビル有効面積の増加

機械室がないうえに、昇降路面積も従来のロープ式並みの省スペース。居室などに利用できるスペースが大きくなり、レントラブル比も向上します。

なめらかな乗り心地と省エネルギー設計

加速・減速がなめらかで騒音も少なく、エネルギー効率に優れたPMギヤレス巻上機を採用。高級エレベーター並みの、静かでスムーズな運転を実現しました。また、油圧式エレベーターに比べて電力消費量はおよそ1/3になります。

環境に配慮

油圧式エレベーターでは避けることのできなかった廃油処理の必要もありません。「環境にやさしいエレベーター」、これも〈エレパック〉の優れた特長です。

Efficient, Reliable & Comfortable
Vertical Transportation Systems
All Over The World

効率がよく (Efficient)

信頼性に優れ (Reliable)

快適な移動空間の創造 (Comfortable)

エレベーターの3つのキーワードを基に
そのすべてにおいて、世界トップクラスの製品を
全世界に向けて提供します。

三菱電機株式会社

お問合せ・資料のご請求は………三菱電機株式会社 〒100-8310 東京都千代田区丸の内2-2-3 (三菱電機ビル)

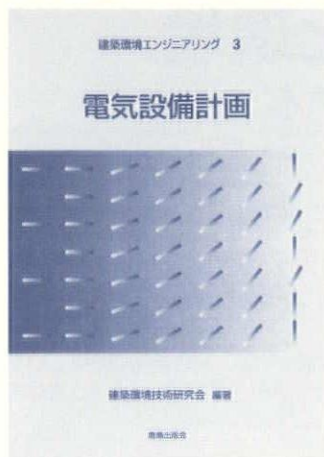
本社ビル事業部 TEL. (03) 3218-4544

今月の新刊

建築図書の最新刊書と、それに関連した書籍を紹介しております。

当社の新刊すべてをご覧になりたい方は隔月で奇数月発行の「新刊案内」をご請求ください。

当社のホームページ上でも新刊書を紹介しておりますのでご覧ください。



建築環境エンジニアリング ③ 電気設備計画

建築環境技術研究会 編著
A5判・224頁 本体3,800円+税

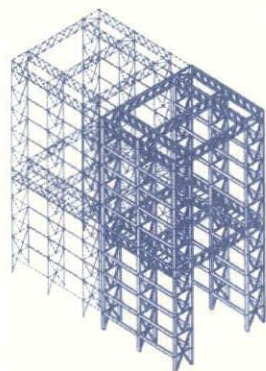
建築設計の実務者に送る、環境・設備設計シリーズの第3巻

本書では、電源設備計画に始まり、照明設備計画、情報・通信設備計画、防災・防犯設備計画、輸送設備計画など電気設備計画全般について、建築設計者にもわかりやすく記述した。

主要目次 電源設備計画／照明設備計画／情報・通信設備計画／防災・防犯設備計画／輸送設備計画

建築環境エンジニアリング<全4巻>

- ① 環境からみた建築計画 本体3,400円+税
- ② 建築にかかわる設備計画 本体3,000円+税
- ④ 空調・衛生設備計画 7月刊行(予定)

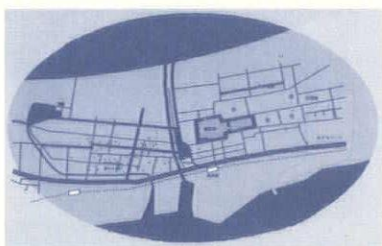


Space Structure 木村俊彦の設計理念

渡辺邦夫 監修 佐々木睦朗、金箱温春、新谷真人、松本年史 他著
A5判・244頁 本体3,800円+税(予価)

構造デザイナー木村俊彦の設計理念を解析

前川国男、丹下健三など20世紀の著名建築家と共に歩んできた天才的構造デザイナー木村俊彦の仕事構造デザイン、素材、解析技術、工法など様々な側面から紹介。戦後の日本の建築の歩みを構造デザインの側面から検証する。



西村幸夫 都市論ノート まちづくり・景観・都市デザイン

西村幸夫 著
A5判・260頁 本体2,800円+税(予価)

市民レベルの「まち・景観・都市論」を解説

かつての「まちづくり」に活かされた工夫は、歴史的景観、自然環境、小都市の町並みに学ぶ点が多い。都心の景観保全、これからの都市風景、アジア都市等、自己ノートとして啓蒙する斬新な「都市論」書。

主要目次 ●第一部 景観・都市デザインを考える／風景計画へ／都心・丸の内の景観から／アジア都市へ ●第二部 まちづくりを工夫する／歴史景観をまちづくりに活かす／「かわ」と「まち」の関わり／地域に密着した都市デザイナー、プランナーは可能か ●第三部 町並み・歴史的環境を保全する／町並み景観の保全整備条例の動向／歴史的環境保全と景観整備／町並みの整備と観光

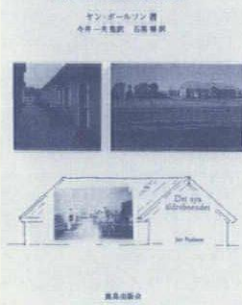
好評既刊書

最近刊行した建築図書と、それに関連した書籍を紹介しております。

最近の新刊すべてをご覧になりたい方は、隔月で奇数月発行の「新刊案内」をご請求ください。

当社のホームページ上でも新刊書を紹介しておりますのでご覧ください。

新しい高齢者住宅と環境 スウェーデンの歴史と事例に学ぶ



新しい高齢者住宅と環境 スウェーデンの歴史と事例に学ぶ

ヤン・ポールソン 著 今井一夫 監訳 石黒暢 訳
A5判・152頁 本体3,100円+税

「施設」ではなく「まちとすまい」を志向する

21世紀の高齢社会で求められるのは、従来の老人ホームのような「施設型」ではなく、それまで住んでいた「まち」で、「すまい」により近い居住環境を実現することだ。そのために先進国スウェーデンに学ぶべきことは多い。

【主要目次】 序章／スウェーデンの歴史的背景／老人ホームの発展と建設／居住用建物の新しい目標／在宅で暮らす高齢者と新しい特殊住宅／最新10事例紹介／事例をもとにしたさまざまな視点からの分析と研究 ほか

関連図書

スウェーデンの住環境計画

スヴェン・ティーペイ 編著 外山義 訳／A5・296頁 本体4,500円+税



次世代ビルの条件

ロングライフ／フレキシビリティ&キャッシュフロー

ベースビル研究会 編著
四六判・288頁 本体2,500円+税

21世紀の社会資産としての次世代ビル50の視点

21世紀のオフィス建築は、社会資産として長持ちすること、フレキシブルで居住性に優れていること、地震に強く、省エネなど環境への配慮など、さまざまな視点が求められる。本書では次世代ビルについて50の提案をしている。

【主要目次】 序章・未来社会への対応／第1章・ロングライフビルの条件／第2章・環境の世紀のオフィス建築／第3章・投資評価に強いビル／第4章・テナントを満足させるビル／第5章・次世代ビル実現のプロセス／第6章・次世代ビルへの招待



源氏物語空間読解

安原盛彦 著
四六判・232頁 本体2,500円+税

文学を超えて建築空間を再現し再認識する

源氏物語に描かれる空間構成では、貴族社会の生活、生活方法の支え、意識感覚など複雑な心理描写がドラマチックに展開する。寝殿造を背景に、平安時代の建築様式および空間描写の情景を、新物語的な仮想現実で読解。

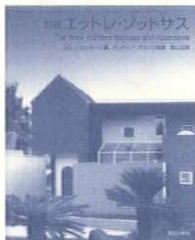
【主要目次】 第1章 源氏物語の空間構成／第2章 庭の空間と景観／第3章 源氏物語の建築空間

好評既刊書

建築図書の既刊書を中心に、話題の本を紹介しております。

既刊書すべてを収録した年度版の図書目録も用意しておりますので、ご請求ください。

当社のホームページ上でも既刊書を紹介しておりますのでご覧ください。



巨匠 エットレ・ソットサス

ミルコ・カルポーニ 編 横山正 訳
B5変型判・280頁 本体3,200円+税

オリベッティのタイプライターのデザインで一躍有名を馳せたイタリアン・デザインの巨匠ソットサスの全貌をフルカラーで紹介。その活躍の場を都市計画、建築デザインにまで広げている。



建築プロデューサー

浜野安宏 著
四六判・240頁 本体2,000円+税

建築プロデュースという未踏の領域を切り開き、精力的に実践にいきしむこと四半世紀。その豊富な経験をもとに、建築プロデューサーが心得るべきこと、建築家に求められるものを熱情をもって書き下ろした書。



近代日本の郊外住宅地

片木篤、藤谷陽悦、角野幸博 共編
A5判・608頁 本体8,400円+税

明治以降、近代化に伴って日本各地に造られた様々な郊外住宅地30事例を紹介。住宅地の様々なタイプの代表例が、600点に及ぶ写真、図面と共に紹介される。日本各地に造られた郊外住宅地研究の集大成。



高齢化・介護福祉のためのヘルスケア施設づくりの実例

野口哲英、中田利夫 著
A5判・208頁 本体4,200円+税

高齢化社会の到来を迎え、医療は予防治療からケア回復へと転換。介護法施行により、今後の施設づくりに不可欠な医療特性の模索、地域に密着した併設機能のあり方を、事業収支、補助金、計画設計例で解説。



建築家の住宅論 鈴木恂

鈴木恂 著
菊判・128頁 本体2,500円+税

ミニマルで透明度の高い空間をつくり続けてきた鈴木恂による住宅論。住み手が生活の変化の中で育んでいく空間の原型をつくる建築家は、建主とともに空間についての夢を共有し、さらにそれを現実のものとしていく職能であると論じる。



動く家

ポータブル・ビルディングの歴史

ロバート・クロネンバーグ 著 牧紀男 訳
B5変形判・184頁 本体4,300円+税

携帯テント、軽量船舶・飛行船・航空機、仮設劇場や博覧会建築、軍事施設である海上基地・移動橋梁、モビルハウス、海上油田基地、災害仮設住宅、宇宙建築……仮設で可動なあらゆる構造物を技術史的に解説する。



SD選書236

都市デザイン 野望と誤算

ジョナサン・バーネット 著 兼田敏之 訳
四六判・288頁 本体2,100円+税

16世紀以降こんにちに至る500年間の欧米の主要な都市デザイン事例を、豊富な図版と平易な文章による解説で概観。専門家のみならず都市デザインに興味をもつ実務者・学生の教養書・入門書として好適の1冊。



初学者のための都市工学入門

高見沢実 著
四六判・212頁 本体2,300円+税

従来のアカデミックな蓄積をふまえた上で、人間が生活するための都市をどう制御しどうつくっていくかという視点から、都市工学・まちづくりへの入門書として、ゴミ問題やユニバーサルデザインなど、近年の話題にも触れつつやさしく語りかける。



エコミュージアムへの旅

大原一興 著
A5判・184頁 本体2,500円+税

地域全体を博物館と見立て、その文化・風土を研究・保全・学習し、地域社会の次代の担い手を育てる博物館活動をエコミュージアムと呼び、まちおこしにつながる活動として注目される。その概要と先進諸国の事例を紹介。



痴呆を癒す建築

ヨーロッパとオーストラリアの設計事例20選

S.ジャッド 他共著 井上裕・浩子 訳
A5判・248頁 本体3,500円+税

グループホーム、看護ホーム、ホステルなど、痴呆の人々がグループで生活する多様な介護環境。その設計の原則と指針を先進的な事例を通して解説し、理想の介護環境の姿を探る。

建築ガイドブック

鹿島の建築ガイドブックは持ち歩きに便利な四六判サイズで
近代建築から最新の現代建築まで、代表的建築物を各コース別に紹介します。



東京現代建築ガイドII 2000's

松葉一清 著

四六判・256頁 本体2,800円+税

90年代に首都圏に建てられた名建築204選

11の特色のある地域別にコースを作成。
首都圏の様々な地域とそこに分布する建物を見ることにより
東京の90年代を様々な旅することができる。
最新の現代建築に興味を持つ読者に必携の建築ガイド。

【主要目次】 A地区—新宿、B地区—渋谷周辺、青山、恵比寿、C地区—皇居周辺、D地区—臨海副都心、E地区—品川、太田、目黒、
F地区—隅田川沿岸、G地区—豊島、足立、板橋、H地区—杉並、世田谷、I地区—多摩、西郊、J地区—横浜、K地区—幕張、
建築家索引、建物索引

●関連図書



東京現代建築ガイド

松葉一清 著

四六・250頁 本体2,800円+税

東京を中心とした首都圏に1980年代以降建てられた
現代建築の中から200点を選んで紹介する。地
域別に分けられた13のコースの冒頭にはガイドマ
ップがついており、戦後の名建築も所要所で紹介。



ヨコハマ建築案内 1950-1994

吉田銅市 著

四六・224頁 本体2,700円+税

横浜を中心に神奈川県に建てられた1950年以降
の代表的建築を紹介する。神奈川県立近代美術館
からランドマークタワーまで、気鋭の建築史家が語
る詳細な解説と美しい写真で構成されたガイドブ
ックで、巻末に地図も入る。



近代建築ガイドブック [関東編]

東京建築探偵団 著 村松貞次郎、山口廣 顧問
四六・276頁 本体2,300円+税

官庁街、オフィス街、看板建築群、別荘地、産業遺跡
など特徴ある24コースに沿って作品を写真と共に
紹介。建築様式、設計者の紹介も盛り込み、首都圏
の近代100年の変貌が建物を通して読みとれる。
学生、一般向けガイド。



ヨコハマ建築暮情

吉田銅市 著

四六・232頁 本体2,800円+税

横浜を中心に神奈川県に現存する約90棟の建築に
光を当て、エキゾチック・ヨコハマ、公共建築、銀行、
教会、ミッションスクール、別荘建築、工場、ホテル
などテーマ別に紹介するもの。巻末にガイドブック
を収録。



近代建築ガイドブック [関西編]

石田潤一郎、沢田清、柴田正己、中川理、福田晴虎 共著
四六・312頁 本体2,800円+税

好評の関東編に続く第2弾。大阪の商業の中心、船
場の商業建築にはじまりミナミの歓楽街、橋めぐり、
堺の工場群、港町神戸の洋館、兵庫県の産業遺跡、
あめりか村、文化の都京都の大学施設等々、24コ
ース600余りの作品。



西洋館漫步 建築スケッチの旅

田中薫 著

四六・248頁 本体1,900円+税

筆者が数年に亘ってスケッチをして歩いた、北海道
から台湾に至る西洋館を、印象記と共に紹介する
もの。それぞれの土地に息づく建物が、長い年月
を経てどのような形で生きつづけているかを生き
生きとした文章で語る。

SD選書

本選書は、高度に細分化し、専門化した現代文明のあらゆる課題をあつかいながら、新鮮でダイナミックな視点を提供し、各領域をつなぐ架け橋となるものです。

写真・図版を豊富にとり入れて、ヴィジュアルに編集し、今日の造形文化に関心のあるすべての人々の感性と知性に鋭く訴えかける、新しいタイプの選書です。

建築思潮 (建築家の建築論)

15 ユルバニズム

ル・コルビュジエ 著 樋口清 訳 本体1,800円

17 私と日本建築

A.レーモンド 著 三沢浩 訳 本体2,000円

21 建築をめざして

ル・コルビュジエ 著 吉阪隆正 訳 本体1,800円

33 輝く都市

ル・コルビュジエ 著 坂倉準三 訳 本体1,800円

49 住宅論

藤原一男 著 本体1,800円

95 建築とは何か

B.タウト 著 藤田英雄 訳 本体1,800円

96 続・住宅論

藤原一男 著 本体1,800円

111 モデュロール I

ル・コルビュジエ 著 吉阪隆正 訳 本体1,800円

112 モデュロール II

ル・コルビュジエ 著 吉阪隆正 訳 本体1,800円

120 人間の家

ル・コルビュジエ 他共著 西沢信弥 訳 本体1,800円

128 オレゴン大学の実験

C.アレグザンダー 著 宮本雅明 訳 本体1,800円

138 三つの人間機構

ル・コルビュジエ 著 山口知之 訳 本体980円

141 続建築とは何か

B.タウト 著 藤田英雄 訳 本体980円

142 四つの交通路

ル・コルビュジエ 著 井田安弘 訳 本体980円

143 ラスベガス

R.ヴェンチュリ 他共著 石井和雄 他共訳 本体1,800円

148 東方への旅

ル・コルビュジエ 著 石井勉 他訳 本体980円

154 住宅と宮殿

ル・コルビュジエ 著 井田安弘 訳 本体1,200円

157 エスプリ・ヌーヴォー

ル・コルビュジエ 著 山口知之 訳 本体1,200円

158 建築について(上)

F.L.ライト 著 谷川睦子 他共訳 本体1,800円

159 建築について(下)

F.L.ライト 著 谷川睦子 他共訳 本体1,200円

172 建築家の発想

石井和雄 著 本体1,800円

174 建築の多様性と対立性

R.ヴェンチュリ 著 伊藤公文 訳 本体1,800円

185 プレシジョン(上)

ル・コルビュジエ 著 井田安弘 他共訳 本体1,500円

186 プレシジョン(下)

ル・コルビュジエ 著 井田安弘 他共訳 本体1,500円

191 アルド・ロッシ自伝

A.ロッシ 著 三宅理一 訳 本体1,800円

204 ミース・ファン・デル・ローエ

D.スペース 著 平野哲行 訳 本体1,800円

205 表現主義の建築(上)

W.ペーント 著 長谷川章 訳 本体1,500円

206 表現主義の建築(下)

W.ペーント 著 長谷川章 訳 本体1,500円

207 カルロ・スカルバ

A.F.マルチアノ 著 浜口オサミ 訳 本体1,800円

評論 (現代建築)

63 近代建築

V.スカーリー 著 長尾重武 訳 本体1,500円

82 アメリカの建築とアーバニズム(上)

V.スカーリー 著 香山壽夫 訳 本体980円

83 アメリカの建築とアーバニズム(下)

V.スカーリー 著 香山壽夫 訳 本体980円

97 建築の現在

長谷川章 著 本体980円

131 アメリカ住宅論

V.スカーリー 著 長尾重武 訳 本体980円

139 インターナショナル・スタイル

H.R.ヒッチコック 他共著 武沢秀一 訳 本体1,800円

144 ル・コルビュジエ

C.ジェンクス 著 佐々木宏 訳 本体1,800円

150 近代建築の失敗

P.ブレイク 著 星野郁美 訳 本体1,800円

155 イタリアの現代建築

V.グレゴッティ 著 松井宏方 訳 本体1,200円

212 建築計画の展開

W.M.ペニヤ 著 本田邦夫 訳 本体1,500円

建築家論

7 フランク・ロイド・ライト

谷川正己 著 本体1,800円

34 アルヴァ・アアルト

武藤章 著 本体1,800円

123 ライトと日本

谷川正己 著 本体1,800円

132 タリアセンへの道

谷川正己 著 本体980円

165 アドルフ・ロース

伊藤哲夫 著 本体1,200円

170 ブルネッレスキ

G.C.アルガン 著 浅井朋子 訳 本体1,500円

181 ジュゼッペ・テッラーニ

B.ゼーヴィ 著 鶴沢隆 訳 本体1,500円

187 オットー・ワグナー

H.グレッツェン 他共著 伊藤哲夫 他共訳 本体1,800円

189 ルイス・マンフォード

木原武一 著 本体1,500円

196 オーギュスト・ペレ

吉田綱市 著 本体1,500円

197 アントニオ・ガウディ

鳥居徳敏 著 本体1,800円

217 ボッロミーニ

G.C.アルガン 著 長谷川正允 訳 本体1,800円

218 ヴィオレ・ル・デュク

羽生修二 著 本体1,800円

219 トニー・ガルニエ

吉田綱市 著 本体1,800円

222 パラディオへの招待

長尾重武 著 本体1,800円

226 ウィリアム・モリス

藤田治彦 著 本体1,800円

227 エーロ・サーリネン

穂積信夫 著 本体1,800円

建築論

78 実存・空間・建築

C.ノルベルグ=シュルツ 著 加藤邦男 訳 本体1,800円

124 空間として建築(上)

B.ゼーヴィ 著 栗田勇 訳 本体1,800円

125 空間として建築(下)

B.ゼーヴィ 著 栗田勇 訳 本体1,800円

130 建築空間…尺度

P.ブドン 著 中村貴志 訳 本体980円

134 思想としての建築

栗田勇 著 本体980円

168 モラリティと建築

D.フトキン 著 榎本弘之 訳 本体1,200円

SD選書

221 古典建築の失われた意味

G.ハーシー 著 白井秀和 訳 本体1,800円

224 芸術としての建築

S.アバークロンビー 著 白井秀和 訳 本体1,800円

都市論

22 メガロポリス

J.ゴットマン 著 木内信蔵 訳 本体1,500円

58 新しい都市の人間像

R.イールズ 他共編 木内信蔵 監訳 本体780円

81 爆発するメトロポリス

W.H.ホワイト Jr. 他共著 小島将志 訳 本体980円

85 アーバン・ゲーム

M.ケンツレン 著 北原理雄 訳 本体980円

162 見えがくれする都市

横文彦 他共著 本体1,800円

164 環境計画論

田村明 著 本体1,800円

171 装置としての都市

月尾嘉男 著 本体1,500円

208 都市の街割

材野博司 著 本体1,500円

210 まちづくりの新しい理論

C.アレグザンダー 他著 難波和彦 監訳 本体1,800円

228 都市デザインの系譜

相田武文、土屋和男 共著 本体1,800円

232 都市・住宅論

東孝光 著 本体1,800円

236 都市デザイン 野望と誤算

ジョナサン・バーネット 著 兼田敏之 訳 本体2,100円

デザイン

1 現代デザイン入門

勝見陽 著 本体1,800円

5 日本デザイン論

伊藤ていじ 著 本体1,800円

42 道具考

榮久庵憲司 著 本体1,500円

56 環境とデザイン

G.エコボ 著 久保貞 訳 本体2,000円

149 建築鑑賞入門

W.W.コーディル 他共著 六鹿正治 訳 本体1,800円

156 バウハウス

杉本俊多 著 本体1,800円

167 水空間の演出

鈴木信宏 著 本体1,800円

178 木のころ

G.ナカシマ 著 神代雄一郎 他共訳 本体1,800円

182 水のデザイン

D.バーミングハウス 著 鈴木信宏 訳 本体1,800円

188 環境照明のデザイン

石井幹子 著 本体1,800円

192 屋外彫刻

M.A.ロビネット 著 千葉成夫 訳 本体1,800円

194 トーネット曲木家具

K.マンク 著 宿輪吉之典 訳 本体1,500円

198 インテリアデザインとは何か

三輪正弘 著 本体1,800円

202 椅子のデザイン小史

大廣保行 著 本体1,800円

203 都市の道具

GK研究所、榮久庵祥二 著 本体1,500円

209 日本の伝統工具

土田一 著 秋山実 写真 本体1,800円

215 行動・文化とデザイン

清水忠男 著 本体1,800円

216 環境デザインの思想

三輪正弘 著 本体1,800円

223 ディスプレイデザイン

魚成祥一郎 監修 清家清 文 本体1,800円

225 フラクタル造形

三井秀樹 著 本体1,800円

住宅

111 プライバシーとコミュニティー

S.シャマイエフ 他共著 岡田新一 訳 本体1,800円

110 現代のコートハウス

D.マッキントッシュ 著 北原理雄 訳 本体980円

133 建築VSハウジング

M.ボウリー 著 山下和正 訳 本体980円

190 いえとまち

鈴木成文 他共著 本体1,800円

211 建築環境論

岩村和夫 著 本体1,800円

日本建築史

4 江戸と江戸城

内藤昌 著 本体1,800円

12 新桂離宮論

内藤昌 著 本体2,000円

37 日本建築の空間

井上充夫 著 本体1,800円

53 茶匠と建築

中村昌生 著 本体1,800円

152 日本の近代建築(上)

稲垣栄三 著 本体1,800円

153 日本の近代建築(下)

稲垣栄三 著 本体1,500円

173 日本の空間構造

吉村貞司 著 本体1,800円

235 間(ま) 日本建築の意匠

神代雄一郎 著 本体2,400円

世界建築史

25 都市形成の歴史

A.コーン 著 星野芳久 訳 本体1,800円

66 天上の館

J.サマーソン 著 鈴木博之 訳 本体2,000円

140 北欧の建築

S.E.ラスムッセン 著 吉田哲郎 訳 本体980円

169 ペルシア建築

A.U.ボーブ 著 石井昭 訳 本体1,500円

175 広場の造形

C.ジッテ 著 大石敏雄 訳 本体1,800円

176 西洋建築様式史(上)

F.バウムガルト 著 杉本俊多 訳 本体1,800円

177 西洋建築様式史(下)

F.バウムガルト 著 杉本俊多 訳 本体1,800円

195 劇場の構図

清水裕之 著 本体1,800円

200 ヴェネツィア

陣内秀信 著 本体1,800円

213 スペイン建築の特質

F.チュエッカ 著 鳥居徳敬 訳 本体1,500円

214 アメリカの巨匠たち

P.ブレイク 他 著 小林克弘 他共訳 本体1,800円

SD選書

美術・文化論

8 きもの文化史

河越実英 著 本体1,800円

14 現代絵画の解剖

木村重信 著 本体2,000円

19 芸術空間の系譜

高階秀爾 著 本体1,800円

20 日本美の特質

吉村貞司 著 本体1,800円

27 イタリアの美術

A.プラント 著 中森義宗 訳 本体2,000円

35 幻想の建築

坂崎乙郎 著 本体1,500円

46 キュビズムへの道

D.H.カーンワイラー 著 千足伸行 訳 本体1,800円

55 空間の生命

坂崎乙郎 著 本体1,500円

75 部族社会の芸術家

M.W.スミス 編 木村重信 他共訳 本体780円

106 光の死

H.ゼーデルマイヤ 著 森洋子 訳 本体980円

114 ロマネスク 上

H.フォション 著 神沢栄三 他共訳 本体1,800円

115 ロマネスク 下

H.フォション 著 神沢栄三 他共訳 本体1,800円

116 ゴシック 上

H.フォション 著 神沢栄三 他共訳 本体1,800円

117 ゴシック 下

H.フォション 著 神沢栄三 他共訳 本体1,800円

146 鏡:虚構の空間

由水常雄 著 本体980円

234 さあ横になって食べよう

バーナード・ルドフスキー 著 奥野卓司 訳 本体1,800円

環境・アメニティ・都市

28 明日の田園都市

E.ハワード 著 長素連 訳 本体1,800円

103 プライド・オブ・プレイス

シヴィック・トラスト 著 井出久登 他共訳 本体980円

118 アメリカ大都市の死と生

J.ジェコブス 著 黒川紀章 訳 本体1,800円

119 遊び場の計画

R.ダットナー 著 神谷五男 他共訳 本体1,800円

129 都市はふるさと

F.レンツロー・マイス 著 武基雄 他共訳 本体980円

135 人間のための都市

H.ペーターズ 著 河合正一 訳 本体980円

136 都市憲章

磯村英一 著 本体980円

147 イタリア都市再生の論理

陣内秀信 著 本体1,800円

220 住環境の都市形態

P.バヌレ 他共著 佐藤方俊 訳 本体1,800円

233 ふれあい空間のデザイン

清水忠男 著 本体1,800円

素材・技術

9 素材と造形の歴史

山本学治 著 本体1,800円

36 カテドラルを建てた人びと

J.ジャンペル 著 飯田喜四郎 訳 本体1,800円

67 木の文化

小原二郎 著 本体1,800円

72 ヴィラール・オヌクール

藤本康雄 著 本体780円

89 江戸建築と本途帳

西和夫 著 本体980円

183 ゴシック建築の構造

R.マーク 著 飯田喜四郎 訳 本体1,500円

201 自然な構造体

F.オットー 著 岩村和夫 訳 本体1,800円

庭・ランドスケープ

23 日本の庭園

田中正大 著 本体1,800円

43 ヨーロッパの造園

岡崎文彬 著 本体1,800円

87 日本の公園

田中正大 著 本体1,800円

98 都市の景観

G.カレン 著 北原理雄 訳 本体1,800円

163 街の景観

G.パーク 著 長素連 他共訳 本体1,200円

193 作庭記からみた造園

飛田範夫 著 本体1,800円

229 サウンドスケープ

鳥越けい子 著 本体1,800円

230 風景のコスモロジー

吉村元男 著 本体1,800円

231 庭園から都市へ

材野博司 著 本体1,800円

心理学

145 デザインの認識

R.ソマー 著 加藤常雄 訳 本体980円

161 建築形態のダイナミクス(下)

R.アルンハイム 著 乾正雄 訳 本体1,200円

166 空間と情緒

箱崎総一 著 本体1,500円

フィールドワーク(デザインサーベイ・人類学)

54 住居空間の人類学

石毛直道 著 本体1,500円

59 京の町家

島村昇他 編 本体1,800円

61 住まいの原型 I

泉靖一 編 本体1,500円

76 キモノ・マインド

B.ルドフスキー 著 新庄哲夫 訳 本体2,000円

77 住まいの原型 II

吉阪隆正他 共著 本体2,000円

126 かいわい

材野博司 著 本体1,800円

184 建築家なしの建築

B.ルドフスキー 著 渡辺武信 訳 本体1,800円

情報

71 現代建築事典

W.ベント 編 浜口隆一 他監修 本体1,900円

91 イギリス建築の新傾向

R.ラングウ 著 鈴木博之 訳 本体980円

6月号 5月25日発売

SD

本体1905円+税

特集：クライン・ダイサム・アーキテクツ

クライン・ダイサム・アーキテクツの、これまでのデザイン活動の全貌を紹介する。この建築設計事務所は、ロンドンの王立芸術大学を出たアストリッド・クラインとマーク・ダイサムのふたりがパートナーシップを組んで日本で活動しているもの。

事例：ヨーガン・レーン ショップデザイン／IDEE WORKSTATIONショールーム／NHK長野エントランスロビー家具／Festival UK'98 Pavilion／ブリティッシュ・カウンスル・インフォメーションセンター／他

http://www.kajima-publishing.co.jp 鹿島出版会 ☎03-5561-2551

6月号 5月18日発売

建築技術

本体1762円+税

特集：環境をサポートする建築技術 監修：岡建雄（宇都宮大学教授）環境配慮設計ガイド、グリーン庁舎指針などが作成され、環境問題が急速にクローズアップされてきました。ここでは環境に配慮したグリーンビルを構築するために、負荷低減のためのハード・ソフトを実務者に理解しやすく解説します。
エネルギー／室内環境／負荷を抑制する建築システム／負荷を抑制する設備システム／長寿命／環境性／世界のグリーンビル
連載：建築技術のアクション／次世代省エネ基準住宅工法評定

http://www.kenchiku-tosho.co.jp/gijutsu 建築技術 ☎03-3222-5951

隔月刊
No. 27 5月16日発売

造景

本体2800円+税

〈特集1〉環境・リサイクルのまちづくり

北九州市／野木町／水俣市／川崎市／東京都

〈特集2〉マルクト市の立つ広場

ドイツのマルクトプラッツの形態

〈連載〉同潤会アパートとまちづくり 清砂通アパートメント

伝統の街並みを訪ねる 青州市回族の街並み

http://www.ksknet.co.jp 建築資料研究社 ☎03-3986-3239

隔月刊
No. 42 5月6日発売

confort

本体1905円+税

〈特集〉：浄化と再生の風呂

ベーター・ズントー 温泉を湛える石の空間
浴室デザインの新発想／小さな浴室を豊かにする設計手法／メキシコの蒸気浴／セルフビルの風呂場／古寺に見る風呂の源流／木の香りのする浴室をつくる／水栓カタログ

〈連載〉：住宅巡礼 イームズ自邸

生き続けるモダニズム建築 パレスサイドビル

http://www.ksknet.co.jp 建築資料研究社 ☎03-3986-3239

6月号 6月1日発売

住宅建築

本体2333円+税

〈座談会〉住宅の性能表示制度について

松村秀一×三井所清典×立松久昌

〈特集1〉木心の好い家

中東壽一／加藤武志／三澤文子

〈特集2〉二人の設計者が考える九州の住まいづくり

東大森裕子／土公純一

〈連載〉復興思想の社会史 江戸城から皇城へ

町場技術探検隊・風雲編（最終回）

http://www.ksknet.co.jp 建築資料研究社 ☎03-3986-3239

2000

5

6

ARCHITECTURAL MAGAZINES INFORMATION

■ご購入は最寄りの書店でお願いいたします。ここに掲載してある雑誌は、建築関係雑誌発行出版社の協力により最新号を告知しています。雑誌の一部は予定価格の表示がされておらず、最新のものを告知しています。詳しくは各出版社にお問い合わせください。（BNF事務局）

6月号 5月29日発売

商店建築

本体1943円+税

業種特集1●カフェ

デザートカフェ クレセンテ（立川）／マッズプランニング 珈琲 クラブ（高松）／グッドデザインスタジオ カフェ ネスカフェ（大阪）／乃村工務社 新宿タカノフルーツバーラー（新宿）スリーコート 他11店
付帯記事1 ◆カフェのデリバリーカウンター 2 ◆サロンリポート

業種特集2●美容室&理容室

美容室 ファンク（福井）／鍋屋昌明 美容室 add（大阪）／文田デザイン
理容 六甲（名古屋）／タカラスペースデザイン 他8店

http://www.sk-club.co.jp

商店建築社 ☎03-3363-5770

商店建築増刊

創刊2号 7月上旬発売

I'm home.

本体1905円+税

〈主な内容〉デザイナーのつくる非日常のあるホームデザイン
上質なデザインと上質な暮らしをテーマにインテリアデザイナーや建築家による都市型ホームデザインを多数紹介します

特集／海の暮らし、山の暮らし

海と山のウイークエンド&リゾートハウスのデザインを紹介

特集／バルコニーガーデンのデザイン

広告企画／ナチュラルにこだわるインテリアパーツ 他

http://www.sk-club.co.jp

商店建築社 ☎03-3363-5770

別冊商店建築
好評発売中

SKブックス

本体 ⑦1400円+税
他1800円+税

シリーズSKブックスは読む商店建築。設計のコツや施工現場で直面するトラブルを具体的に解説。成功するための商品づくり、売り場づくり、繁盛店、消費動向やその背景を豊富な実例をもとにレポートします。

〈好評発売中〉①よくわかる現場学 ②アイラブレストラン

③困ってしまった設計の話 ④急成長するHMRの秘密

⑤クレーム・トラブル・バスターズ ⑥飲食トレンド最前線

〈4月発売予定〉⑦空の高さ ⑧U.S.A.ショップ・ウエーブ2000

http://www.sk-club.co.jp

商店建築社 ☎03-3363-5770

My GARDEN 別冊
好評発売中

GARDEN&LANDSCAPE

本体1429円+税

特集ーロビン・ウィリアムスの世界

建築・景観設計の専門家のための新シリーズがスタート
第1号はグリーン博みやぎ'99で日本で初めて公開されたロビン・ウィリアムスの英国式庭園を徹底解説。

ガーデンデザイン実践講座一庭を飾る／遊びの場所としての庭／ガーデンプランのいろいろ 植栽デザインー造園施工とメンテナンス／ガーデンハウスのウエザリング／日本庭園との違い／オリジナル植栽図面／植物リスト／他

http://www1.newweb.ne.jp/wa/marumo-p/ マルモ出版 ☎03-3496-7046

季刊
No. 20 5月16日発売

LANDSCAPE

本体2505円+税

特集ー集合住宅の中庭 都市を蘇生させる中庭空間

同潤会アパートが残した中庭とコミュニティ／マンション・ランドスケープ30年の変貌と中庭／ワークショップでスタートした「みんなの庭づくり」／他

牧野植物園／バトルクリーフ市高崎公園●淡路花博「ジャパンフロア2000」／商店街が生きるまちづくり「粋なまち神楽坂」／アメリカのコミュニティランドスケープ●連載ー現場の知恵袋ー建設システムの課題と解決に向けて／他

http://www1.newweb.ne.jp/wa/marumo-p/ マルモ出版 ☎03-3496-7046

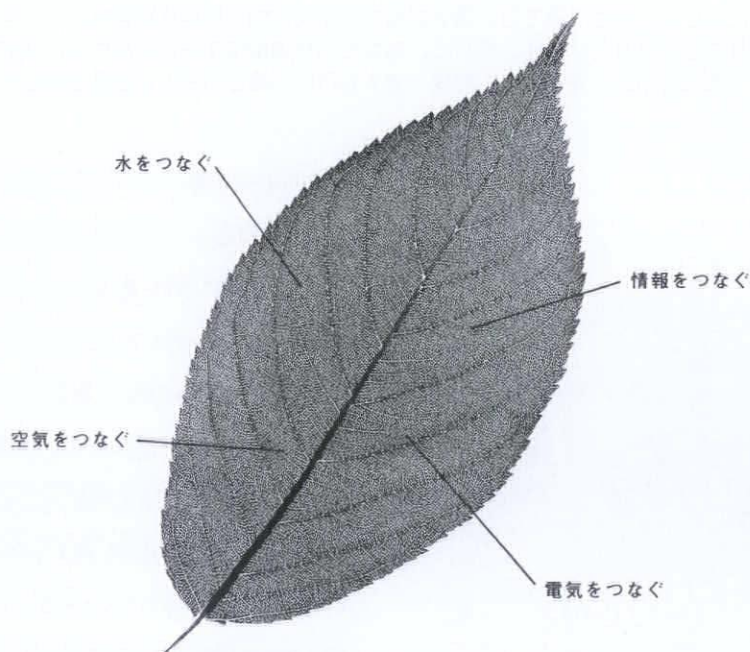
ビルの、工場の、街の、 すみずみに、つながろう。

私たちの仕事は、ビルに、工場に、
街に、生命を与える葉脈として、
そのすみずみにつながっています。
もっと、人が快適になる環境へ。

総合設備業の

リーディング・カンパニーとして、
先端の技術で、高度な未来を
提案し続けます。

あなたと快適をむすびます。



住友電設株式会社

大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 Tel 06(6537)3400
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 Tel 03(3454)7311

営業種目：電気設備／空調・給排水・衛生設備／
プラント設備／情報通信設備／電力流通設備／その他

SUMINOE



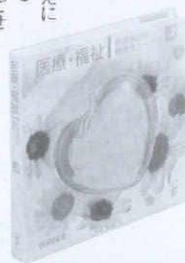
優しさがつたわる暮らし。

高齢者や障害者、そして看護に携わる皆さんに負担の少ない空間づくりを考えました。

「フリースイゼーション」——高齢者も若者も、障害者も健常者もすべての人が共に生き、やすらぎある暮らしを享受する。この考えに基づいたスミノエ医療・福祉施設用カーテンは、暮らしにくさを演出するデザイン性、治療効果や色覚の衰えに配慮したカラーコーディネートに合わせ、現場をサポートするさまざまな機能を備えています。高齢者や障害者が安心して過ごせる介護スタッフにとっても働きやすい空間へ——。

スミノエは、人への優しさに満ちた、快適な環境づくりをお手伝いいたします。

●60柄—277配色 ●抗菌防臭性、消臭性、防汚性、遮光性、制電性、洗濯性、防炎性など施設に応じたさまざまな機能を備えています。



医療・福祉 各種施設用 機能性カーテン

スミノエ

ゆたかなインテリアライフをお届けする信頼のブランド
住江織物株式会社

■東京支店／東京都品川区西五反田2-30-4 BR五反田ビル5F TEL. (03) 5434-2928 FAX. (03) 5434-2206
■本社・大阪支店／大阪市中央区南船場3-11-20 TEL. (06) 6251-0698 FAX. (06) 6241-5156



ビルひとつとってみても、電気設備から空調設備・給排水設備など、中電工の技術はこんなに生かされています。そして、あなたの快適環境を支えるために、送電・配電・地中線工事などの他に先端技術の開発・導入も行い、幅広い分野で設備工事を手掛けています。



エネルギー関連

情報通信関連

電気通信工事の設計・施工

鋼構造物工事の設計・施工

土木建築一式工事の設計・施工

空調管工事の設計・施工

環境関連

一般水道施設工事の設計・施工

防災・消防施設工事の設計・施工

電気機器の設計・製作・販売・修理・据付・保守

電気設備工事の設計・施工

送配電線工事等の設計・施工

しっかりと技術で明日をささえます。



株式会社 中電工

本店／〒730-0855 広島市中区小網町6番12号 TEL082-291-7411
支店／広島・岡山・山口・島根・鳥取・東京・大阪

広告目次

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命下さい(五十音順)

●共栄通信社

東京——東京都中央区銀座8-2-1

新田ビル (3572) 3381

FAX (3572) 3590

大阪——大阪市北区西天満3-6-8

笹屋ビル06 (6362) 6515

FAX06 (6362) 6052

●建報社

東京——東京都文京区湯島2-30-8

(3818) 1961

FAX (3818) 1968

大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9

昭栄ビル 06 (6231) 4548

FAX06 (6227) 0268

●新建社

神奈川県三浦郡葉山町堀内533

0468-77-1207

FAX0468-77-1208

●中外

大阪——大阪市北区浪花町14-25

日本生命天六ビル06 (6379) 1791

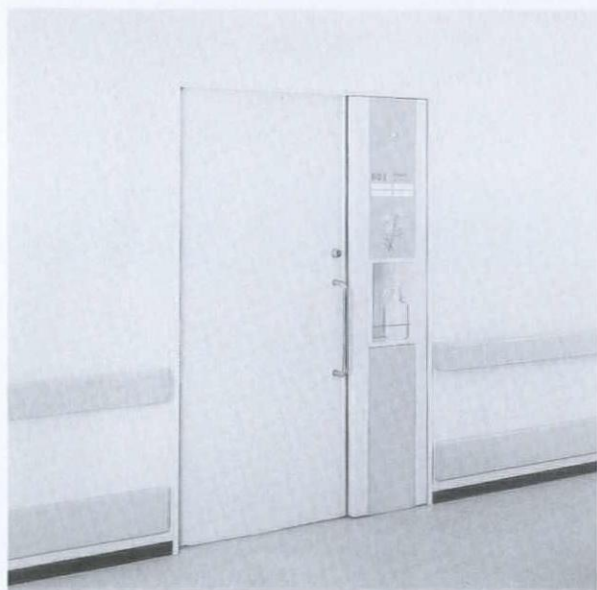
東京——東京都千代田区神田須田町2-5-2

須田町佐志田ビル (3255) 8411

名古屋——名古屋市中区錦2-2-13

名古屋センタービル052 (221) 7641代

ア	株朝日工業社	A14
カ	株関電工	A1
	鹿島	A2・A3
	軽井沢ホテル鹿島ノ森	A4
	株川島織物販売	81
キ	株きんでん	69
ク	栗原工業株	A9
	株くろがね工作所	A14
コ	コクヨ株	A9
	株弘電社	A7
サ	三機工業株	82
シ	昭和銅機株	88
	昭和アステック株	99
ス	住友電設株	A11
	住江織物株	A12
タ	高砂熱学工業株	表3
	大興物産株	A6
	株タジマ	72
チ	株中電工	A12
ト	株東リ	A8
	株トーエネック	A8
	東洋熱工業株	97
ニ	株西原衛生工業所	A10
ヒ	株日立製作所	表4
ホ	ホテルイースト21東京	A5
ミ	三菱パーリントン株	81
	三菱電機株	100
ヤ	矢崎総業株	表2
	株ヤナセ	98
ワ	YKKアーキテクチュラルプロダクツ株	87



設備型子扉付き

アキュドアユニット

病室の室外に必要な諸機能としてナースコールの室外機、サイン表示、手指消毒液収納ボックス等がありますが、それらの子扉の中に集約しデザイン処理した新型のアキュドアユニットです。

廊下下の壁面に各種機器類を埋め込む必要はなく、スッキリとした壁面とすることができます。

また、子扉式を採用することにより、引戸の巾を狭くすることができ、その分だけ引戸の軽量化とより軽い開閉性が得られます。

株式会社くろがね工作所

東京 〒108-0014 東京都港区芝5丁目 29-20 TEL 03-3455-2171 FAX 03-3453-4399
 大阪 〒550-0013 大阪市西区新町1丁目 4-26 TEL 06-6538-1060 FAX 06-6538-1061
 札幌・仙台・横浜・名古屋・金沢・三重・京都・神戸・岡山・広島・山口・高松・福岡 【工場】寝屋川・津・京都

<http://www.kurogane-kks.co.jp/>

未来に向けて...

限りある資源
 限りある空間の中で
 より快適な環境づくりの
 ために努力しています。



●営業品目

空気調和・冷暖房・給排水・衛生設備・設計施工



株式会社朝日工業社

本社・東京支社 〒105-0013 東京都港区浜松町1-25-7 電話 03(3434)5711
 大阪支社 〒532-0031 大阪市淀川区加島1-58-59 電話 06(6302)2273
 支店 北海道／東北／北関東／横浜／名古屋／中国／九州